

島根大学考古学研究室調査報告第3冊

松江市手間古墳発掘調査報告 薬師山古墳出土遺物について

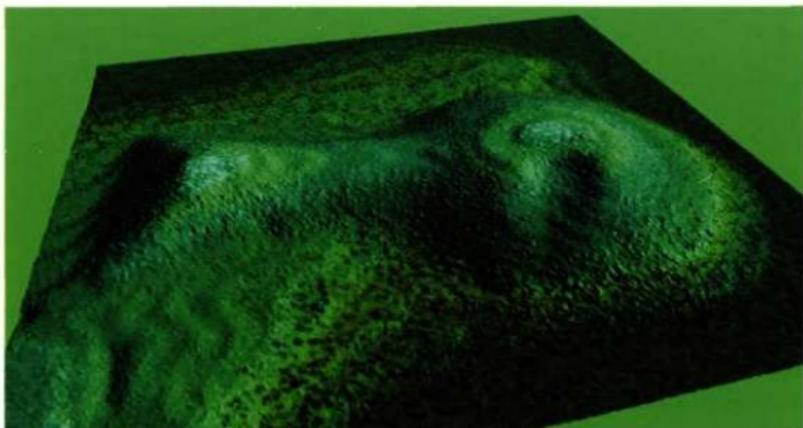


2002年1月

島根大学法文学部考古学研究室

第1部

松江市手間古墳発掘調査報告



(VISTAPRO 2による)

A Report of the Excavation of Temma Kofun, An Ancient Tumulus in Idumo

2002

Edited by Watanabe Sadayuki
Department of Archaeology, Shimane University

SUMMARY

Temma Kofun, located on a hill overlooking a view of the Ohashi River, which runs through Matsue City, is the biggest tumulus of *zempo-koen* type in eastern Idumo, measuring sixty-six meters in length. We excavated that ancient tumulus from 1996 to 2000, for the purpose of discussing its original shape and the date of construction. Though unfortunately the stone chamber had been completely destroyed, our excavation showed how to construct the mound and we found not only a lot of potsherds of *Sueki* ware and *Haniwa* but also some fragments of the harness as grave goods. We conclude from the study of those materials that Temma Kofun was built in the sixth century A.D. for one of the assistant chiefs in eastern Idumo, ranking next to the burier of Yamashiro-Futagoduka Kofun, the largest tumulus in the whole of Idumo.

序

島根大学考古学研究室は1981年4月に設置された。当初は法文学部文学科歴史学教室内にあって、日本史学研究室から移った渡辺と同年9月に着任された田中義昭先生とが専任スタッフとして活動を開始した。その後1996年度からは、学部改組によって新たに発足した社会システム学科行動社会講座に属することになり、今日に至っている。1999年春には、研究室の黎明期に永年にわたり続取りをされた山中先生が停年退官され、代わって山田が着任して、新しい陣容でまた新たな課題に取り組んでいる。この間、70人近い専攻卒業生を送り出したほか、さまざまな調査活動を展開してきたことは、研究室のホームページ (<http://www.hist.shimane-u.ac.jp/kouko/>) にも紹介されている通りである。

研究室が実施した数々の調査研究活動は、あるいは教官の論文として、あるいは科学研修費補助金の報告や県市町村刊行の報告書としてまとめられ、世に問うてきた。またそれ以外に、研究室名で発行した報告書として、1992年の『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』と、1999年の『島根県安来市大成古墳第4・5次発掘調査報告書』がある。今回、松江市手間古墳の発掘調査報告をまとめるに当たり、これまで刊行した上記2冊をカウントして、研究室調査報告の第3冊として発刊することとした。

なお本書には第2部として、考古学専攻学生の授業科目「考古学実習Ⅱ」の課題として取り組んできた松江市薬師山古墳の出土品に関する再調査の成果を収録した。第2部の編集に当たった卒業生の石田爲成氏（現・立命館大学大学院生）の労を多としたい。

2001年9月

島根大学考古学研究室

渡辺 貞幸
山田 康弘

追記

本書校正後に、本学名誉教授山本清先生の讣報に接した。先生は山陰における考古学研究の実質的創始者であり、今日における山陰考古学の成果の多くは、先生のご業績の上に築かれていると言っても過言ではない。本書で報告する2古墳の調査成果についても、その出発点はともに山本先生のご研究であったことを銘記して、先生のご冥福をお祈りするものである。

例　　言

1. 本編は、島根県松江市竹久町に所在する手間古墳の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、1996年3月（第1次）、1999年8・9月（第2次）、および2000年8月（第3次）に実施した。第1次調査は島根大学考古学研究室と島根大学考古学研究会の共同で、第2次調査以降は島根大学考古学研究室が主体となって行った。
3. 出土品の整理作業と報告書作成の諸作業には考古学専攻学生が当たり、一部の作業は、島根大学法文学部の授業科目「考古学実習II」の一環として行った。
4. 本編に使用した手間古墳の墳丘測量図は、島根大学考古学研究会が作成したものである。
5. 古墳周辺地形図と墳丘測量図に示した座標は、昭和43年10月11日建設省告示第3059号に定める平面直角座標第Ⅲ系によるものである。
6. 本編の発掘区画面類の方位は、調査時の磁北である。
7. 出土遺物のうち金属製品については、島根県埋蔵文化財調査センターの松尾充晶氏の指導のもとに整理作業を行い、同氏の原稿をいただくことが出来た。また、同センターのご厚意でX線撮影をしていただいた。記して感謝の意を表したい。
8. 本編の執筆は調査参加者を中心に研究室学生の合議によって行い、渡辺貞幸が全体を総括し編集した。なお、本文に主要な文責者の氏名を示した。
9. 本編掲載の遺物および実測図、写真などの資料は、島根大学考古学研究室で保管している。

発掘調査参加者

- (1996年) 渡辺貞幸、竹廣文明、水口晶郎、野崎祐臣、木下 誠、安部孝幸、櫛山範一、田浪文雄、藤永照隆、上原香里、大野暎了、片倉愛美、平田朋子、細山美樹、石田陽子、神柱靖彦、竹内奈美、長井 哲、楳原桃代、渡辺桂子、岩田雅希子、魏 畑、竹内 希、藤原光代、宮崎克美、山内英樹、森山祐二
- (1999年) 渡辺貞幸、竹廣文明、山田康弘、會下和宏、竹内 希、稻谷知子、沖塩陽一郎、坂上祐一、佐々木知子、樋口武史、増田のぞみ、水町裕子、市園ゆか里、太田 奏、木谷麻衣子、山平 秋、飛田恵美子、米森恭子、厚見 崇、井上志峰、岡 英恵、衣笠沙織、谷 洋一郎、松本弥生、三浦憲太郎、森本康子、和田守加奈
- (2000年) 渡辺貞幸、坂上祐一、樋口武史、太田 奏、木谷麻衣子、山平 秋、飛田恵美子、米森恭子

謝 辞

発掘調査および出土遺物の整理に当たっては、多くの方々のお世話になりました。ここに御芳名を記し、御礼申し上げます（敬称略）。

（竹久町関係）角 光朗、廣江朝美、矢山金市、竹矢公民館

（島根大学）三浦 清、澤田順弘、高安克巳

（島根県埋蔵文化財調査センター）松本岩雄、大本公良、松尾光晶

（島根県立松江北高等学校）人谷見二

目 次

1. 古墳の環境と発掘調査の経過	1
2. 発掘調査の成果	7
I. 第1次調査	8
II. 第2次調査	22
III. 第3次調査	30
3. 出土遺物	35
I. 須恵器	35
II. 墓輪	43
III. 金属製品	50
4. まとめと若干の考察	55

図 版 目 次

図版 1	1 手間古墳周辺航空写真	2 手間古墳近景
図版 2	1 後円部(K)トレンチ	2 K4 トレンチ
図版 3	1 K1 トレンチ上方	2 K1 トレンチ下方
	3 K2 トレンチ上方	
図版 4	1 K2 トレンチ下方	2 K2～3 トレンチ
	3 K3 トレンチ下方	
図版 5	1 前方部(Z)トレンチ	2 Z3 トレンチ
図版 6	1 Z1 トレンチ上方	2 Z1 トレンチ下方
	3 Z2 トレンチ	
図版 7	1 「造出」状高まりの現況	2 後円部北西(KN)トレンチの設定
	3 KN1 トレンチ	
図版 8	1 前方部南東(ZS)トレンチ	2 ZS トレンチ
図版 9	1 鞍部(A)トレンチの設定	2 A トレンチ
	3 A トレンチ接写	

図版10	1 後円部南(KS)の現況 3 KS-A東区(西壁セクション)	2 KSトレンチ
図版11	1 KS-A東区石材出土状態	2 同上 面取りされた石
図版12	1 KS-B区 3 KS-B西区	2 KS-B東区
図版13	1 T1・2トレンチ 3 T2トレンチ	2 T1トレンチ
図版14	1 T3トレンチの設定 3 T3トレンチ北方	2 T3トレンチ南方(後円部側)
図版15	1 須恵器 子持壺(1)	2 須恵器 子持壺(2)
図版16	1 須恵器 子持壺(3)	2 須恵器 子持壺(4)
図版17	1 須恵器 壺(1)	2 須恵器 壺(2)・壺
図版18	1 墓輪 円筒埴輪(1)	2 墓輪 円筒埴輪(2)
図版19	1 墓輪 円筒埴輪(3)	2 墓輪 円筒埴輪(4)
図版20	1 墓輪 円筒埴輪(5)	2 墓輪 形象埴輪
図版21	1 金属製品(表)	2 金属製品(裏)

挿 図 目 次

第1図 手間古墳位置図 1	1
第2図 手間古墳位置図 2	2
第3図 手尚古墳周辺地形図	3
第4図 手間古墳測量図	5
第5図 トレンチ配置図	7
第6図 後円部トレンチ土層断面図	9~10
第7図 前方部トレンチ土層断面図	13~14
第8図 段築復元案	15~16
第9図 後円部北西トレンチ土層断面図	19~20
第10図 前方部南東トレンチ土層断面図	21
第11図 後円部南トレンチ配置図	22
第12図 後円部南トレンチ土層断面図	25~26
第13図 後円部南トレンチA区における石の出土状況	27
第14図 軸部トレンチ土層断面図	28

第15図 「造出」部トレンチ土層断面図（1）	31～32
第16図 「造出」部トレンチ土層断面図（2）	33
第17図 須恵器子持壺実測図（1）	36
第18図 須恵器子持壺実測図（2）	37
第19図 須恵器子持壺接合部模式図	38
第20図 須恵器子持壺実測図（3）	39
第21図 須恵器子持壺実測図（4）	40
第22図 須恵器壺実測図（1）	41
第23図 須恵器壺実測図（2）	42
第24図 須恵器壺実測図	43
第25図 円筒埴輪部分名称図	44
第26図 円筒埴輪実測図（1）	45
第27図 円筒埴輪実測図（2）	46
第28図 円筒埴輪実測図（3）	47
第29図 円筒埴輪実測図（4）	49
第30図 形象埴輪実測図	50
第31図 金属製品実測図	51
第32図 占墳周辺の復元地形	59
第33図 手間古墳埴丘復元模式図	62
第34図 周辺の主要占墳分布図	65

表 目 次

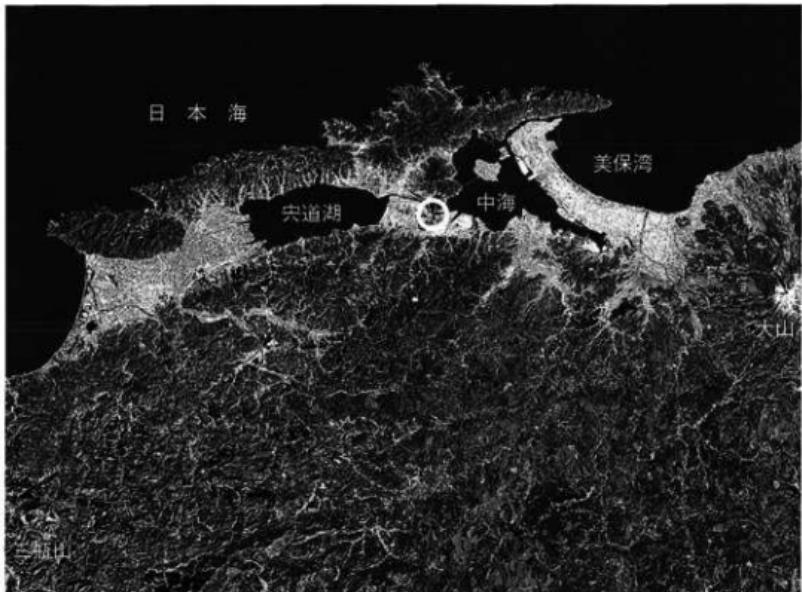
第1表 墳丘テラスのレベルと幅の推定値	61
第2表 出雲の占墳編年表	64
第3表 手間古墳須恵器観察表	68
第4表 手間古墳埴輪観察表	70

1. 古墳の環境と発掘調査の経過

I. 手間古墳の環境

『出雲國風土記』に「神名馴野」と記された茶臼山（171.5m）の北東方には低い丘陵が広がり、その先端は、大橋川の狭い谷をはさんで北方の和久羅山・嵩山の山塊と対峙している。南北の丘陵を隔てる大橋川の両岸には、谷を望むような立地の大型古墳がいくつも築かれています。出雲地方でも有数の古墳地帯を形成している（東森ほか1979、渡辺1986など）。手間古墳は、これら「大橋川の谷」をめぐる有力古墳の一つであって、南岸の一尾根の突端に造られています。すぐ東隣の尾根には竹矢岩船古墳が、西隣の尾根には荒神畠古墳や井ノ奥古墳群が占地する（第2・3図）。

この辺りは、西方の松江平野にも南方の意宇平野にも直接は接していない場所であり（林1991）、これらの古墳の立地が、大橋川を強く意識したものであることは明らかである。大橋川は宍道湖と中海を結ぶ動脈であり、ここが当時から交通の要衝として地理的のみならず政治的にも重要な地点だったことと深く関わっているのであろう。



第1図 手間古墳位置図1（丸印）



第2図 手ぬぐい古墳位置図2（丸印）(1:25000 松江)



第3図 手間古墳周辺地形図 (1:5000) 座標系 第III系
(原図 島根大学考古学研究会・一部改変)

手間古墳は島根県松江市竹矢町宇安郷寺の丘陵上にあり、地元では「高山」とも呼ばれている前方後円墳である。土地所有者によると、「手間古墳」という命名は恩田清氏によるものというが、「手間」は、実際には本墳よりやや東方の地区に付けられた字名であり、厳密にはここは手間ではない。もっとも、現在は古墳の辺りまで「手間」町内会に属しているということなので、この命名がまったくの誤りというわけでもないらしい。古墳のある丘陵は現在は山林で、北西側もかつては松林だったというが、明治末か大正ごろに墳丘際まで開墾され、今は柿畠になっている。

II. 手間古墳の調査略史

手間古墳は1940年頃に中学生によって発見された（山本1995）。その後、山本清氏や井上狷介氏によって略測図が作られ、山本氏によって広く学界に紹介された（山本1951・1968）。しかし、本墳は東部山雲で最大、出雲全体でも第二の規模を誇る前方後円墳であるにもかかわらず、土地所有者の意向もあって、きちんとした資料化は長いことなされなかった。

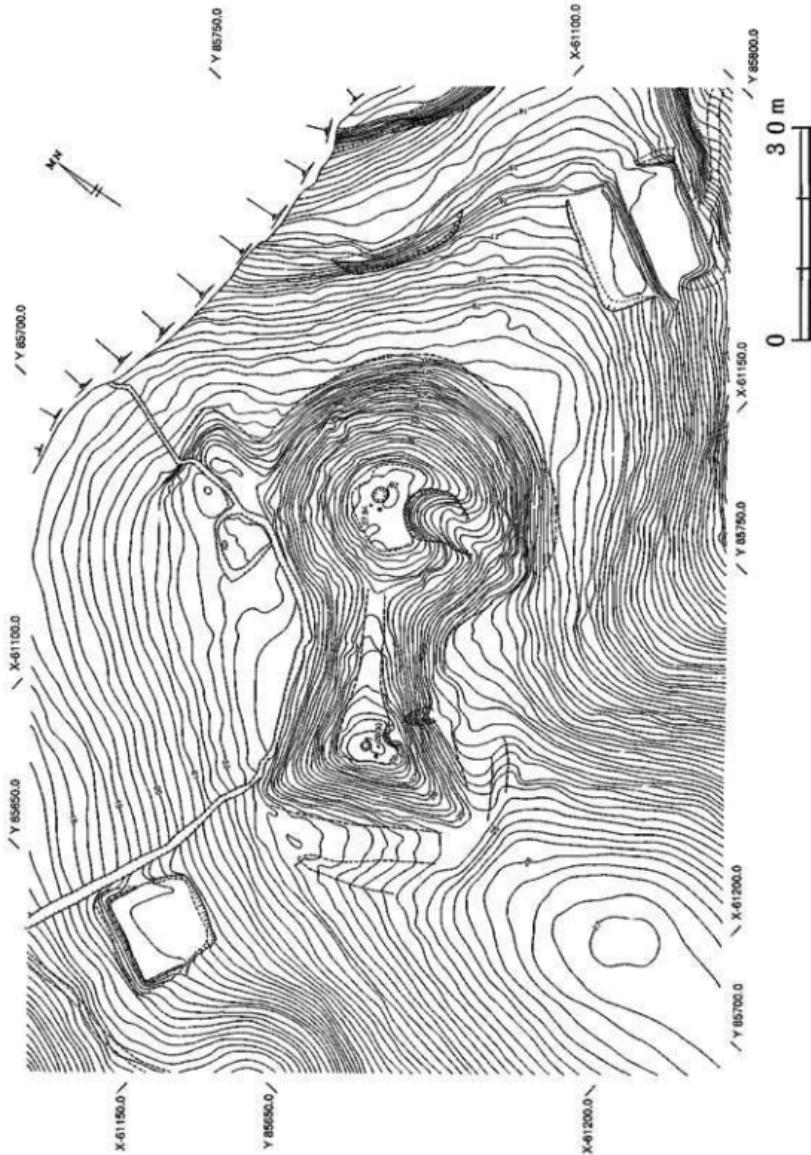
1992年に至って、島根大学のサークルである考古学研究会が本墳の測量調査を計画し、研究会の代表と同会顧問であった筆者とが土地所有者にお願いに伺ったところ了解を得ることが出来たので、同年7月から同会による測量調査が始まった。われわれ考古学研究室メンバーも協力して実施されたこの調査は、94年11月までを費やす長期の作業となったが、研究会はよく作業を継続させて、95年11月には表探資料の紹介を含む報告書を刊行するところまで漕ぎ着けた（島根大学考古学研究会1995）。

考古学研究会の報告によれば、手間古墳の現状の墳丘全長は66.8m、後円部直径は43.2m、前方部前端幅は32.2mと計測され、均整の取れた墳丘形態ながら、各所に盗掘もしくは破壊の痕跡を留めていることも明らかにされた。また、後円部北側に方形の張り出し地形が観察されることも指摘している。一方、須恵器や埴輪類の表探資料の検討から、古墳の築造時期は従前想定されていた時期より新しく、6世紀中葉から後葉ごろという推定がなされた。

III. 発掘調査の経過

筆者らは、かねてから手間古墳の立地する大橋川沿岸の有力古墳群について関心を持っていた（例えば、渡辺1983・1986）が、上記の測量調査をうけて、それまで曖昧だった本墳の築造時期や性格を明らかにすることがこの地域の古墳時代研究にとって重要な意味を持つという認識のもとに、この古墳を考古学研究室の実施する発掘調査の対象として取り上げることにした。土地所有者の快諾も得られたので、考古学研究会と協力して調査団を組織し、1996年春に第1次の発掘調査を実施することになった。

第1次発掘調査は1996年3月11日から23日まで実施した。幸い現場から遠くない所に空き家を借りることが出来たので、炊飯器やストーブなどを皆で持ち寄って共同生活をした。みぞれ混じりの雨の日もある寒い時期だったが、学生の奮闘によって予想以上の成果を挙げることが出来た。この期の調査は墳丘形態と墳丘構造の解明を目的とし、古墳の主軸に沿って、後円部後方と前方部前方の斜面から墳丘外にかけてそれぞれトレンチ（Kトレンチ・Zトレンチ）を入れたほか、前方部南東側の、墳裾が不明瞭になっている部分にZSトレンチを設定した。また、後円部北西側にある「造出」状を呈する張り出し地形に



第4図 手間古墳測量図（1:800）（原図 島根大学考古学研究会）

について、その西辺を見つける目的で後円部西側の柿畠内にKNトレンチを設定したが、この課題についてははっきりした結論を得ることが出来なかった。

第2次調査は1999年夏に実施した。宿舎の確保が出来ず、研究室の発掘としては初めて通いの調査となり、天候の不順もあって苦労も多かったが、土地所有者のご協力と参加者の努力で発掘を成功させた。調査は8月17日から9月6日にかけて行い、後円部南斜面の大きな窪みの部分（KSトレンチ）、後円部と前方部との間の鞍部（Aトレンチ）、および「造出」状地形の性格を探るためのL字形トレンチ（T1およびT2トレンチ）の3カ所を発掘した。この期では、特に後円部南側の窪みが横穴式石室の大規模な破壊の跡だったことを確認し、副葬品中に馬具が含まれていた事実を突き止めたことが特筆される。

第3次調査は2000年の夏、8月21日から29日にかけて、連日35℃前後という猛暑の中、通いで実施した。この期は、それまでの調査で依然として不明だった「造出」状部分の性格に関して、その造成法を解明するという課題に限定して調査したもので、後円部と「造出」状地形の間にトレンチ（T3トレンチ）を入れた。以上の発掘で、不明の部分をいくつか残しつつも、本古墳の基本的調査を一段落させることにした。

（渡辺貞幸）

引用文献

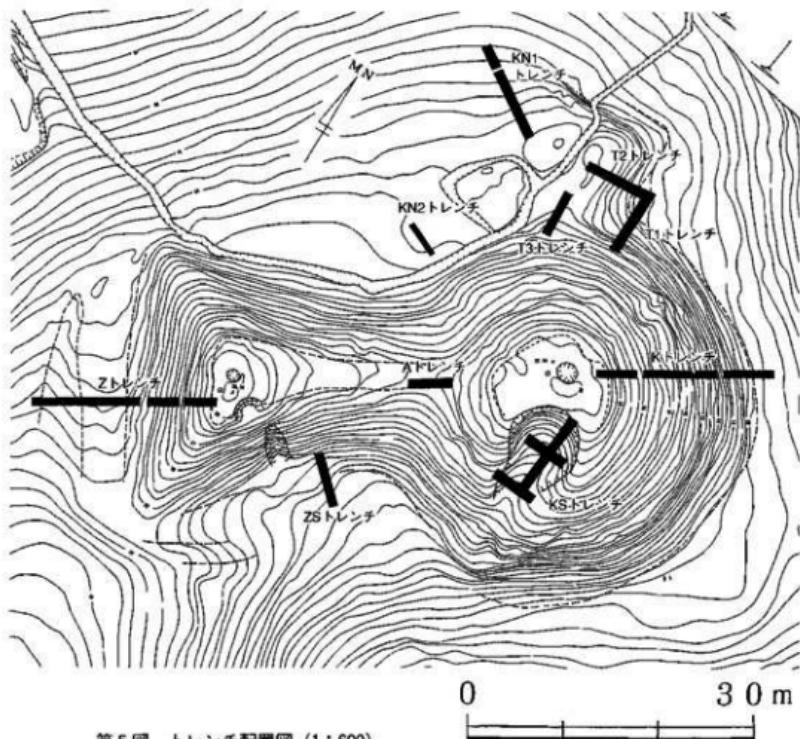
- 鳥根大学考古学研究会 1995 「手間古墳測量調査報告」「菅田考古」第17号
林 正久 1991 「松江周辺の沖積平野の地形発達」「地理科学」第46巻第2号
東森市良ほか 1979 「発展期古墳の地域相」「さんいん古代史の周辺（中）」山陰中央新報社、194~197頁。
山本 清 1951 「出雲国における方形墳と前方後方墳について」「鳥根大学論集（人文科学）」第1号
山本 清 1968 「古墳」「島根県文化財調査報告書」第5集、島根県教育委員会
山本 清 1995 「古代出雲の考古学」ハーベスト出版、157頁。
渡辺貞幸 1983 「松江市山代二子塚古墳をめぐる諸問題」「山陰文化研究紀要」第23号
渡辺貞幸 1986 「山代・大庭古墳群と5・6世紀の出雲」「山陰考古学の諸問題」

2. 発掘調査の成果

発掘調査の内容は次の通りである。

第1次調査では、まず、ほぼ主軸上の後円部斜面と前方部斜面に長いトレンチを入れて、古墳の規模と墳丘の構造を調査した。また、墳丘がやや崩壊していると考えられた前方部南東側で、本来の墳端ラインを推定するための調査を実施した。さらに、後円部北西側に見られる「造出」状の張り出し地形の性格について検討するため、古墳北側の柿畠内でトレンチ発掘を行った。

第2次調査では、後円部に見られる大きな崖みの性格の調査、および前方部と後円部の接する鞍部の調査を行った。また、第1次調査に引き続き、後円部北西側の「造出」状地形の性格を知るための発掘を行った。



第5図 トレンチ配置図 (1:600)

この第2次調査をうけて、第3次調査ではこの「造出」状の高まりについての補足的調査を実施した。

以下、第1次調査から第3次調査までを、順を追って説明したい。また、トレンチの配置図を第5図に示した。

発掘現場での土層観察は『新版標準土色帖』によって行い、地山の性格については三浦清島根大学名誉教授の指導を受けた。報告に当たっては、煩雑を避けるために土色のマンセル記号は省略して土色名のみを表記することにする。

(太田 奏)

I. 第1次調査

1. 後円部トレンチ〈Kトレンチ〉(第6図。図版2~4)

墳端、盛土の状況、葺石と段築の有無などを調べるために、ほぼ主軸上に後円部頂上付近から墳端にかけて、全長19m、幅1mのトレンチを設定した。記載の便宜上、以下、トレンチの後円部側を西、墳端側を東と表記する。トレンチは途中3カ所に幅0.5mの土手を残し、後円部頂觸つまり西からK1トレンチ(長さ4.6m)、K2トレンチ(5.1m)、K3トレンチ(2.3m)、K4トレンチ(5.5m)とした。

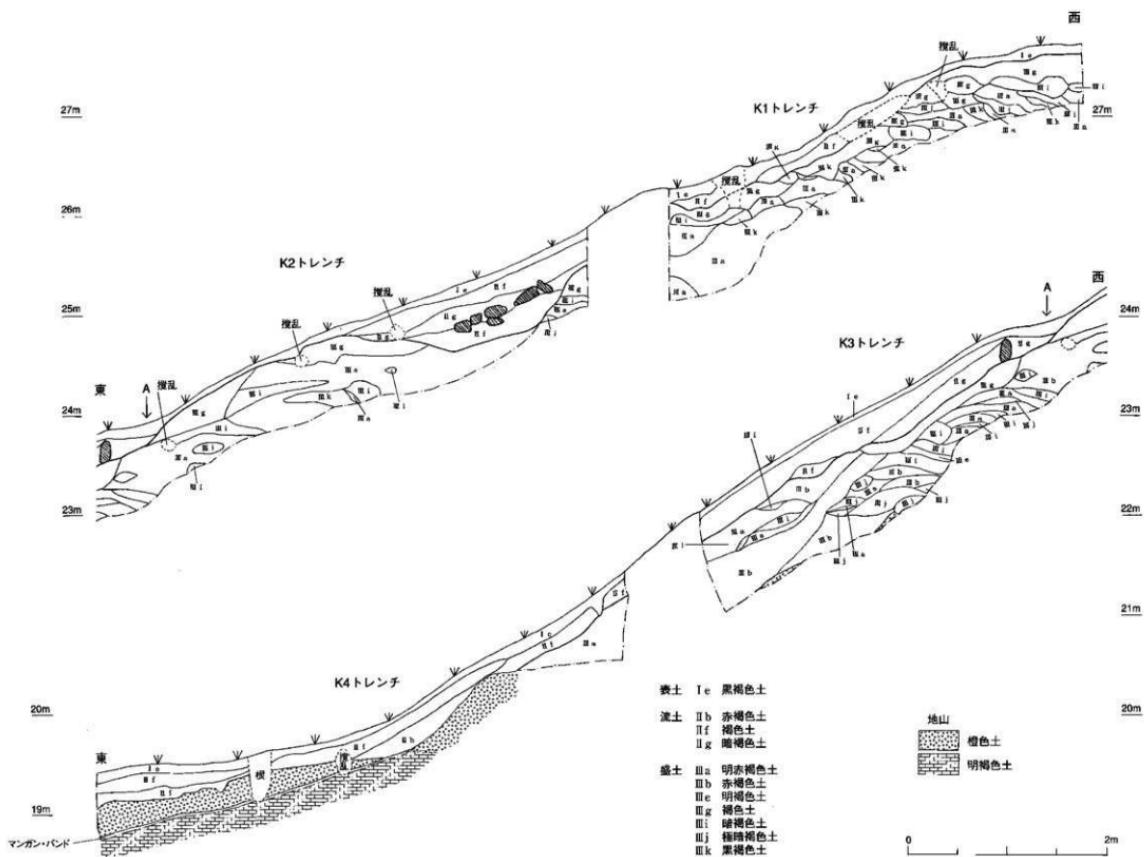
〈K1トレンチ〉

墳丘は基本的に明赤褐色土と暗褐色土ないし黒褐色土による互層状の盛土で造成されていて、それぞれの層は、多くの場合、後円部中心側がやや低くなるような堆積状況を示している。トレンチ中央付近では、互層状盛土の上に褐色土を置いて墳丘面を整えている部分がある。トレンチ東端近くでは褐色土を積んだやや平坦な面があり、段築のテラスである可能性が想定されよう。

このトレンチでは葺石と思われる石は確認できず、遺物は表土中から円筒埴輪片が出たのみである。

〈K2・3トレンチ〉

K2トレンチとK3トレンチは、調査の途中で間の土手を取り除いて一連のトレンチとした。トレンチ西端には互層状の盛土が見られ、その東に2mぐらいにわたってやや亂れてはいるがテラス状の面が認められた。そこに溜まった流土には崩落した葺石と考えられる多くの石が含まれており、これらの石は、トレンチ西端の斜面に葺かれていたものと、さらにその上の、K1トレンチ内の斜面に葺かれていたものとがあると考えられる。テラス部分には褐色土と明赤褐色土が積まれていて互層状の堆積が認められないことや、その下(東)方の墳丘斜面部には互層状盛土の上を褐色土で覆っている部分があることなど、



第6図 後内部トレント土層断面図

K1 トレンチと共に盛土状況が見られる。

K3 トレンチの東端から2mぐらいの所にも墳丘面のアクセントがあって、その辺りで墳丘盛土の状況に変化が見られるので、この付近から東に向かってテラスがあった可能性が強い。K2とK3の接続部付近の流土中には、落下した葺石と思われる石がいくつか認められたが、数も少なく、本来この部分には葺石ではなく、すべて上段から落下した石である可能性が強い。

遺物は、表土・流土から須恵器片と円筒埴輪片が出土している。

〈K4 トレンチ〉

墳丘の裾部は地山を掘り込んで造られている。墳端の部分は地山の橙色粘質土からその下位のマンガン・バンド（マンガンや鉄分が沈着した黒く硬い薄層）まで掘られている。墳端のレベルは19.6mぐらいである。マンガン・バンドのさらに下には明褐色砂質土の層があるが、こうした層序から、上の橙色粘質土は三瓶木次降下軽石層（SKP）、下の明褐色砂質土は大山松江降下軽石層（DMP）の可能性があるという。墳丘側では、地山の橙色粘質土の上に明赤褐色土の盛土が載るが、根による搅乱があるためか、旧表土と考えられるような層は認められなかった。セクション図でこの辺りに狭いテラスがあるよう見えるのも、根による搅乱のせいである。墳丘外は、地山をほぼ平坦に削って整地している。

遺物は、表土・流土から須恵器片と円筒埴輪片が出土している。なお、このトレンチでは葺石らしい石は全く検出されなかった。

〈まとめ〉

後円部の基本的構造は、墳端は地山を削り出し、墳丘は盛土して造成するものである。盛土は明るい色の土と黒っぽい土とを交互に積むのが基本だが、それぞれの盛土は後円部中心の方向がやや低くなるような層序を示すのが特色である。場所によって、その上を褐色土等で覆って斜面を整形している部分がある。流土中に葺石と思われる石がいくつもあったが、原位置を保っていたものはなかった。

発掘範囲が限られ、また、墳丘面がかなり流出しているため確定的なことは言えないが、後円部は4段に築成されていたと推定される。また、下方のトレンチでは転落した石がほとんど検出されていないことから、下の2段には葺石がなかった可能性が強い。今回の発掘結果に基づいて段築についての一応の復元案を示しておいた（第8図）。

（片倉愛美）

2. 前方部トレンチ〈Zトレンチ〉（第7図。図版5・6）

前方部墳丘斜面の構造および墳端の確認と、墳端にあると推定される溝の性格を調べるために、ほぼ主軸に沿って前方部頂から墳端方向に設定した全長19.7m、幅1mのトレンチ

である。これを3つに区分し、墳頂側からZ1トレンチ（長さ3.5m）、0.5mの土手を置いてZ2トレンチ（3.5m）、0.7mの土手を隔ててZ3トレンチ（11.5m）とした。説明に当たっては前方部頂方向を東、墳端方向を西と表記する。

〈Z1トレンチ〉

墳頂側は明赤褐色土と暗褐色土の互層を基本とする墳頂側にやや下降する盛土で墳丘を造っており、後円部と同じ造成法である。東端から2.3m付近からテラスと思われる平坦面が確認される。この上に堆積している流土中には落下した葺石と思われる人頭大の石がかなり見られるので、この上の斜面は葺石で覆われていたと考えられる。流土中から埴輪片が出土している。

〈Z2トレンチ〉

Z1トレンチとよく似た状況で、東寄りは互層状の盛土で斜面を造り、その下にテラスがある。トレンチ内で、この斜面下端に貼り付いた状態で葺石が一つだけ残存していたが、他の石は崩落しており、テラストの流土中にも多くの石が含まれていた。テラスは明赤褐色土で造成されているが、その下に黒褐色土の層があって、さらに下は地山の赤褐色土層となっている。こうしたことから、この黒褐色土は古墳築造当時の表土と判断した。旧表土の上に若干の盛土をしてテラスを造っていることになる。

流土中から少量の須恵器片と多数の円筒埴輪片が出土した。

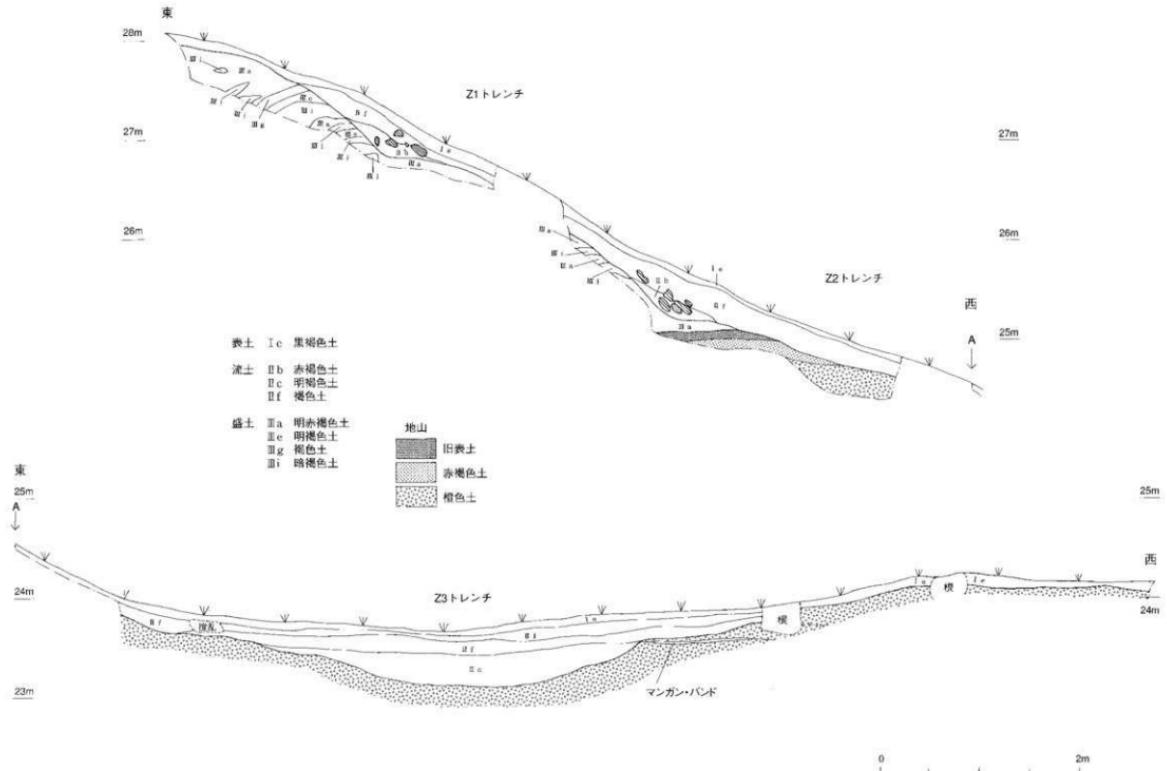
〈Z3トレンチ〉

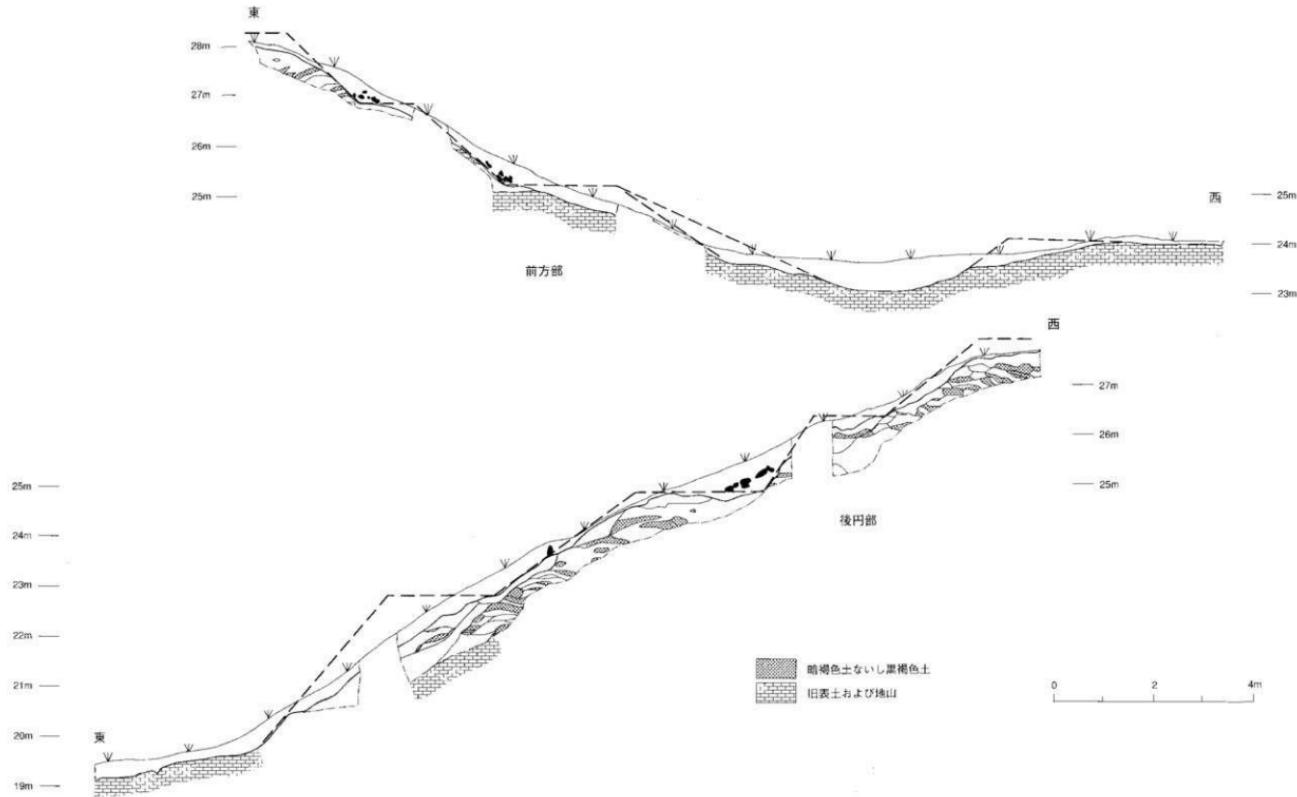
地山を掘り込んで墳裾とし、周辺地形との間に溝を造っている。墳裾は地山の橙色粘質土からマンガン・バンド、さらに下位の橙色砂質土まで掘り込んで造られていて、ここでの地山の層序は基本的に後円部端と同じである。溝の底のレベルはおよそ23.1mで、後円部の墳端より3.5mも多い。溝の断面は浅い鍋底形で底幅1.5m程度、墳丘側の立ち上がりが墳端ということになるがあまり明瞭ではない。トレンチの東端近くにも立ち上がりのような傾斜変換が見られ、こちらが前方部端として意識されていた可能性もある。外堀側も含め、全体に後世の削平を被っているようで、この溝の本来の形や規模については今回のトレンチ調査だけでははっきりしたことは言えない。

遺物は表土および流土から須恵器片・円筒埴輪片が出土している。葺石を思わせるような石は検出されなかったので、最下段には葺石はなかったと考えられる。

〈まとめ〉

前方部の造成方法は基本的には後円部と同じである。前方部は3段に築成されていて、最下段（1段目）は旧地表の上に若干盛土して造っており、この斜面には葺石はなく、上





第8図 段築復元案

2段の斜面に右が葺かれていたと考えられる。調査成果から各段の本来の姿を復元すると第8図のようになろう（墳端については2案を示した）。

（大野聰子）

3. 後円部北西トレンチ（第9図。図版7）

後円部の北西に見られる「造出」状地形の性格をつかむためと、北西側くびれ部付近の様相を調べる目的で、柿畠の中に2本のトレンチを設定し、北側をKN1トレンチ、南側をKN2トレンチとした。ここでは、墳丘側を東と表記する。

〈KN1トレンチ〉

後円部北西の「造出」状の地形が西方でどうなっているのかを探るために設定した、長さ8m、幅1mのトレンチである。

調査の結果、地山にまで及ぶ擾乱が幾重にも入っていることが明らかになったが、トレンチの東側から約3.5mの位置で、現存高40cm程度、傾斜角約30°の、墳丘側に向かう地山の緩い立ち上がりが認められた。この立ち上がりの裾線は南北方向を示し、その延長線は「造出」状地形の北辺にほぼ直交するので、これを「造出」西辺の痕跡であると見ることも出来よう。しかし、この面の直上まで耕作土が及んでいるので、後世の擾乱によって生じた段である可能性も否定しきれない。

また、検出された地山面のつながりを確認するために、トレンチを0.3mの十手を隔てて西側に2.7m延長した。地山は、東側トレンチ内と同じようになだらかに西側に向かつて下がっていき、造構らしいものを確認することは出来なかった。

なお、トレンチ東側から約1mの北壁側で、20cm大の角礫2個が詰まった幅約35cmのピットが検出された。トレンチ調査であったため全貌を明らかにすることはできず、その性格は不明である。

遺物は、擾乱土から円筒埴輪片、壺・子持壺などの須恵器片が出土している。

（細山美樹）

〈KN2トレンチ〉

墳丘北西側くびれ部付近の墳裾を確認するために、柿畠内に長さ4m、幅0.5mのトレンチを設定した。調査の結果、ここでも地山にまで及ぶ擾乱を比較的新しい時代に受けており、本来の地形は残っていないことが確認された。

遺物は、円筒埴輪片、須恵器片、磁器片が検出された。地山直上の層から検出された磁器片は、近代以降のものである。

（田浪文雄）

〈まとめ〉

後円部北西トレンチの調査では、後世の擾乱が激しく、明確なことは分からなかった。

KN1トレンチ内で検出した地山の立ち上がりが「造出」西辺の立ち上がりであるとすれば、「造出」は東西15mくらいの方形ないし長方形を呈していたことになるが、前記したように後世の攪乱による可能性もあり、また、南延長方向の様相が一切不明なので、確言は出来ない。

(細田美樹)

4. 前方部南東トレンチ（第10図。図版8）

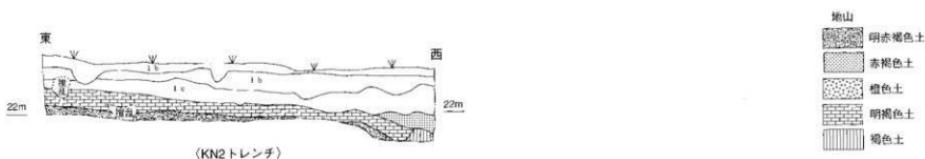
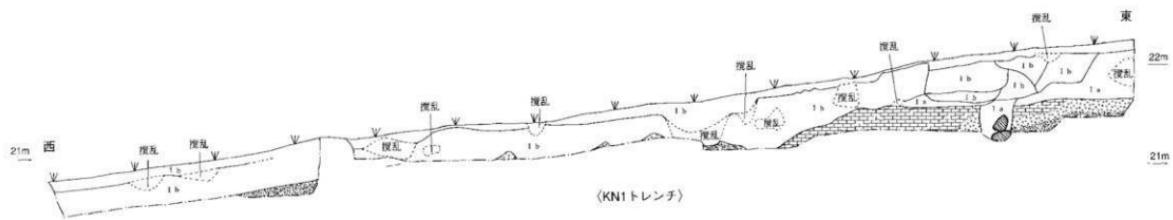
前方部南東側の墳端の状況を確認することを目的に、見かけの墳端付近から南へ伸ばす形で長さ6m、幅1mのZSトレンチを設定した。ここでは、墳丘側を西、谷側を東と表現する。

〈ZSトレンチ〉

表土の下に厚く堆積している10cm大のブロックを含んだ明赤褐色土層からは、円筒埴輪片や甕・子持瓶等の須恵器片が多数出土した。その層の下には、ある時期に表土だったと思われる黒褐色土層がトレンチ内にほぼ均一に堆積しており、上の層と同じような遺物を含んでいた。ここまでが流上と考えられる。その下に、トレンチの東側では地山が検出された。この地山面をトレンチ西側へ追いかけてみると、トレンチ内ではほぼ水平になっていることが確認できた。また、トレンチの東側で地山層の中にマンガン・バンドが検出されたが、トレンチ西端より1.9m東側、レベル22.4mの地点で途切れていた。そして、この地点より、トレンチ西側へ向かって全く遺物を含まない3つの層が地山の上に堆積していた。この3つの層は墳丘の盛土であると考えられよう。

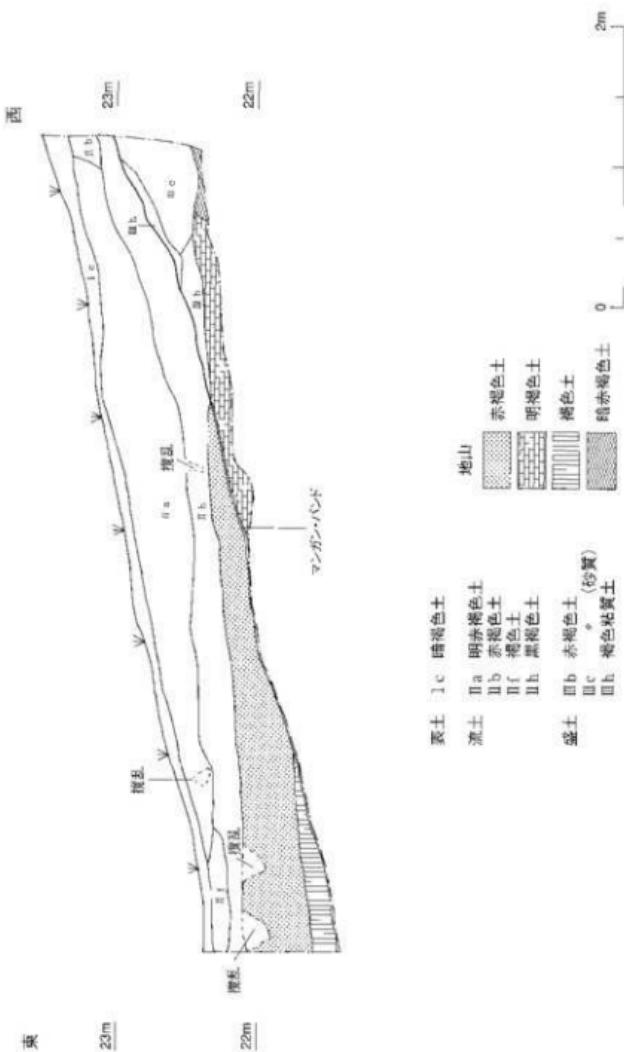
以上のことより、地山を水平に整地した後、盛土を行って墳丘を造ったことが推定できる。ただし、現存の盛土層を古墳築造当時の墳丘面ととらえ、マンガン・バンドが途切れている地点を墳端と考えると、墳裾部の傾斜があまりにも緩やかだったことになり不自然である。従って、この部分の墳端は後世にかなり削られている可能性が高い。

(平山朋子)



第9図 後内部北西トレンチ土層断面図

0 2m



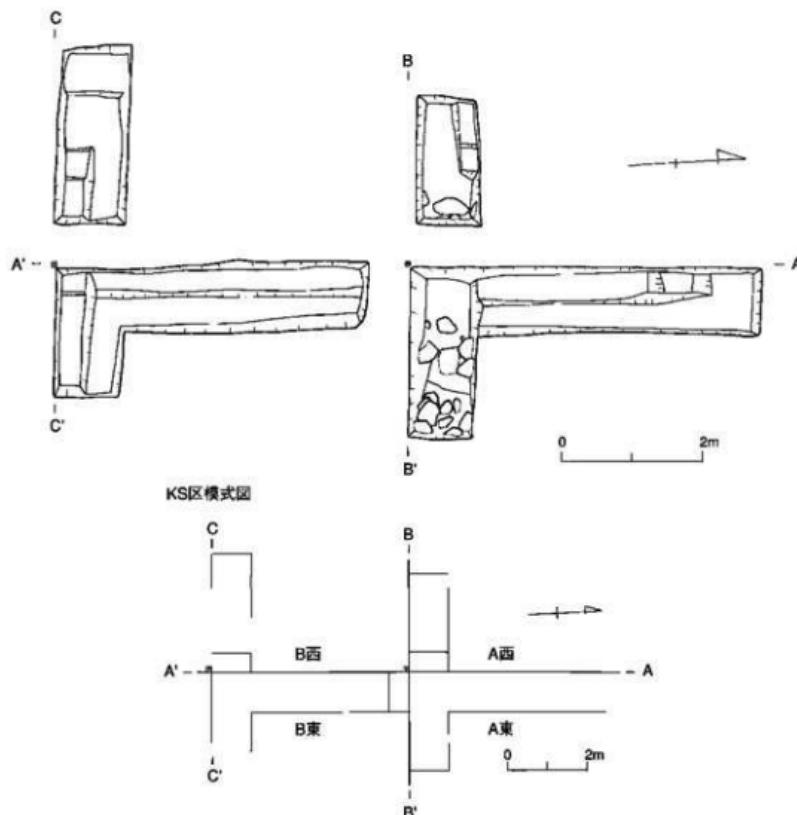
第10図 前方部南東トレンチ土層断面図

II. 第2次調査

1. 後円部南トレンチ〈KSトレンチ〉(第11図～第13図。図版10～12)

後円部南側にある大きな窓みの性格を調べるために、この部分に第11図のようなKSトレンチを設定した。

まず、南北10m、幅1mのトレンチを設定し、このトレンチを二分して北側をA区、南側をB区とした。次に、各区南側に、それと直交するトレンチを東西5m、幅1mに設定し、便宜的にL字状の方を東区、上手をはさんで反対側を西区とした。土層観察のための土手は、東区と西区の間と、A区とB区の間の計3カ所に、各0.5m幅に残した。



以下、A東区、A西区、B東区、B西区の4区に分けて記述を行う。

(佐々木知子)

〈A東区〉

第12図に示したように、西壁セクションの北寄りでは、黒褐色土と褐色土による互層状の堆積が認められた。これは自然な堆積ではなく人工的なもの、つまり墳丘の盛土であると判断され、その下に地山が確認された。この盛土と地山は、大きな掘り込みによって切られている。また、西壁・南壁両セクションによって、その掘り込み内に堆積した土が、別の新たな掘り込みによってさらに切られていることが観察された。以上のように、この部分は二度にわたり大規模な掘削を受けていることが明らかとなった。

一度目の掘り込み後の堆積土中には、白色の凝灰岩片を大量に含む層（第12図△マーク）が存在し、そこでは、大形の凝灰岩塊やその他の石（30cm～70cm程度）が散在していた。の中には、面取りを施された部分を西側に向かって凝灰岩塊（第13図☆マーク。図版11-2参照）が1個あった。凝灰岩以外の石は葺石に使用された石と同様なもので、円碟・亜円碟が多く、亜角碟も見られた。

二度目の掘り込みの後に堆積した土の中からは、埴輪片や須恵器片が検出された。また、西壁・南壁両セクションの表上の下の2つの層には炭化物が多量に含まれていた。

(佐々木知子)

〈A西区〉

表土の下から、炭化物を含んでいる層が3層にわたって検出され、そのうち一番下の層には焼土も認められた。

トレンチの東側で大形の石（20cm～50cm程度）が数点出土した。これらの石を含む層は、A東区の凝灰岩を含む層に対応し、その層を削って二度目の掘り込みがなされたと考えられる。

二度目の掘り込み内の流土中より埴輪片が出土している。

(佐々木知子)

〈B東区〉

南壁セクションの東寄りで互層状の堆積が認められたので、これを墳丘の盛土、その下の硬い褐色の層を地山と判断した。盛土は大がかりな掘り込みによって切られており、その掘り込みの底は地山に達している。その掘り込みの上に堆積した層は、西壁セクションにおいても認められ、北側ではまた別の掘り込みが確認できた。このことから、B東区でも二度にわたり掘削を受けていることが分かる。南壁セクションに見られる掘り込みが一度目、西壁セクションに見られる掘り込みが二度目である。一度目と二度目の掘り込みの間に堆積している流土中には白色の凝灰岩片を大量に含む層（第12図△マークの層）があるが、これはA区で見られた同様の層と対応すると思われる。また、二度目の掘り込み後に堆積した流土中に、炭化物が認められた。

遺物としては、L字状トレンチのコーナー付近の地山直上の暗褐色土（一度目の掘り込み内の埋め土）中から、馬具の細片が数点出土した。それらには、鞍金具片、雲珠もしくは辻金具の破片と思われるものがある。他には流土中より、少量の須恵器片と埴輪片が出土している。

(増田のぞみ)

〈B西区〉

トレンチの西寄りでは、明るい色の土の中に黒い土がブロック状に入っているのが認められた。これは自然堆積ではなく、人為的に積まれた墳丘の盛土であると考えられる。盛土は、先に述べた一度目の掘り込みによって切られているが、このトレンチ内ではそれは地山にまでは及んでいない。トレンチ南壁セクションによると、盛土の黒い土はあたかも土糞に入れて積んだような状況を示していたが、反対側の壁では必ずしも明瞭ではなかった。

遺物として流土中から埴輪が1片出土している。なお、盛土中の黒い土と明るい土に挟まれて、扁平な石が1個ほど水平に置かれていた（第12図B区南壁セクション参照）。石の大きさは40cm×20cm、厚さは6cmほどである。付近をボーリングしたが、他に石は検出されなかった。

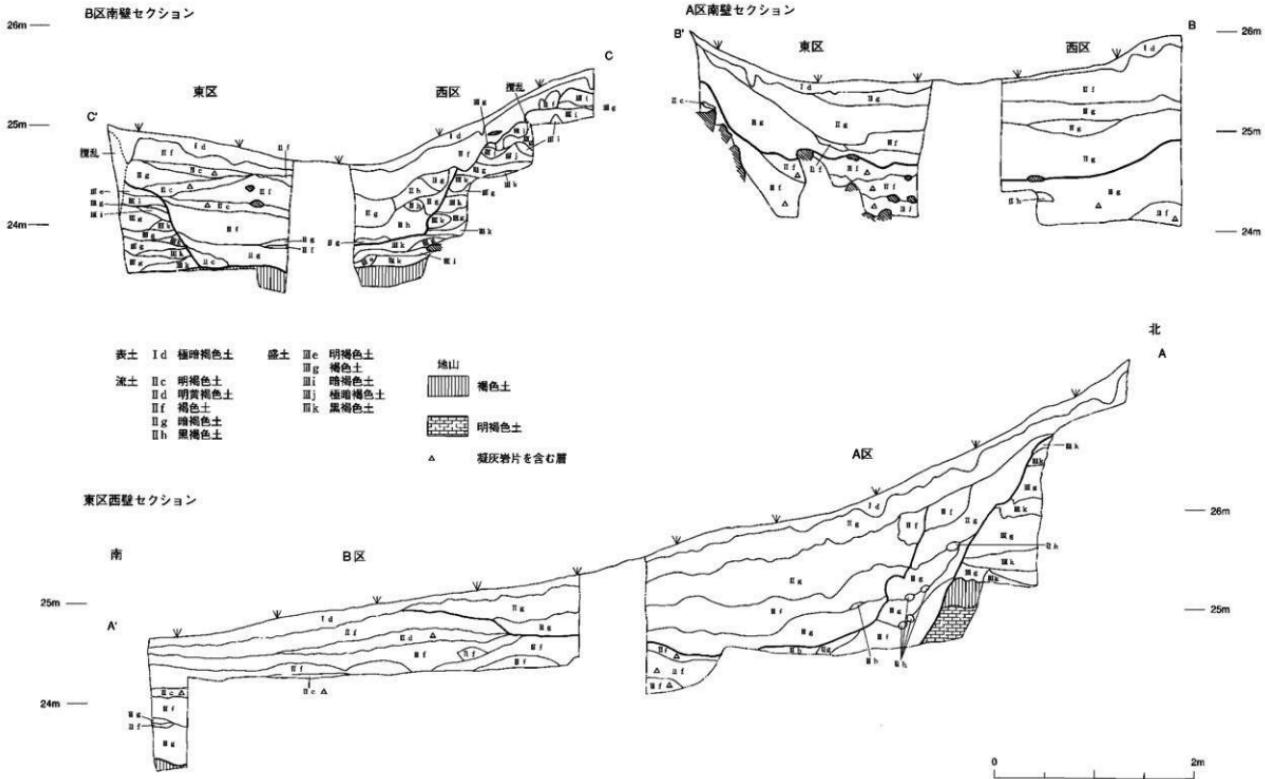
(坂上祐一)

〈まとめ〉

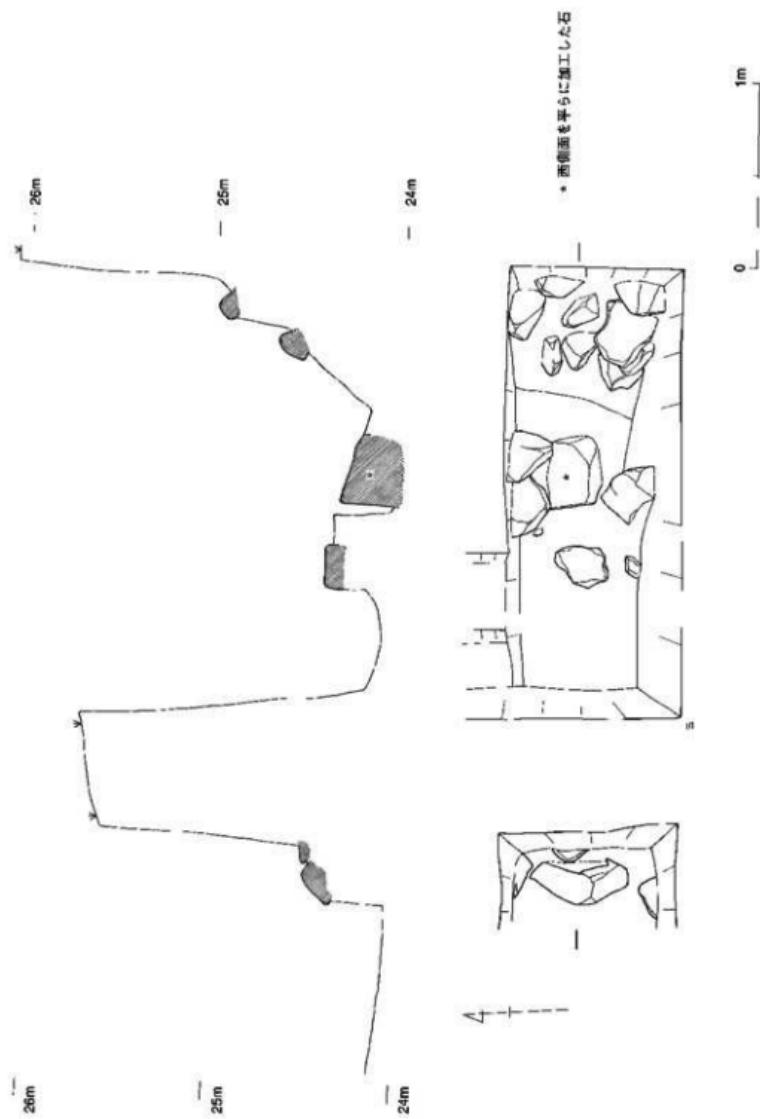
KSトレンチの調査によって、後円部南側斜面にある大きな崖みは二度にわたる掘削によって出来たものであることが明らかになった。一度目の掘削については、北側、東側、西側部分の掘り形が検出できた。北側の掘り形はA東区の西壁セクション、東側はB東区の南壁セクション、西側はB西区のセクションで認められる。一度目の掘削は、地山にまで達するほど深く掘り込まれており、そこに凝灰岩の石塊や大量の岩屑、およびその他の円礫、亜円礫などが散乱していた。そしてこの掘り込みの底近くの地山直上の土から馬具片が検出された。

以上のことから、ここにはかつて石室があり、その後それが大がかりな掘削によって根こそぎ破壊されたと考えることが出来る。先述したように、A東区トレンチでは、平らに加工した面を西側に向けた凝灰岩塊（70cm×40cm大・第13図☆マーク）が検出されている。この石は石室の壁体に使われていた石である可能性が強いが、原位置を保っているかどうかは完掘していないため不明である。

一度目の掘削については、北側、南側の掘り形が検出できた。北側の掘り形はA東区の西壁セクション、南側はB東区の西壁セクションで認められる。二度目の掘削は、一度目の掘り込み後に堆積した土を掘り返したにすぎず、盗掘と呼べるものではないかもしれない。トレンチの中央部付近では、一度目の掘削の後に堆積した層に、焼土と炭化物がまとまって見られ、何らかの火の使用が想定される。



第12図 後円部南トレンチ土層断面図



第13図 後円部南トレンチA区における石の出土状況

墳丘盛土の構造としては、ここでも、基本的には地山の上に明るい土と暗い黒い土を交互に積んでいることが確認された。しかし部分的には、B西区のように、明るい土の中に黒い土がブロック状に入っているのが認められる。

B西区の盛土中で検出された扁平な石は、A区で検出された石とは大きさと質の点で異なっている。墳丘を盛る際に何らかの目的で置かれたものであろう。

(佐々木知子)

2. 鞍部トレンチ (第14図。図版9)

前方部と後円部の接する鞍部はどのように造成されているのかを検討するために、この部分に長さ5m、幅1mで、墳丘のはば主軸ラインに沿ったAトレンチを設定した。

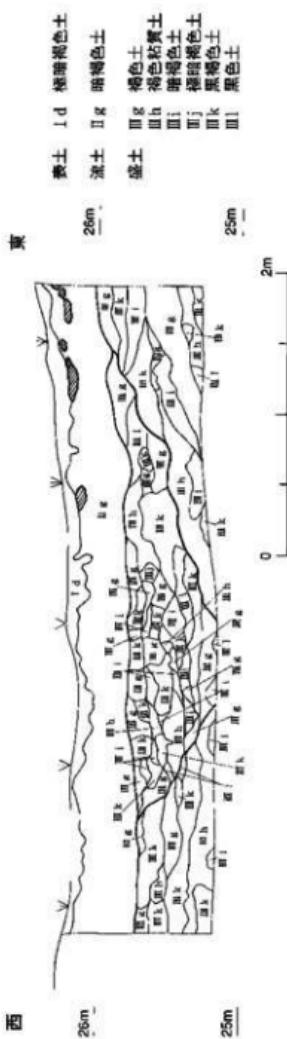
〈Aトレンチ〉

表土の下に、約50cmにわたって遺物を含む暗褐色の土が堆積し、その下からは明るい土と黒い土とが混在する層が続く。この混在の見られる層は、人工的に盛った土と考えられ、これを墳丘盛土、その上の暗褐色土を流土と判断した。

地表面から1.1mほど掘り下げたところで発掘を停止しているが、地山までは到達していない。ボーリング調査の結果、発掘停止面からさらに約60cm下になつてもまだ明るい土と黒い土の層が続くことが分かつている。

盛土は、トレンチの前方部側と後円部側では、明るい土と黒い土とが交互に積まれている。そして中央のあたりでは、明るい土の中にブロック状の黒い土が埋め込まれたような上層を示す。トレンチ全体の墳丘面はほぼ水平になっていた。

以上の観察結果より鞍部の構築法を検討してみると、まず初めに前方部と後円部でそれぞれ明るい土と黒い土を交互に積んでいき、その後両者の間を、明るい土とブロック状になった黒い土を埋め込んでいく。黒い土は土糞にしてあった可能性があろう。そうして



第14図 鞍部トレンチ土層断面図

鞍部を平坦に仕上げていったものと推測される。

遺物はすべて流土中から検出されており、埴輪片・須恵器片が数点、また葺石と思われる石が7個ほどトレンチの東側に集中して見られるが、これは後円部から崩れてきたものであろう。

(稻谷知子)

3. 「造出」状地形のトレンチ（第15図。図版13）

後円部北西側にある「造出」状の高まりの性格を知るために、ここにL字状のTトレンチを設定した。T1トレンチは後円部の中心に向かって、幅1m、長さ7.5mとし、T2トレンチは「造出」状の高まりの長軸と直交するように幅1m、長さ7mとした。なお、古墳墳丘の盛土と「造出」状の高まりの盛土とを区別するために第15図と第16図では、前者を盛土①、後者を盛土②と表記した。

〈T1トレンチ〉

表土を剥ぎ、掘り下げていくと、埴輪・須恵器片を多量に含む暗い土の層が厚く堆積していた。この層をさらに掘り下げるほど硬く締まった明るい橙色土の層が現れ、この層を境に遺物が全く出土しなくなった。その下位にはマンガン・バンドが確認されている。このことから、遺物包含層を流土、その下の硬く締まった橙色土の層を地山と判断した。地山は、トレンチ中央部で後円部に向けて立ち上がりており、これを墳端と考えると、そのレベルは約20.8mで、K1トレンチにおける墳端より1m以上高い。立ち上がった地山は約22mのところで平坦面を造るが、その上に堆積している明褐色土と褐色土の互層は墳丘の盛土と判断される。T1トレンチでは旧表土と思われる層は確認できないので、地山を整地後、盛土をしたと考えられる。

以上のことより、T1トレンチにおいては地山を掘り込むことで墳端を造り、整地した上に盛土をしていることが分かった。これはK4トレンチにおいて見られた墳端の造成法と同じである。ただし、Kトレンチでは、墳端となる立ち上がりの部分でマンガン・バンドが地山整地面に露出しているが、T1トレンチにおいては、マンガン・バンドは地山整地面に露出していない。

遺物は表土、流土中より須恵器片と埴輪片が出土している。

(樋口武史)

〈T2トレンチ〉

「造出」状の高まりの裾側を掘り下げていくと、それまでの暗い色の土とは異なった、橙色の層を検出した。これは、T1トレンチで地山と判断した層と繋がる硬く締まった質の層である。この層を追っていくと、トレンチの中央部で平らになっていることが認められた。この平らになっている面の上に堆積している3つの層は自然な堆積とは考えられ

ず、また須恵器や埴輪などの遺物が検出されないことから、盛土であると判断した。また、頂上部側では、表層近くからは遺物が多量に出土したが、掘り下げていくとある面から下は遺物が出土しなくなる。この遺物を含まない層から下が盛土で、その上の遺物包含層が流土もしくは耕作による擾乱土であると判断される。

「造出」状高まりの盛土は、高まりの中心方向が低くなるように積まれている。これは後円部や前方部のトレンチにおいて見られた造成法と同じである。一方、高まりの頂上部では、明るい色の土と暗い色の土をブロック状に積んでいる。高まりの裾部は、KトレンチやT1トレンチでの所見とは異なり、地山のカットによってではなく、盛土によって造成されている。裾のレベルはT1トレンチの墳端と同レベルの約20.8mである。また、葺石と思われる石が10個ほど検出されたが、流土中にあったもので、原位置を保つものではない。

(沖塩陽一郎)

〈まとめ〉

「造出」状の高まりは、古墳の築造における典型的な盛土の積み方、つまり斜面の高い側を低く積むといった方法を用いていることから、墳丘とほぼ同じ時期に人工的に造られたものと考えられる。T1トレンチで検出された後円部の墳端と「造出」状の高まりの裾のレベルは、ほぼ同じである。ただし、前者は地山を削り出して造り、後者は地山を平坦に整地した後、盛土によって裾を造るという違いがある。「造出」状の高まりの頂上部は、22.6mをやや上回るレベルであったと推定できるが、これは後円部トレンチの調査で想定した墳丘の第1テラスのレベルとほぼ同じであることが注意される。しかし、先に述べたように、「造出」状の高まりと墳丘とでは裾部の造成方法に異なる点があるなどいくつかの問題点も指摘できよう。

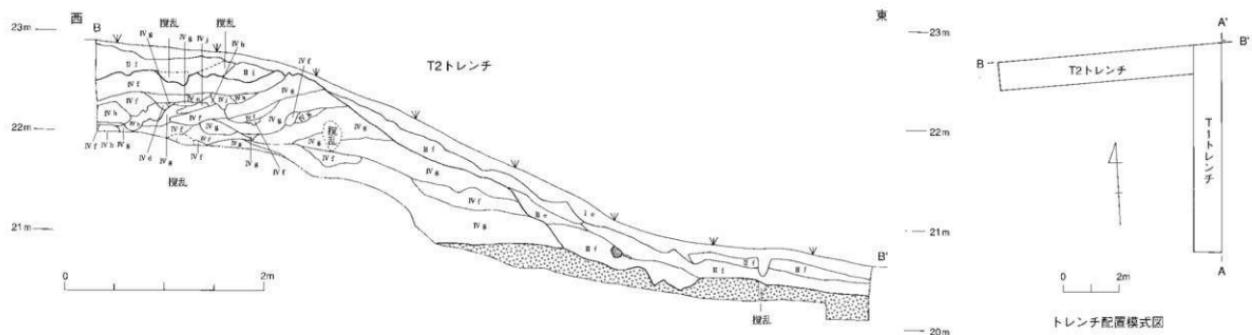
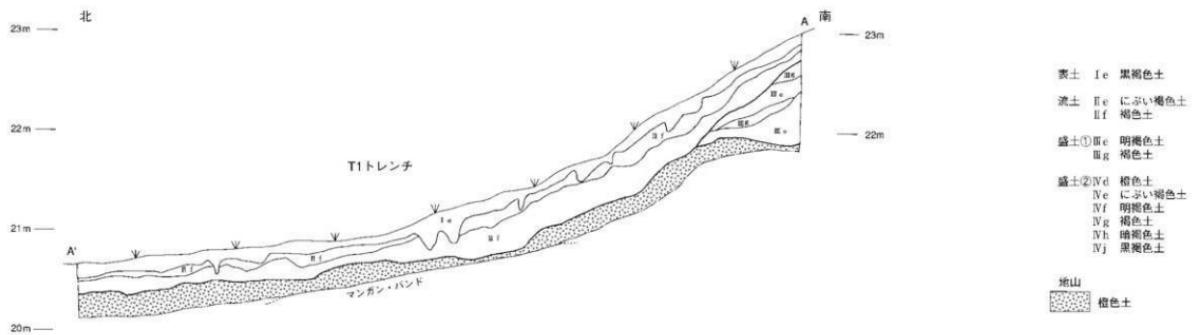
(水町裕子)

III. 第3次調査

第2次調査に引き続き、墳丘と「造出」状高まりとの関係をさらに検証するために、この部分と後円部の接点付近に、幅1m、長さ5mのT3トレンチを設定した。

〈T3トレンチ〉(第16図。図版14)

表土下を掘り下げると、埴輪片・須恵器片を多量に含む暗い土の層が堆積していた。これより下の層からは、遺物は検出されていない。この層をさらに深く掘り下げると、硬く締まった明るい橙色土の層があらわれ、その下位にはマンガン・バンドが確認された。以上のことから、遺物包含層を流土、マンガン・バンド直上の硬く締まった層を地山と判断した。トレンチの中央部では、マンガン・バンドに達するまで地山が削り込まれている部

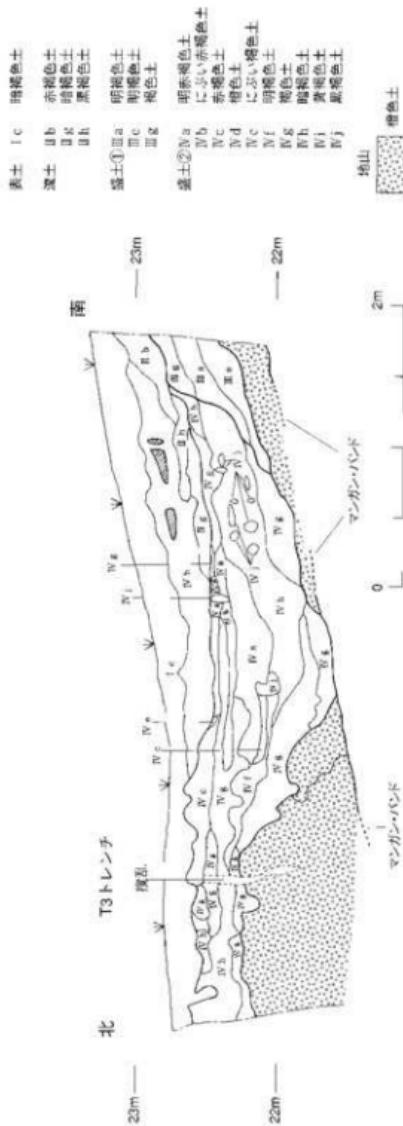


第15図 「造出」部トレンチ土層断面図（1）

分があり、この地点を境にして、北側と南側とでは異なった様相を呈していく。

南側つまり後円部側では、地山が後円部に向けて緩く立ち上がり、その上に3つの土層が堆積している。この3層のうち一番上の層は暗く粘質があつたので、墳丘造成前の旧表土とも考えられたが、これら3層の土色、レベル、堆積の仕方などがT1トレンチで後円部の盛土と判断された層とほぼ同じ様相を呈していること、Kトレンチで1段目テラスと考えた平坦面とレベルがほぼ一致することなどから、この面は墳丘のテラスであった可能性が強く、この3つの層は後円部の盛土と判断した。従って、T3トレンチにおいても、T1トレンチやKトレンチと同様、硬いマンガン・バンド付近まで地山を掘り込むことで墳丘の裾を造り、整地した上に盛土をしていくことが分かった。このトレンチ内における後円部裾のレベルは約21.7mであり、T1トレンチでの墳端レベルよりさらに1m近く高いことになる。

トレンチ北側に向かってもマンガン・バンド直上層が立ち上がっている。この層は、下方は南側のマンガン・バンド直上層と同じ性質の土であるが、上方に行くに従って、にぶい赤褐色の粘質のある土へと漸移的に変化していき、明確な境界線を引くことが出来なかった。また、T2トレンチでは、地山を平坦に整地後、盛土によって橋を造っていたが、ここでは、その



第16図 「造出」部トレンチ土層断面図（2）

ような様相は見られなかった。

南側の後円部墳丘と北側の高まりの間を埋めるように堆積している上は、黒色のブロックを含み、自然堆積とは考えにくく、人為的に埋められた土であると判断される。この場合、T2トレンチで確認された「造出」状高まりの盛土との関係が問題になるが、恐らく、間を埋める作業とこの部分の盛土とは、一連の作業として行われたと考えられよう。なお、この埋め土には遺物が含まれず、下位に腐植土のような層も認められなかつたので、この作業は後円部墳丘造成後さほど時間をおかずに行われたと推測される。

以上のような状況から、古墳築成の当初はここに鳥状に地山が削り残されていたが、その後後円部との間を埋め戻すとともに盛土も加えて、後円部1段目テラスの高さにそろえて「造出」状の地形が造成された、と推定することが出来る。

遺物は須恵器片と埴輪片があり、形象埴輪片が1点出土した。

(太田 奏)

3. 出土遺物

1. 須恵器（第3表。図版15～17）

1. 子持壺

子壺の口縁、義壺の胴部とみられるもの、脚部など各部位が出土している。親壺には底がないことから、当古墳の子持壺は柳浦後一氏の分類（柳浦1993）における有脚IV類である。以下に、各部位ごとに述べてゆく。

〈子壺口縁部〉（第17・18図）

いずれも焼成は良好で、内外ともに回転ナデで調整されている。

子壺口縁部の形態は、すべて扇形の特徴を持つ。その中には、特に明確に口縁下端の稜が突出するもの（1～3）、同じ形態を持つが稜が鋭く突出するもの（4～9・17）、屈曲が弱く、稜がみられず、口縁が内湾しつつ立ち上がり、口縁端部近くで外反しているもの（10・11）がある。また、12は他と異なり、口縁端部が外反せず丸みを帯びている。

〈子壺接合部〉（第18図）

親壺と子壺の接合方法は、柳浦氏の分類によるa手法であり、子壺にはすべて底がみられない。接合部の補強に関しては、模式図（第19図）に示すように、外面は粘土を貼り付けて行っているが、内面は、子壺下端を親壺の孔に挿入し（①）、②のように下端を折り込んでなでつけている（③）ものがほとんどである。

17は、接合部から口縁まで復元できた唯一の例である。口縁から子壺の下半まで回転ナデを施し、親壺の内側には同心円状の当て具痕がみられる。接合部になでつけられた粘土は親壺内側の当て具痕の上にまで及んでいる。

その他の接合部も同様の調整がみられる。

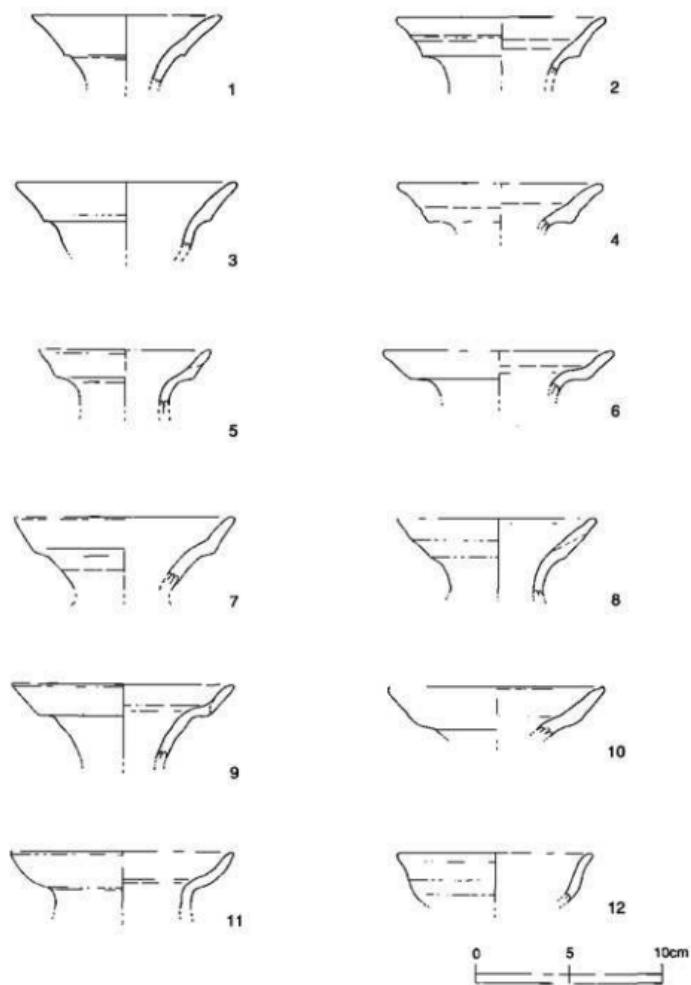
〈親壺口縁部〉（第20図23・24）

23と24は緩やかに外反し、端部は丸くおさめている。内外に回転ナデが施されている。子持壺との色調の類似と復元径から、親壺の口縁部と判断した。

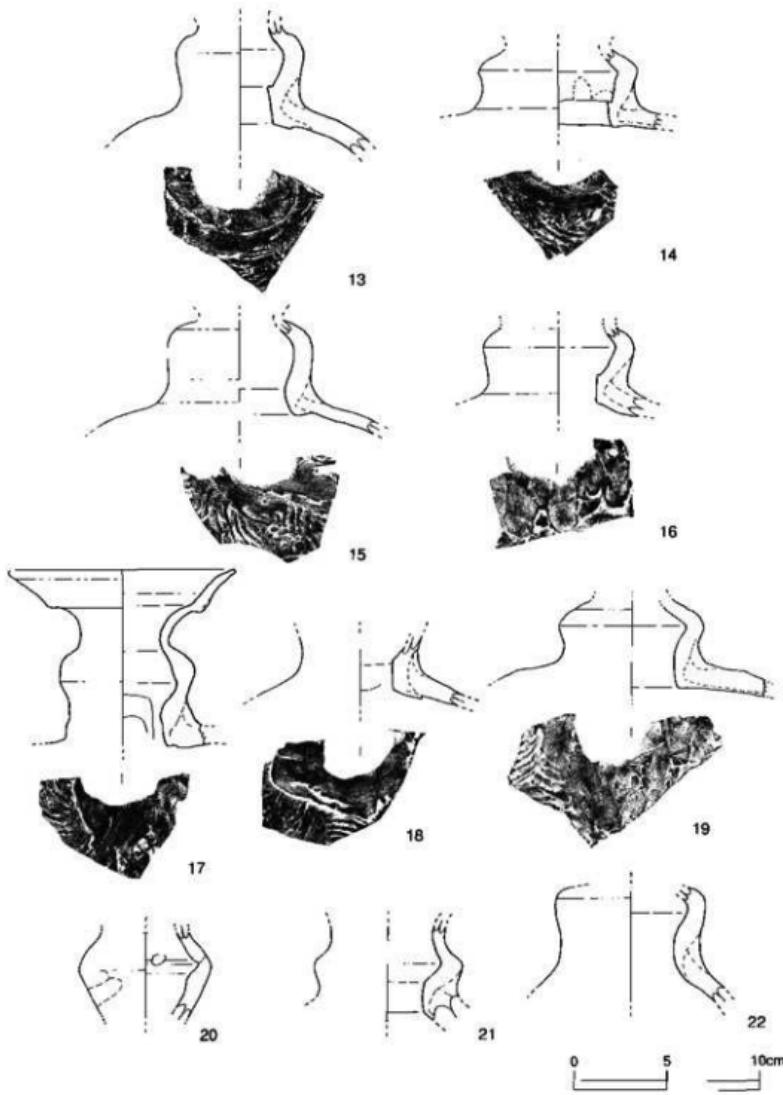
〈親壺胴部〉（第20図25～27）

すべて内面には同心円状の当て具痕がみられ、外面にはタタキの上にナデが施されている。27の外面は特に強くナデられている。

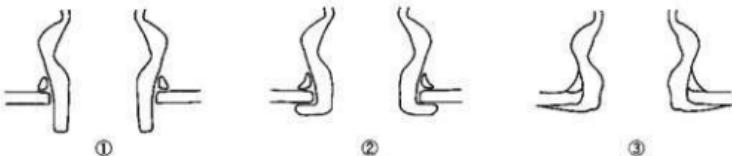
〈親壺脚部〉（第21図）



第17図 須恵器子持壺実測図（1）(S=1/3)



第18図 須恵器子持臺実測図（2）(S=1/3)



第19図 須恵器子持壺接合部模式図

28は、親壺部と脚部の接合部である。内面に同心円状の當て具痕が残る上部3分の1ほどが体部である。それに続く脚部の下部には粗いヨコナデが施されている。外面は粗いタテナデで調整されている。親壺部と脚部は図に示したように内傾接合されている。

29は、外面にはタテナデ、内面にはヨコナデが施されている。

30・31は子持壺脚端部で、両者とも脚端部が広がっている。30の外向には不整方向にナデが施され、明瞭ではないがタタキ目、指痕がみられ、内面にはヨコナデが施されている。31は外面にタタキ目がはっきり残り、その上にヨコナデが施されている。内面もヨコナデで仕上げている。

2. 壺（第22・23図）

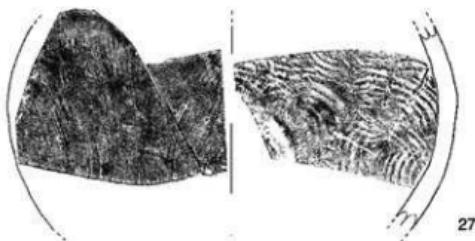
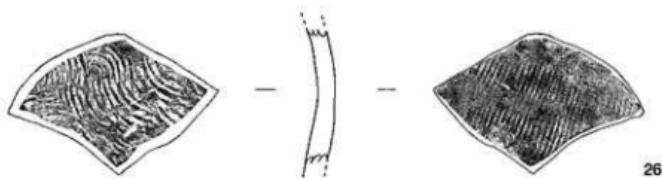
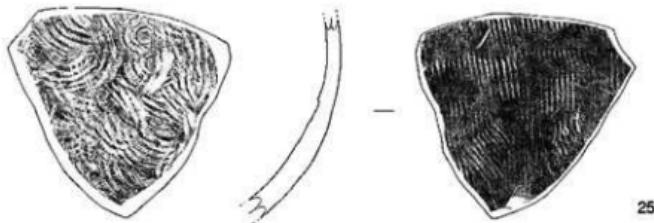
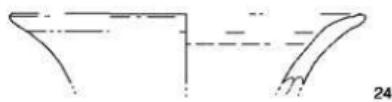
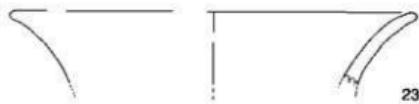
32～34・36は壺の頸部と考えられるものである。2本1組の沈線とゆるやかな波状文を上下に交互に配したもの（32）、細かな波状文を施したもの（33・34）がみられる。35は、外面のタタキの上にカキ目が施され、内面には同心円状の當て具痕が残る。36は外面にカキ目が施され、2本の沈線の上部には波状文がみられる。内面にはナデが施されている。

37～39は、壺の胴部と考えられるものである。3点とも外面にタタキが施され、内面に同心円状の當て具痕がみられる。38の内面には、同心円状當て具痕の上をハケで調整している。

3. 壺（第24図）

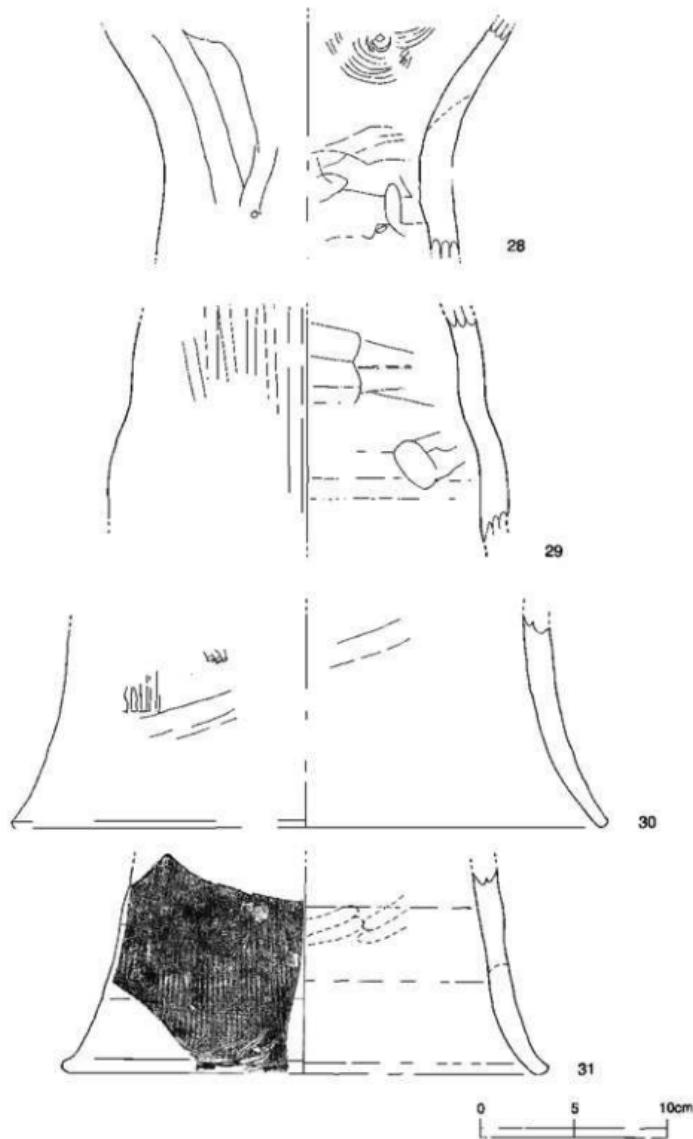
40～42は壺の頸部と考えられる。すべて外面にはヨコナデを施す。内面上部にヨコナデを施すもの（40・41）、不整なナデを施すもの（42）がある。40は肩部内面に當て具痕がみられる。

（神柱靖彦・米森恭了）

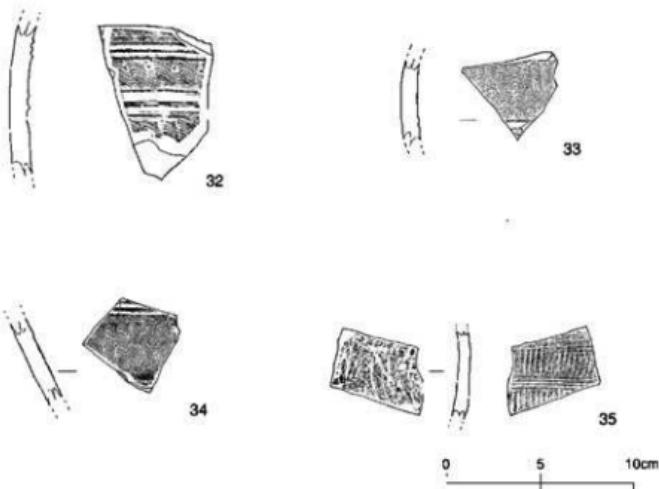


0 5 10cm

第20図 痘瘍器子持壺実測図(3) (S=1/3)



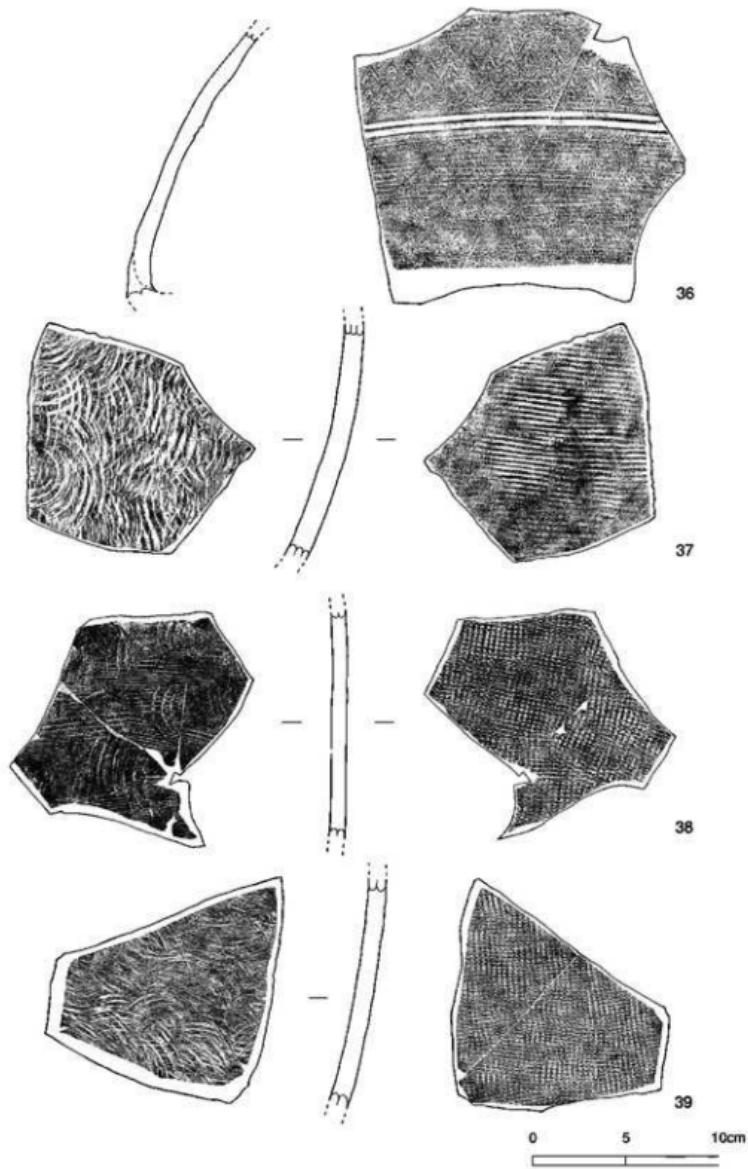
第21図 須恵器子持壺実測図(4) (S=1/3)



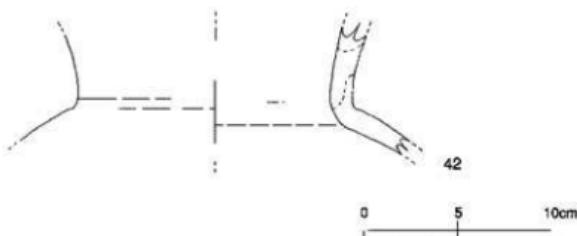
第22図 須恵器実測図（1）(S=1/3)

参考文献

- 佐古和枝 1994 「出雲型子持壺について」『同志社大学考古学シリーズ考古学と信仰』
- 島根大学考古学研究会 1995 「手間古墳測量調査報告」「背山考古」第17号
- 凸子寛光 1987 「出雲の子持壺」『占文化談叢』第18集
- 柳浦俊一 1993 「島根・鳥取県出土子持壺集成」「島根考古学会誌」第10集
- 山本 清 1960 「山陰の須恵器」『開学十周年記念論文集』島根大学



第23図 須恵器変形測図 (2) ($S=1/3$)



第24図 須恵器壺実測図 ($S=1/3$)

II. 塙輪 (第4表。図版18~20)

1. 円筒埴輪

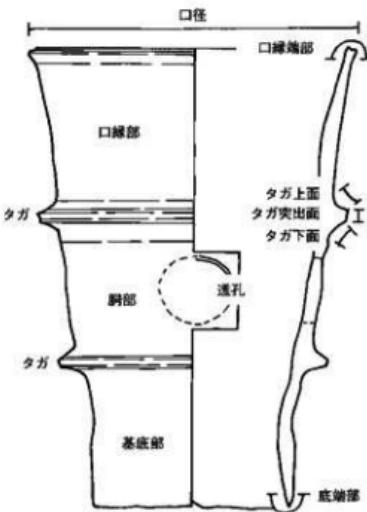
今回の発掘で出土および表採した埴輪のうち、形態、ハケ日の残存状態のよいものを図示した。いずれも破片であり、完形に復元できるものはなかった。

円筒埴輪の各部位の名称については、基本的に『出雲岡山古墳』に用いられたそれ(長嶽・昌子1987)に準拠する。ただし、タガの形態を示すために、「タガ突出面」・「タガ上面」・「タガ下面」等の言葉を用いることにする(第25図参照)。なお、調整や口縁部の形態などについては、藤永照隆氏の「出雲の円筒埴輪編年と地域性」(藤永1997)を参考にした。

〈口縁部〉(第26図)

円筒埴輪口縁部は、基本的には藤永氏のA形態に属するが、形態と調整で以下の4種に分類できる。

- ①やや器壁が薄く、内面にナナメハケを施し、端部が溝状になるもの(1)。外面の調整については、摩滅しているため観察できない。
- ②肉厚で、口縁端部が溝状を呈し、内側の角を面取りしているもの(2~4)。内面の調整に関してはヨコハケを確認できるものがある(3~4)。外面の調整はいずれも端部直下にナデ、その下にナナメハケを施している。
- ③口縁端部が溝状を呈し、外面の口縁直下にも溝がめぐるもの(5)。内面はヨコハケ、外面はナナメハケが施されている。
- ④口縁端部は溝状にならず、やや内湾し、丸くおさめる(6)。内外の調整は摩滅のため観察できない。



第25図 円筒埴輪部分名称図

〈胴部〉(第27・28図)

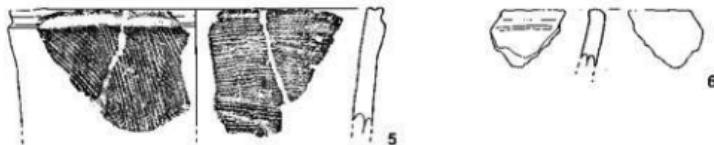
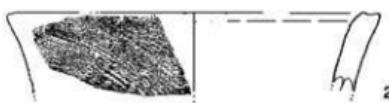
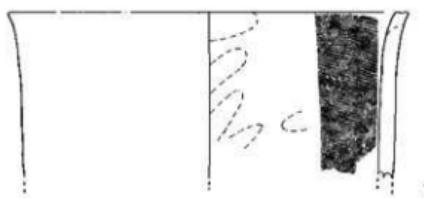
胴部は、タガを有する破片のみを取り上げた。

タガの形態は、いずれもよく突出しており、断面台形となっている。突出面にナデを施し、凹んで溝状になるものもある。タガ突出面の上の角を面取りしたもの(20)などもみられる。

タガ下面に段がないものと、段を有するもの(15~19・22・23)がある。しかし、24ではタガ下面の段が同一個体内で消失しているので、この下面の段は明確に意識されて作られたものではないことが分かる。調整については、摩滅が著しく、充分に観察できないものもあるが、ハケ目はタガを付けた後に施されている。主にナナメハケが多くみられ、ヨコハケ、タテハケなど三種が混在している。

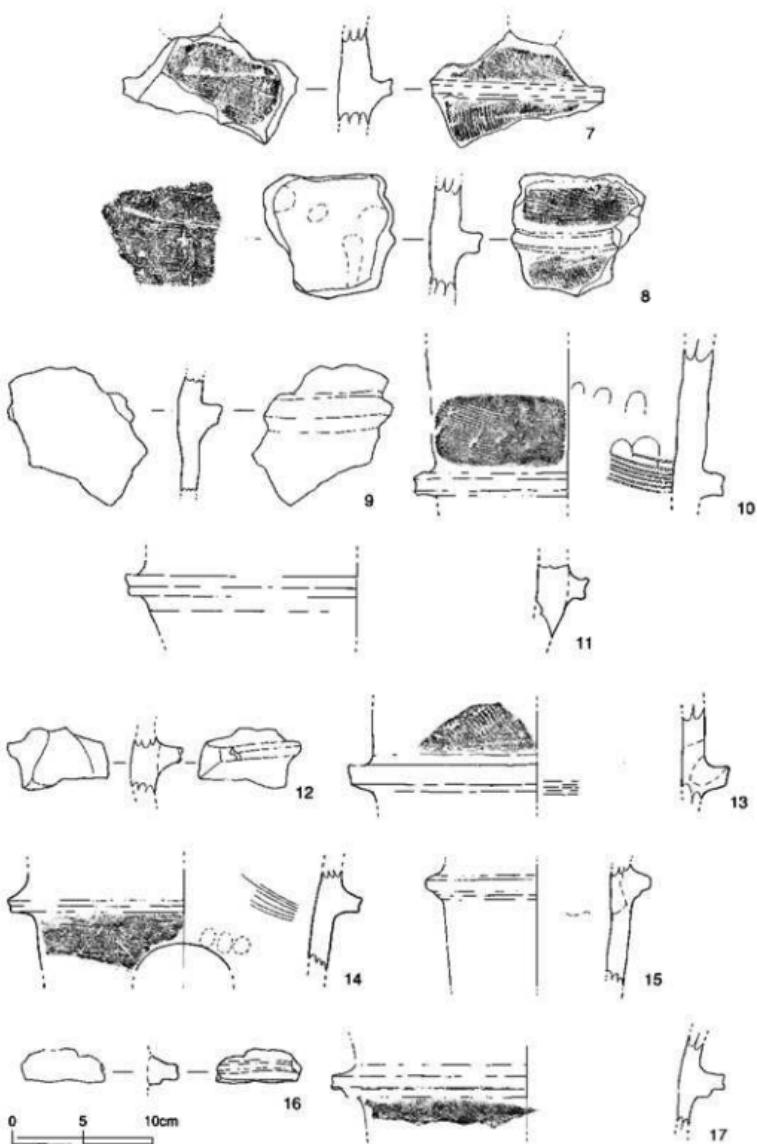
残存状況が一番良好である24を見ると、透孔周辺においては上部にヨコハケ、それ以外は不整方向のハケ目が施されている。

内面の調整は、摩滅により確認できないものもあるが、確認できるものについてはナナメハケあるいはヨコハケで調整されている。

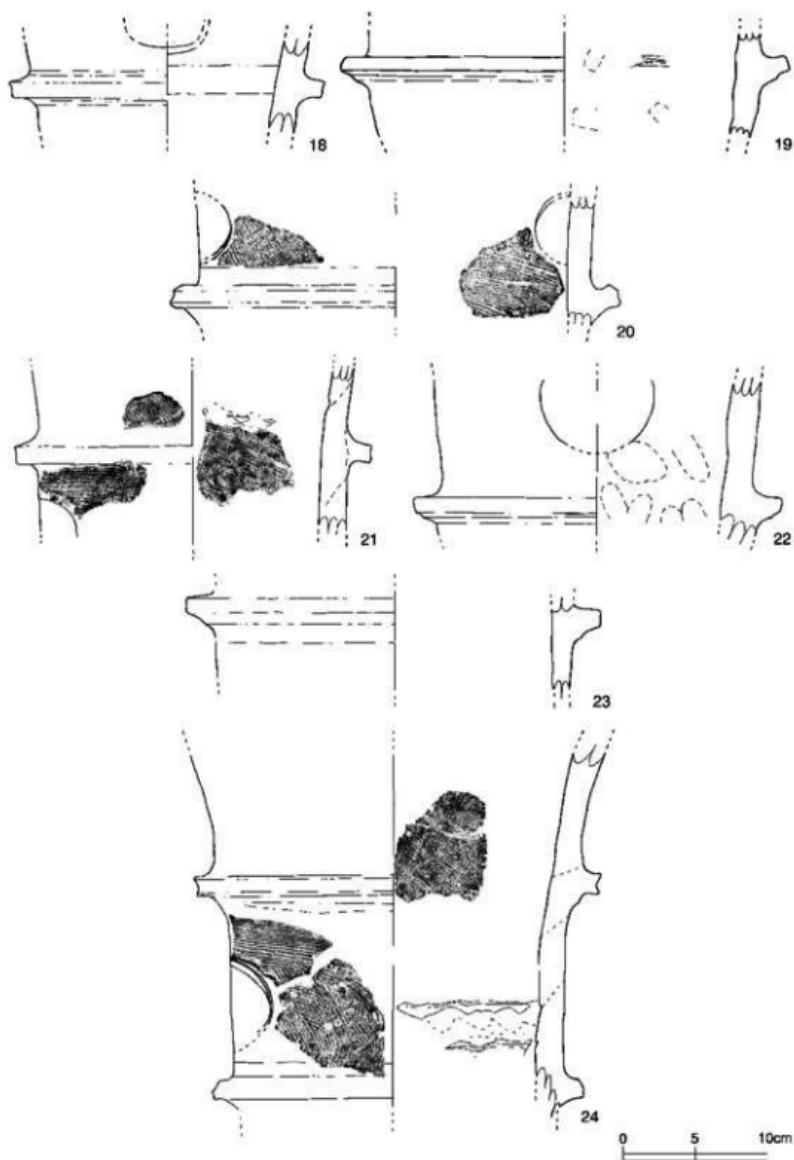


0 5 10cm

第26図 円筒埴輪実測図（1）(S=1/4)



第27図 円筒埴輪実測図 (2) (S=1/4)



第28図 円筒埴輪実測図（3）(S=1/4)

手間古墳の埴輪は破片のみで、タガが何条めぐるかも不明であるが、藤永氏の外側調整の分類によれば、ヨコハケ無しとヨコハケBの二者が存在すると考えられる。

〈基底部〉(第29図)

基底部は、調整の点から以下の3種に分類が可能である。

- ①底部調整を有し、外面に底端部直上までナナメハケがみられるもの(25)。
- ②底部調整を有し、外面にハケ目がみられないもの(26~28)。26・27の外面には、棒状のものを用いて叩いたような右下がりの痕跡がある。28については一個体内で断面の形態に違いがみられる。
- ③底部無調整のもの(29~31)。内面にはすべてユビオサエがみられ、29・31については外面に底端部直上にまでナナメハケがみられる。なお、30の底端部には植物あるいは板などの圧痕ではないかと思われる凹みが存在する。なお、③は形象埴輪の基底部である可能性がある。

2. 形象埴輪(第30図)

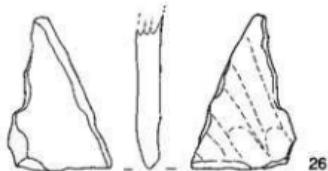
形象埴輪として挙げたもののうち、32と33は板状を呈している。34は竹管を用いた2条の刺突が施されている。いずれも、どのようなものをかたどった埴輪の破片であるかは不明である。

35は人物埴輪の腕部分の破片と考えられる。不整方向にハケ日が施され、表面には2条の刺突列がめぐり、手の指を表現したとみられる沈線が4本加えられている。

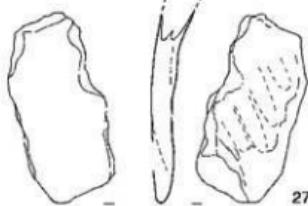
(石田陽子・渡辺桂子・米森恭子)

参考文献

- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号
長嶺康典・昌子寛光 1987「埴輪」『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会
丹羽野裕・熱田貴保ほか 1989「古曾志遺跡群発掘調査報告書—朝日ヶ丘団地造成工事に伴う発掘調査—』島根県教育委員会
藤永照隆 1997「出雲の円筒埴輪編年と地域性」『島根考古学会誌』第14集



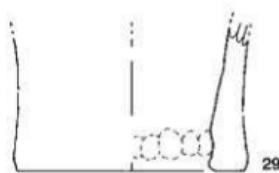
26



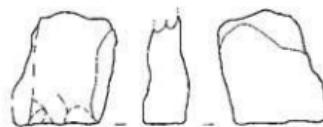
27



28



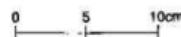
29



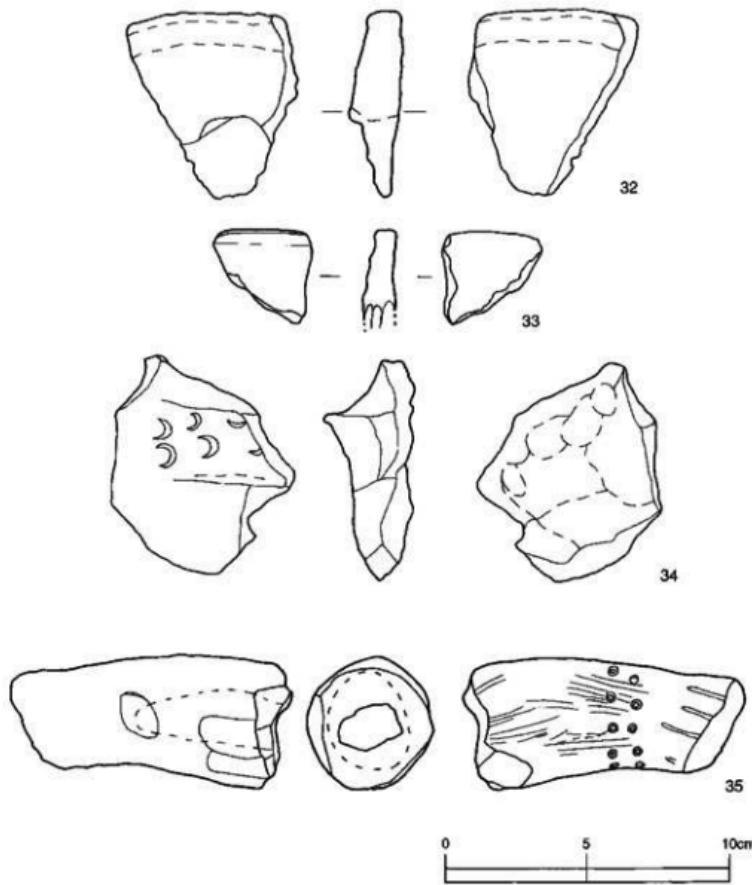
30



31



第29図 円筒埴輪実測図(4) (S=1/4)

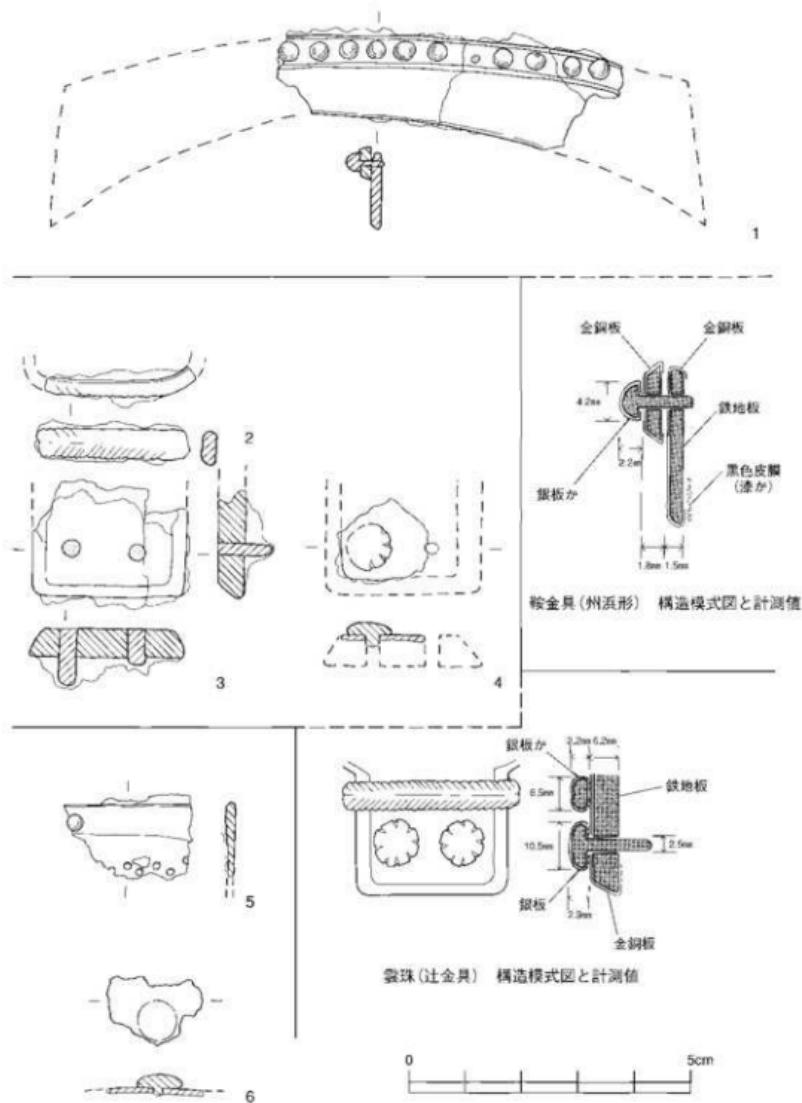


第30図 形象埴輪実測図 (S=1/2)

III. 金属製品 (図版21)

出土した金属製品を、第31図に図示した。いずれも後門部南のKSトレーナB東区で、地表下110cmの暗褐色土中から出土している。馬具破片4点（同図1～4）と不明金属製品破片2点（5・6）のほか、図示しなかったものとして微小な鉄片2点が出土している。

以下、個別に解説する。



第31図 金属製品実測図 (S=1/1)

1. 馬具

1～4は馬具の破片である。

1は鞍金具のうち、いわゆる州浜形の一部である。3つの破片に割れた状態で出土し、それ以外の破片は出土していない。鉄地板に金銅板をかぶせた鉄地金銅装であることが、断面の観察からわかる。断面形が台形をなす縁金具をのせ、鉄打ちで固定している。縁金具と地板にそれぞれ別の金銅板が被せられているのか（別被せ）、一枚の金銅板を一度に被せたのか（一体被せ）は明らかでない。X線写真から11箇所の鉄が観察され、うち1箇所は鉄頭が脱落している。鉄頭は黒ずんだ外見をなし、X線の透過度が低い別素材の金属が被せられている。外見上金色の部分が全く無いことから、鉄製鉄の鉄頭に銀被せした鉄地銀被せの鉄である可能性が高い。鉄はすべて地板を貫通し、裏側に突出している。裏面には鞍橋の木部の痕跡などはまったく残されていない。また、裏面の一部には黒色に泡だつた漆とみられる皮膜が付着している。

2～4は雲珠または辻金具の一部である。2は責金具、3・4は脚部分に相当する。

2の責金具は両端がゆるやかに湾曲しており、先端を欠損している。黒ずんだ外見を呈しており、鉄地に銀被せした鉄地銀装の可能性が高い。サビにより肉眼では見えないが、X線写真によると繩目状に刻みをいた様子がかかるに観察される。

3は方形脚が折損したものである。一部に金装の部分が露出しており、鉄地に金銅板を被せた鉄地金銅装によるものとみられる。2箇所に鉄が打たれた痕跡が残るが、鉄頭は脱落していく残されていない。鉄足が裏面に大きく突出しているが、かしめた痕跡などは観察できない。

4は同じく方形脚の表面が薄く剥離したもので、残存する厚みは本来のものではない。表面には鉄が打たれており、X線写真によると鉄頭に刻みが観察されることから、いわゆる花形鉄である可能性が高い。金装が見られないことから鉄頭は銀被せと思われるが、定かではない。

2. 不明金属製品

5・6は用途不明の金属製品破片である。

5は厚さ1mm強の薄い鉄板で、表面にわずかに金銅板が付着している。本来は表面全体が金銅装であったとみられる。図中の上辺は本来の形状を残しており、ほぼ直線をなす。この上辺にそって縁状に厚く作られている。この縁状の部分に1箇所、鉄が打たれている。鞍金具に打たれている鉄よりひとまわり小さく、鉄頭の素材は不明である。また表面には円形タガネで波状に打ち込まれた列点が6箇所観察される。馬具の鞍橋（のうち、海の部分）を装飾する金具の可能性もあるが、その用途は明らかではない。

6は不定形に破損した鉄板である。輪郭はすべて本来の形状ではない。また、薄く剥離したものであり、厚みも本来の厚さではない。サビのため不明瞭だが、鉄頭のような円形

の膨らみが表面に観察される。断面図は推定復元した。

3. 馬具の年代と位置づけ

トレンチから出土した馬具はごく小さな破片であったため、馬装の全体像をうかがうことは難しい。ただ、少なくとも鞍金具・雲珠（辻金具）が副葬されていたことは確実であり、しかもいずれも金銅（銀）装を施した装飾性の高いものであった。出土してはいないが、馬装を構成する替や杏葉、鎧なども当初は副葬されていたと考えるのが自然である。以下では、残されたわずかな情報を他古墳出土例と比較し、その年代に関する位置づけを試みたい。

【鞍金具】

第31図1に図示した鞍金具州浜形の部分について、下記の特徴があげられる。

- ①小型の鉢を間隔密に打つ。
- ②縁金具に打たれた鉢が全て地板を貫通する。

6世紀中頃～末を境に、鉢は地板の縁辺に造り出された突起のみを貫通するように変化することが指摘されている^①。これら2つの特徴をもつものはそれ以前に位置づけられる。

【雲珠（辻金具）】

第31図2～4より、手間古墳出土の雲珠（辻金具）について下記の特徴があげられる。

- ①脚と鉢配置は、「方形脚2鉢」タイプである。
- ②鉢部の形状は不明。
- ③脚部を含めた本体は鉄地金銅装、鉢頭と責金具は鉄地銀装とみられる。
- ④責金具は幅広の1条を2分割して2条に見せるもの。また、繩目状刻みを併い違い向きに入る。
- ⑤鉢頭に刻みを入れた花形鉢の可能性がある。

このうち、④、⑤の特徴は年代を考察する上で重要である。まず④の責金具であるが、共通する特徴をもつものは神奈川県伊勢崎稲荷山古墳、京都府物集女車塚古墳（C群）、埼玉県永明寺古墳などから出土している^②。また県内では、出雲市刈山5号墳出土例がある。陶邑編年によるMT85型式並行期が中心であり、物集女車塚例はTK43型式並行期に位置づけられる。

次に⑤にあげた花形鉢をもつ雲珠（辻金具）は、大阪府海北塚古墳、京都府物集女車塚古墳、奈良県三里古墳などが知られる。これらの年代もMT85～TK43（古相）型式並行期に位置づけられる。ただし、花形鉢を1脚に2つ打つ例は本例の他に知られていない。

【まとめ】

以上に述べた点から、手間古墳出土の馬具は、MT85型式ないしはTK43型式古相に並行する時期のものと考えられる。わずかな破片からの推定であり断定することは危険であ

るものの、手間古墳の築造時期を他地域と同じ尺度で考える上で貴重な資料といえる。また、畿内周辺で一括生産された画一性の高い金銅装の馬具を副葬していたことは、手間古墳の被葬者像をうかがわせる好資料である。

(島根県埋蔵文化財調査センター 松尾光晶)

註

- (1) 花谷 浩 1996「鞍作の技術とその変遷」『畿内政権と鉄器生産 第2回鉄器文化研究集会発表要旨』
松尾光晶 1999「上塙治築山古墳出土馬具の時期と系譜」『上塙治築山古墳の研究』
島根県古代文化センター調査研究報告書4、島根県古代文化センター
- (2) 宮代栄一 1993「中央に鉢を持つ雲珠・辻金具について」『埼玉考古』第30号、埼玉考古学会

4. まとめと若干の考察

I. 発掘調査のまとめ

まず、3次にわたる発掘調査によって明らかになったことを以下にまとめておきたい。

1. 墳丘について

- ①古墳は、地山を掘り込んで墳端を造り、地山の上に盛土をして墳丘を造成している。盛土は明るい色の土と黒っぽい土を交互に積んでおり、各盛土層は、少なくとも墳丘表面近くでは、墳丘の高い側がやや低くなるように積むのが特徴である。墳丘斜面には、互層状の盛土の表面を褐色土等で覆い、いわば「化粧土」のような盛土をして仕上げた部分がある。
- ②盛土の断面観察によれば、一部の黒色土の盛土は、あたかも上糞に入れて積んだような状況を示していた。
- ③狭い範囲での所見だが、後円部と前方部をそれぞれ築成した後、その間に盛土をして鞍部を造成しているように観察される。
- ④後円部は4段、前方部は3段に築成されており、後円部・前方部ともに、上の2段に葺石が施されていたと考えられる。ただし、葺石は崩落が激しく、原位置を保っているものはほとんど確認できなかった。
- ⑤調査したすべてのトレンチで、表土および流土中から須恵器片と埴輪片を検出したが、原位置をとどめるものはなかった。

2. 後円部の窪みについて

- ①後円部南側にある大きな窪みは、埋葬施設を破壊した跡であると推定される。ここでは、大規模な掘削が二度にわたって繰り返され、特に最初の掘削は地山に至るほどの大がかりなものであった。その埋め土中には多くの石が散乱し、一部におびただしい量の白色凝灰岩片が見られた。石の中には、面取りを施された凝灰岩の石塊もあった。これらの石のあり方から、ここにはかつて石室があったと推定され、それが後に、原位置には何も残さないというほどの徹底的な破壊を被ったことが分かった。石室破壊の時期を示す遺物は検出されていない。
- ②最初の掘削による擾乱土中から、数点の馬具片が採集された。ここが石室の跡であることを裏付けるとともに、占墳の築造年代を知る重要な資料である。

3. 「造出」状の地形について

- ①KN 1 トレンチの所見によれば、「造出」状の地形は、東西15m前後の方形もしくは長

方形を呈していた可能性がある。しかし、この地形の西半は耕作による破壊のため本来の姿がほとんど失われており、全形をつかむことは出来なかった。

- ②「造出」状地形の頂上は後円部墳丘の1段目テラスとほぼ同一レベルで、それに接続する地形となっているが、T3トレンチの発掘結果によれば、当初は後円部と「造出」状地形は接続しておらず、後から盛土してこの接続部を造成したことが判明した。
- ③T2トレンチの所見によれば、この高まりの盛土は墳丘の盛土と同様の造成法で造られている。これらのことなどから、この部分の造成は、後円部の築成後あまり間をおかずに、恐らくは一連の作業としてなされた可能性が強い。
- ④「造出」状地形周辺からも埴輪片や須恵器片が出土したが、原位置を示すものはなかった。

(田平 秋・渡辺貞幸)

II. 出土遺物と古墳の時期

今回の調査において出土した遺物については既に詳述した。須恵器・埴輪は全発掘区で出土しており、形象埴輪が「造出」状高まり付近に偏在して検出されたほかは、発掘箇所によって内容に特色があるということはない。埋葬施設跡と考えられるKSトレンチにおいても、須恵器・埴輪については他の発掘区と大差ないものが出土している。

須恵器のほとんどは子持壺である。これまでの採集品（渡辺1986、広江1989、島根大学考古学研究会1995a）とともに、いずれも柳浦俊一氏が「有脚IV類の古相」と分類した（柳浦1993）もので、池瀬俊一氏の検討によるとその中でも初期の段階に属するものである（池瀬2001）。柳浦氏によれば、時期の分かれる有脚IV類の最古例は松江市薄井原古墳出土品であり、「古相」のものは山本清氏による須恵器編年（山本1960）のⅢ期（新）には少なくなるという。薄井原古墳の須恵器は山本編年Ⅲ期の初期で、陶邑編年のTK10型式新相（＝MT85）に併行すると考えられることから、同古墳は前方後円墳研究会編年の9期後半の築造と考えてよい（渡辺ほか1991）。山本編年Ⅲ期の下限と陶邑編年との併行関係についてはいくつかの考え方がある（渡辺ほか1991、松本・柳浦1991、大谷1994など）が、いずれにしてもこの子持壺は、前方後円墳研究会編年の9期の後半から最後期である10期の前半（TK43型式併行期）頃までに製作されたものという目安を得ることが出来る。

円筒埴輪は、基本的に底部調整を有するものであった。筆者はかつて、本古墳でたまたま底部調整のない埴輪片を採集し、それに基づいてこの古墳の年代を考えたことがあった（渡辺1986）。しかし、発掘調査の結果は、この採集資料は本古墳では例外的な埴輪—恐らくは形象埴輪の基底部—だったことを示しており、それを根拠にした筆者の年代観は撤回しなければならない。同じ論文で筆者は、川西宏幸氏によって提示された埴輪編年（川西1978）を出雲地方に適用することを試み、円筒埴輪の底部調整は当地方では山本編年のⅡ

期までに一般的になることを明らかにしたが、むしろその例として本古墳が挙げられるべきであった。

当古墳の円筒埴輪の底部調整は、その初規則に見られるカット技法が絶無なので、やはり山本編年のⅡ期以降、つまりMT15型式併行期以降、前方後円墳研究会編年の9期以降の所産と考えてよい（渡辺ほか1991、藤永1997）。

今回の発掘では、本古墳の年代を検討するに当たってきわめて重要な遺物が出上した。破壊された横穴式石室跡と考えられるKSトレンチにおいて、擾乱土中から検出された馬具の破片である。これについては鳥根県埋蔵文化財調査センターの松尾充品氏に検討をお願いし、報文もいただくことが出来たが、同氏のご教示によると、陶邑編年のMT85型式を中心にTK43型式にかけての時期に見られるものである。横穴式石室とすれば追葬の可能性を考えておかなければならぬことは言うまでもないが、これらの馬具片が、今日のところ、古墳の築造時期を根拠を持って限定できる唯一の資料であることも間違いない。また、その年代観は、上述の須恵器・埴輪の年代観とも整合している。

以上の検討から、本古墳の築造年代について、陶邑編年のTK10型式新相即ちMT85型式からTK43型式にかけての併行時期、前方後円墳研究会編年では9期後半から10期前半にかけての時期内、山本編年ではⅢ期のうち末までは下らない時期、という結論を導くことが出来る。実年代で示せば、6世紀中葉から後半にかけてということになろう。これは測量調査の報告（鳥根大学考古学研究会1995a）の結論とほぼ一致する。

（渡辺貞幸）

III. 埋葬施設の問題

KSトレンチの発掘によって、後円部南斜面にある大きな窪みは石室の大がかりな破壊の跡であることが判明した。この窪みは2次にわたる大掘削の結果生じた穴であるが、最初の掘削は特に大規模で、ここにあった埋葬施設だけでなく、施設下の地山および周囲の埴丘盛土にまで及ぶ徹底的な破壊であった。そのため、いざれの発掘区においても埋葬施設の掘り形もしくは裏込めなどを確認することさえ出来なかった。要するに、石室本体はもとより石室掘り形ないし裏込めの外まで、そして石室床面の下まで、一切合切を破壊し尽くしたらしいのである。

この窪みの位置や形状から、埋葬施設は南に開口する横穴式石室であったと考えられよう。今回の発掘成果によって、その実態について検討してみたい。

石室そのものの規模は不明とせざるを得ないが、石室掘り形の北限はKSトレンチA東区内にある。同区南北セクションの様相からすると、ここでは地山を掘り下げて掘り形を造り、石室構築に合わせて背後に盛土を行う工法だったと考えられる。一方、石室の南側については、B西区で掘削坑の下位に残存していた盛土が石室（羨道？）もしくは前庭部

の基底になされた盛土だったと考えられるので、この辺りでは盛土をした上に構築したことが分かる。つまり、地山の高い北側では掘り形を造り、低い南側では盛土して、石室構築の基底面を整えたと考えられる。なお、石室の南限に関する情報はほとんどないが、B区における前述の盛土の残存レベルや周辺の墳丘のセンターからすると、前庭部を含めて全長10m前後の石室施工域を想定することが可能である。

石室掘り形の東限・西限については、A区の発掘区内では確認できなかったので、トレーナーの外側まで広がっていた可能性がある。南寄りのB区では両側の墳丘盛土が確認できたが、それによると、ここにおける石室（狭道？）石材外縁もしくは前庭部の幅は、およそ2.5m以内だったということになる。

次に、石室に使用された石材についてふれておきたい。

掘削坑の埋め上中には大量の石が混在していたが、葺石と同じような円碟・並円碟・亜角碟のほか、白色の凝灰岩塊、そしておびただしい量の白色凝灰岩片や岩屑が見られた。発掘区南側の特にB東区では、この岩屑が幾重にも層をなしている部分があって、岩盤と見間違えるほどであった。

既述のように、北側のA東区で一面をきれいに面取りした凝灰岩の石塊が検出された。石材の大きさや形状から石棺石材とは考えられず、石室石材であると推定された。こうして、ここにこうした石を使用した石室があったこと、そして大量の凝灰岩片は、石室を破壊したときに使用石材そのものまで破碎した結果生じたものであることを推定させたのである。

この凝灰岩は、島根大学総合理工学部の澤田順弘教授の鑑定によって、安来市荒島で産出するいわゆる「荒島石⁽¹⁾」であることが判明した。つまり、ここには加工した「荒島石」を使用した横穴式石室があったことが想定される。「荒島石」以外の円碟等は、葺石として使用されていた石が落ち込んだものと考えられるが、石室の裏込めに使われていた石もあったかもしれない。

「荒島石」を埋葬施設の石材として使用した古墳については、守岡正司氏による集成がある（守岡1996）。それによると、6世紀後半以降に松江市域にもいくつかの例が知られるようになるが、すべていわゆる石棺式石室であり、また、後期の前方後円墳は1例もない。本古墳の石室がどのようなものであったのかは不明で、通常の石積みの石室だった可能性も否定できない。もしそうだとすれば、本墳はこれまで全く知られていなかった新しい例ということになる。

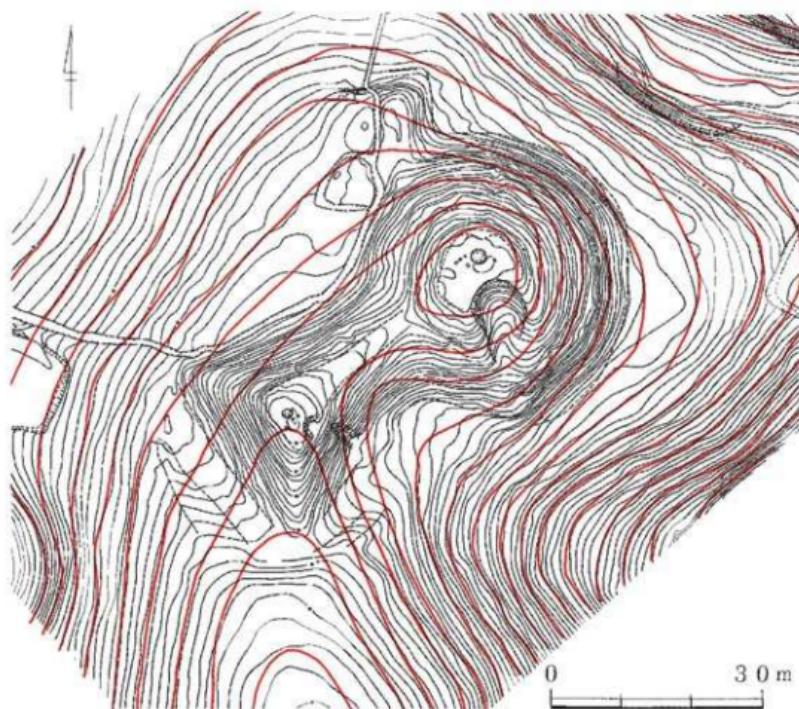
ところで、繰り返し述べてきたように、後円部に加えられた大掘削はきわめて広く深く、かつ、現地には石室石材を含めて本米の姿のものは一切残さないというくらい徹底していた。とても副葬品目当ての盗掘とは考えがたいものがある。いつの時代のことかは分からぬが、古墳完成後に、何らかの理由で主体部のすべてを完全に抹殺してしまうという行為があったのである。

（渡辺貞幸）

IV. 「造出」状地形について

後円部の北西側にあるこの不思議な地形の正体については、はっきりした結論を得るには至らなかった。これは、この地形の西方が後世の耕作によって完全に破壊されていて、全貌をつかむことが不可能だったことによる。ただ、その東半部に関しては、Iで述べたような諸事実を明らかにすることが出来た。

この地形は、通常見られる「造出」と比較すると古墳への取り付き方がかなり特異である、後円部紀部に斜めに接続し、現状では、西側はあたかも自然地形と一体化してしまっているように見える。寡聞にして類例を知らないのであるが、しかしそのあり方からすれば、やはり一種の「造出」と表現せざるを得ない。それは、その頂上のレベルが後円部1段目のテラス面とはほぼ等しく、かつ、それに続くよう造成されていること、盛土の仕方が古墳墳丘のそれと共に通していること、古墳築成に続く一連の作業で造成されたらしい



第32図 古墳周辺の復元地形（赤線、1mセンター）

こと、などによる。東辺がほぼ正南北を向いているのも、何らかの企画性の存在を思わせる。また、Tトレンチは須恵器片や埴輪片の出土数が多く、特に、確実な形象埴輪片はすべてここで出土していることも、ここが祭儀の場であったことを傍証するものかもしれない。

「造出」状地形について考えるとき、自然地形がこの東縁付近から西に向かって急に高くなっていることも考慮する必要がある。K4、T1、T3各トレンチにおける墳壠付近のマンガン・バンドのレベルを比較すると、それぞれ19.6m、20.7m、21.6mとなっている。実際にはその上に橙色土が載っているので、これが旧地表面を表すわけではないが、自然地形の傾斜を反映していることは間違いない。次節で述べるように、後円部1段目は墳丘を全周せず、後円部東側の低い地形の部分のみに造成された、一種の基壇であると考えられる。つまり、自然地形の高くなるこの辺りから西では1段目を造成することを放棄しているのであるが、その際、これに連続させた形で何らかの施設を造ることが計画され、地形を利用しつつ盛土も加えて、「造出」状に整形したと考えることが出来るであろう。従って、敢えて表現すれば、この施設は後円部基壇に付設された「造出」ということになる。

なお、第32図は、各トレンチで検出した地山のレベルを参考にして古墳築造以前の旧地形の等高線を推定復元し、現地形に重ねた図である。第3図の周辺地形図と併せ見ることによって、本古墳の立地と造成の実際がおおよそ理解できよう。丘陵端部の丘を取り込んで築造工事が行われたが、地形の落ち込む南東側はかなり無理な設計であったことが窺える。

(渡辺貞幸)

V. 墳丘の復元

KトレンチとZトレンチの調査によって、後円部が4段、前方部が3段に築成されていたことが推定できた。葺石は、前方部・後方部とも上の2段のみに葺かれていたと考えられる。

澤田順弘教授の鑑定によると、葺石の石材は次のようなものである。大部分は石英安山岩で、他に、石英斑岩、アブライト質花崗岩、アルカリ玄武岩、流紋岩質凝灰岩、流紋岩質自破碎溶岩などが見られ、その亜角礫もしくは亜円礫が使用されている。このうち石英安山岩はいわゆる「和久羅山安山岩」で、古墳のすぐ北方にある嵩山^{たけさん}や和久羅山付近で採取でき、他の石も近場で採取可能なものである。

さて、発掘区内における各段のレベル等については概略次のように想定されている(第8図参照。なお、墳頂のレベルは現存高とした)。

第1表 墳丘テラスのレベルと幅の推定値

後円部後方斜面	レベル (m)	幅 (m)	前方部後方斜面	レベル (m)	幅 (m)
墳 端	19.6	—	墳 端	23.2/23.6	—
1段目	22.8	2.1	1段目	25.2	2.3
2段目	24.8	2.5	2段目	26.8	1.2
3段目	26.4	1.5	3段目	28.3	—
4段目	27.9	—			

もとよりこの数値は厳密なものではないが、段のレベルについて言うと、前方部と後円部の各段は1段ずつずれてレベルが近似していることに気付く。つまり、前方部3段目と後円部4段目、前方部2段目と後円部3段目、という具合である。

これは、現状の後円部1段目の裾が後円部を全周せず、東側の過半ぐらいしかめぐっていないように観察されることとも符合する。前記したように、後円部北側では「造出」を造成して後円部1段目を終わらせているし、南側でも、くびれ部近くで墳裾のレベルが急に高くなっている。

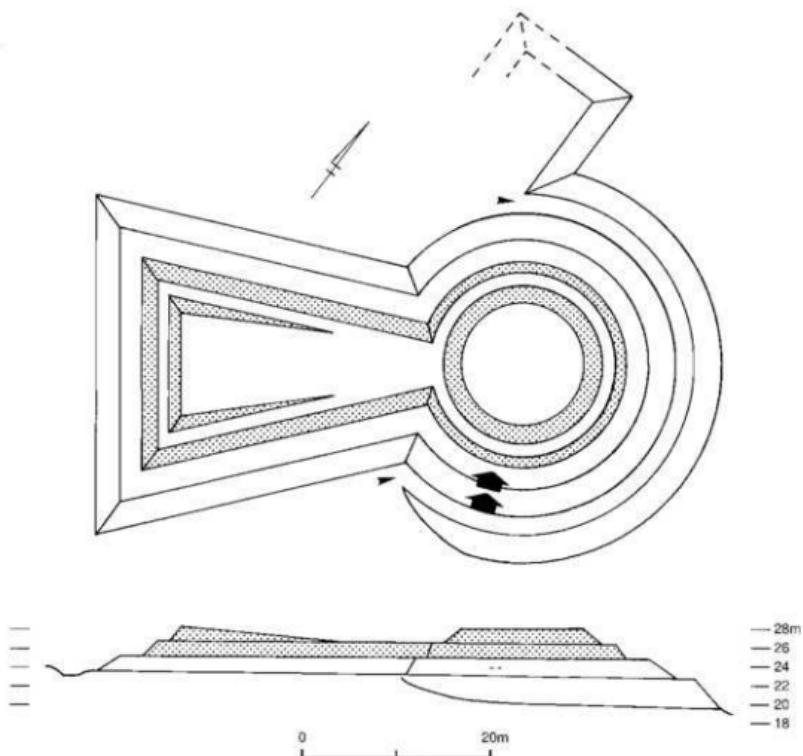
こうしたことから、後円部の1段目は古墳を全周するものではなく、後円部の一部のみをめぐって、北側で「造出」状地形に連接する形状だったと考えられる。従って、前方部と後円部の各段は1段ずつずれて繋がり、それぞれほぼ水平なテラス面を造っていたと推定される。このように考えると、上の各2段に施された真石も連続することになり、辻接も合うのである。後円部1段目とした部分は、後円部の地形の低い側だけに造られた、いわば基壇のようなものであった。

要するに、手間古墳は後円部に基壇を備えた3段築成の前方後円墳である、と表現するのが誤解のない言い方ということになる。但し混乱を避けるために、以下の文章でも後円部基壇に当たる部分をこれまで通り1段目と呼んでおく。

さて、以上のような検討結果を踏まえて試みに作成したのが、第33図の墳丘復元模式図である。なお、前方部端については報文中で2案を示しておいたが、前方部両側の稜線(隅角)の位置を勘案すると墳丘寄りの立ち上がりを墳端とした方がより整合性が高いので、以下、そのように考えて話を進める。

古墳の規模については、Kトレントの所見と現状の等高線の流れからすると、後円部1段目(基壇)の裾は直径およそ42mの円弧を描く。そして、主軸上で前方部端から後円部1段目端まで測ると約66mであり、これが墳丘の全長ということになる。但し、その輪郭は前方後円形にはならない。因みに、前方後円形墳丘の全長は約61mで、後円部2段目の直径は約32mと復元される。前方部前面の幅については、Zトレントにおける墳端と現状の稜線(隅角)の位置から岡上復元すると、およそ36mとなる。

また、復元される古墳の主軸方位は、座標北を基準にN127°Wである¹³⁾。



第33図 手間古墳墳丘復元模式図（矢印は石室へのアクセス）

なお、本墳のように墳丘の一部に基壇状のものを造成することは、傾斜地に立地する大型古墳によく見られる。山陰では、安来市の大成古墳や造山1号墳のような前期の大方墳で既に行われており（渡辺・金山編1995）、後期の大型前方後円墳では鳥取県淀江町の右馬谷古墳の例がある（中山範1990）。また、墳丘の最下段に葺石を施さない例としては、後にふれる松江市の山代二子塚古墳が挙げられる（鳥谷・丹羽野編1992）。

次に、墳丘と石室の関係について検討する。KSトレンチB西区の所見によれば、この地点における石室もしくは前庭部の床面レベルは24m前後だったと推定される。このトレンチは想定される後円部墳丘3段目のちょうど外縁付近の位置であり、24mというレベルは墳丘2段目の中程に当たる。従って、2段目のテラスから一段下がった位置に前庭部床面があって、石室本体は3段目の墳丘で覆われるという構造だったと考えられる。

この場合、埋葬時における石室へのアクセスは、後円部1段目（基壇）テラス面から上がって行くように設定されていたと推定されるから、この基壇面は葬列の通路としても機能していたはずである。この基壇面には、南側くびれ部近くの基壇が消失している地点と、北側の「造出」上面からの、双方から取り付くことが出来る（第33図の矢印参照）。古墳の埋葬施設への動線に関しては前期・中期の古墳を中心に検討がなされている（和田1997、近藤1999）が、本墳は後期古墳における好資料である。

（渡辺貞幸）

VI. 「大橋川の谷の古墳群」再考

筆者はかつて、出雲各地の首長間の力関係は6世紀前半頃に大きく変化し、6世紀半ばから後半にかけて、東部の山代・大庭古墳群と西部の今市・塩治古墳群の2カ所のみが大型古墳を築造するようになったことを指摘した（渡辺1983・1986）。この変化は、東西出雲のそれそれで、この前後に政治的再編・統合の動きが急激に進んだことを物語る。東部出雲の場合、この劇的变化は山代・大庭古墳群にある山代二子塚古墳（出雲最大の墳長94mの前方後方墳）被葬者のリーダーシップによって成し遂げられたと考えられるが、彼の出自については、旧稿で「大橋川の谷の古墳群」との関係を想定しておいた。筆者が「大橋川の谷の古墳群」と仮称したのは、かつて東森市良氏が竹矢・矢山古墳群と呼んだ（東森ほか1979）グループのうち、大橋川が狭い谷となっている辺りを意識して築造された大型諸古墳を指す。ここは5世紀後半までに、松江・意宇平野周辺を基盤とする政治勢力一「オウの國」（渡辺1998）の最有力首長の墓域になっていたと考えられるのである。

これらの構想は現在でも動かないが、大橋川の谷の古墳群の1基である手間古墳は6世紀中葉ないし後半になってから、つまり、山代二子塚古墳被葬者の東部出雲における霸権が確立した後に造られていることが、今回の調査で判明した。こうした事実を踏まえて、改めてごく簡単に時代像についてふれておきたい。

なお、大橋川の谷の古墳群に関しては、その後、埴輪や須恵器の研究が著しく進展したのをうけて、竹矢岩船古墳の埴輪が紹介される（島根大学考古学研究会1995b）など資料の蓄積も進み、再検討もなされている（島根大学考古学研究会1995c）。筆者も『前方後円墳集成』補遺編（近藤編2000）を編む過程で編年を再考したが、それに手間古墳を書き加えたものを第2表に示した³³。第34図は関連古墳の位置を示す分布図である。

この表から読み取れる重要な点は、山代二子塚古墳の時代もしくはその後にも、大橋川の谷に手間古墳（墳長66m）、そして山代・大庭古墳群と古墳群の中間地帯に東瀬寺古墳（復元墳長62m）というように、東部出雲最大クラスの前方後円墳がごく近くに造られているという事実である。両古墳とも、当時の最有力古墳群であった山代・大庭古墳群や有古墳群とやや離れたところに造られていて、おまけに遺憾ながら両者とも大破壊を被つ

第2表 出雲の古墳編年表（渡辺ほか1991に加筆改訂）

2613.

地 図	名 称	内 部 部		西 部		中 部		東 部		
		美伊川 中・上流	宍道湖西岸	宍道湖東岸	宍道湖北岸	雄武平野	松江北部	松江南部	飯石川以西	飯石川以東
1 期	下 神社 口 2号					名分丸山 ■38			龟津山1号 ■25	
2 期	1 期								大 坂 口 1号	庄 山 口 1号
3 期	II	松本1号 ■50	2山地 □24	1大寺1号 ■50	上野1号 ○36	奥才13号 □3		八日山 1号 □24	守 庄 山 口 1号	庄 山 口 1号
4 期						奥才14号 □18				
5 期	III					大原大 塚1号 ○44				
6 期						丹花尾 □48				
7 期	IV	I					大 原 3号			
8 期	期					吉曾志太谷 1号 ○46	井 石 井 3号			
9 期	V	古					奥才1号 □10	向山西2号 ■19	富山3号 ■24	乃本2号 ■35
10 期	古 新	妙蓮寺山 大 全 9号	上島 *	林43号 ■16			高井原 ■60	44	庄山 ■50	上島 ■50
	N	大鏡2号 ■29	上原治塚山 *					古 神 山 27号	弘山 ■47	
	期	妙 蓮 寺 山	*					山代方塚 口 45	森 谷 岩 谷	
								森 谷 口 14		

●前方後円墳 ■東西双方墳 ○円墳 □方墳 * 墓形不明

ているのであるが、この2占墳をどのように評価するかが問題になる。なお、大橋川北岸の魚見塚古墳（墳長62m）もこのころのものとする見方がある⁽¹⁾（島根大学考古学研究会1995c）。

手間古墳は出雲東部では最大の前方後円墳であり、山代二子塚古墳に次ぐ規模をもつ。その被葬者は、前代に大橋川の谷に大型墳を造った「オウの国」の支配的氏族の出身で、従って山代二子塚古墳被葬者とも同族であり、彼を補佐する立場にあった人物であったと考えられる。東部出雲最高首長の奥津城は山代・大庭古墳群の地に定まり、それを補佐した手間古墳被葬者は自分の出身氏族であるそれまでの土族の墓域、即ち大橋川の谷に、自らの墓を造ったのであろう。魚見塚古墳がもし前後する時期のものとすれば、やはり同じような被葬者像を想定することが出来よう。

東淵寺古墳についても、筆者は古墳の規模などを根拠に、山代二子塚古墳→山代方墳と統く最高首長の傘下にいた有力首長を被葬者として想定している（渡辺1986）。この時期には、東部出雲の最高首長権は山代二子塚古墳被葬者から山代方墳被葬者⁽²⁾へと引き継がれていたが、その補佐的立場の人物は前方後円墳に葬られたのである。そしてこれらの古墳は、東部出雲最後の大型前方後円墳となった。



第34図 周辺の主要古墳分布図（ベースマップはGGVを使用）

- | | | | |
|--|---------------------------|---|----------------------|
| 1. 手間古墳
2. 魚見塚山墳
3. 石屋古墳
4. 荒神塚古墳
5. 井ノ奥1号墳
6. 井ノ奥4号墳
7. 竹久岩船古墳
8. 越田1号墳
9. 上竹矢7号墳 | 大橋川の谷の古墳群

竹久・矢田古墳群 | 10. 大庭鶴塚古墳
11. 山代二子塚山墳
12. 山代方墳
13. 永久宅後古墳
14. 向山1号墳
15. 東瀬守古墳
16. 団原古墳
17. 岡田山1号墳
18. 岡田山2号墳
19. 岩屋後古墳
20. 御崎山古墳 | 山代・大庭古墳群

有古墳群 |
|--|---------------------------|---|----------------------|

前方後円（方）墳最終末期のこの地域の政治構造は思いの外複雑かつ重層的らしい。いろいろな仮説を立てることは可能だが、個々の古墳の検討が必ずしも十分でないため、未だ確定的なことは言えない部分も多い。有古墳群の再評価もなされている（大谷編1996）が、こうした研究成果の積み上げが引き続き求められている。私たちも問題意識を研ぎ澄ませながら、地域史解明の努力を続けていきたいと思う。

（渡辺貞幸）

註

- (1) 組成的には黒雲母流紋岩・軽石・火山礫凝灰岩-凝灰岩からなる火碎流堆積物である(鹿野ほか1994)。
- (2) この地点での真北方向角はおよそ-33°である。
- (3) この表には時期未詳の古墳は載っていないことに注意されたい。第34図に見るよう手間古墳の周辺には他に上竹矢7号墳(64m)、魚見塚古墳(62m)、廻田1号墳(57m)などの大型前方後円墳があり、有古墳群には岡田山2号墳という大円墳(径44m)がある。
- (4) 魚見塚古墳は、現状の墳丘形態は古相を呈するが採集資料は6世紀後半頃のものである。かつて筆者は墳丘形態を優先して考えた(渡辺1986)が、墳丘がかなり変形している可能性は否定できない。
- (5) 山代方墳被葬者の性格については、(渡辺1985)を参照されたい。

引用文献

- 池淵後一 2001「まとめ」『平成12年度国指定史跡山代二子塚環境整備事業に伴う発掘調査報告書-山代二子塚古墳-』島根県教育委員会
- 大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集
- 大谷晃二編 1996『御崎山古墳の研究』八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅲ、島根県教育委員会・島根県立八雲立つ風土記の丘
- 施野和彦・山内靖喜・高安克己・松浦浩久・豊 遙秋 1994『松江地域の地質』地質調査所、48頁。
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号
- 近藤義郎 1999「前方部とは何か」『古代吉備』第21集
- 近藤義郎編 2000『前方後円墳集成』補遺編、山川出版社
- 島根大学考古学研究会 1995a「手岡古墳測量調査報告」『菅田考古』第17号
- 島根大学考古学研究会 1995b「竹矢岩船古墳の埴輪について」『菅田考古』第17号
- 島根大学考古学研究会 1995c「大橋川の谷の古墳群をめぐって」『菅田考古』第17号
- 鳥谷芳雄・丹羽野裕編 1992『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書-山代二子塚古墳-』島根県教育委員会
- 中山和之編 1990『向山古墳群』淀江町教育委員会
- 東森市良ほか 1979「発展期古墳の地域相」「さんいん古代史の周辺(中)」山陰中央新報社
- 広江耕史 1989「古墳時代」『竹矢郷土誌』松江市竹矢公民館
- 藤永照隆 1997「出雲の円筒埴輪編年と地域性」『島根考古学会誌』第14集
- 松本岩雄・柳浦俊一 1991「山陰」「古墳時代の研究」第6巻、雄山閣出版

- 守岡正司 1996 「来待石を使った古墳」『宍道町歴史叢書』1
- 柳浦俊一 1993 「鳥根・鳥取県出土子持壺集成」『鳥根考古学会誌』第10集
- 山本 清 1960 「山陰の須恵器」『開学十周年記念論文集』島根大学
- 和田晴吾 1997 「幕墳と墳丘の出入口－古墳祭祀の復元と発掘調査－」『立命館大学考古学論集Ⅰ』
- 渡辺貞幸 1983 「松江市山代二了塚古墳をめぐる諸問題」『山陰文化研究紀要』第23号
- 渡辺貞幸 1985 「松江市山代方墳の諸問題」『山陰地域研究（伝統文化）』第1号
- 渡辺貞幸 1986 「山代・大庭古墳群と5・6世紀の出雲」『山陰考古学の諸問題』
- 渡辺貞幸 1998 「律令以前の『出雲国』－考古学からみた政治史－」『出雲古代史研究』
第7・8合併号
- 渡辺貞幸・内田律雄・曳野律夫・松本岩雄 1991 「出雲」「前方後円墳集成」中国・四
国編、山川出版社
- 渡辺貞幸・金山尚志編 1995 「大成古墳第3次発掘調査報告書」安来市教育委員会、
22-23頁。

第3表 手間古墳須恵器観察表

子持壺子盒				
口 線 部		外面調整	内面調整	色 調
番号	出土トレンチ	口径(cm)		
1	T2	10.1	回転ナデ	回転ナデ (外) 黄灰2.5Y6/1 (内) 黄白2.5Y7/1
2	T1	11.2	回転ナデ	回転ナデ (外) 黄7.5Y5/1 (内) 黄7.5Y6/1
3	T2	11.6	回転ナデ	回転ナデ (外) 黄7.5Y4/1 (内) 黄白7.5Y7/1
4	T2	10.8	回転ナデ	回転ナデ (外) 黄7.5Y5/1 (内) 黄7.5Y6/1
5	KS	9.2	回転ナデ	回転ナデ (外) 黄灰2.5Y6/1 (内) 黄白2.5Y7/1
6	T2	12.4	回転ナデ	回転ナデ (外) 黄灰2.5Y6/1 (内) 黄白2.5Y7/1
7	KSAE	11.8	回転ナデ	回転ナデ (外) 黄5Y6/1 (内) オリーブ黄5Y6/3
8	T2	10.6	回転ナデ	回転ナデ (外) 黄7.5Y5/1 (内) 黄5Y6/1
9	T3	11.8	回転ナデ	回転ナデ (外) 黄7.5Y5/1 (内) 黄灰2.5Y6/2
10	KSAE	11.4	回転ナデ	回転ナデ (外) 黄灰2.5Y6/2 (内) 黄灰2.5Y7/2
11	KSAE	11.8	回転ナデ	回転ナデ (外) 黄5Y6/1 (内) 黄色5Y7/1
12	KSAE	10.4	回転ナデ	回転ナデ (外) 黄7.5Y5/1 (内) 黄7.5Y6/1
接合部				
番号	出土トレンチ	子壺測定(cm)	外面調整	内面調整
13	表採	6.8	(子壺) ナデ (親壺) タタキ目、ナデ	(子壺) ナデ (接合部) 粘土貼り付け痕 (親壺) 当て具痕
14	表採	9.1	(子壺) ナデ (親壺) わざかにタタキ目、ナデ	(子壺) ナデ (接合部) 粘土貼り付け痕、 拘オサエ
15	K-3	6.8	(子壺) ナデ (親壺) わざかにタタキの後、ナデ	(子壺) ナデ (接合部) 粘土貼り付け痕 (親壺) 当て具痕
16	表採	8	(子壺) ナデ (親壺) わざかにタタキ目、ナデ	(子壺) ナデ (接合部) 粘土貼り付け痕 (親壺) 当て具痕
17	T2	《山線》12.2 (子壺測定) 7.2	口縁から子壺にかけて回転ナデ、接合部タナデ	(子壺) ナデ (接合部) 粘土貼り付け痕 (親壺) 当て具痕
18	T2	-	ナデ	(子壺) ナデ (接合部) 粘土貼り付け痕 (親壺) 当て具痕
19	T2	7.8	(子壺) ナデ (親壺) タタキ目、ナデ	(子壺) ナデ (接合部) 粘土貼り付け痕 (親壺) 当て具痕
20	KSAE	7	回転ナデ、指痕	回転ナデ (外) 黄5Y5/1 (内) 黄白5Y7/2
21	T3	7.8	ナデ	回転ナデ、粘土接合痕 (外) 淡黄2.5Y5/1 (内) 淡黄2.5Y7/4
22	T3	7.9	ナデ	回転ナデ、粘土接合痕 (外) 黄5Y5/1 (内) オリーブ5Y6/2

子持壺					
機窓口縁部					
番号	出土トレンチ	口径(cm)	外面調整	内面調整	色調
23	T 3	21.6	回転ナデ	回転ナデ	(外) 黄灰2.5Y5/1 (内) 灰黄2.5Y6/2
24	T 3	19	回転ナデ	回転ナデ	(外) 灰黄2.5Y6/2 (内) 灰2.5Y7/2
裏窓体部					
番号	出土トレンチ	径(cm)	外面調整	内面調整	色調
25	K-4	-	タタキ目、ナデ	同心円状當て具痕	(外) 黄2.5Y5/1 (内) 灰2.5Y6/1
26	T 2	-	タタキ目、ナデ	同心円状當て具痕	(外) 黄2.5Y6/2 (内) にぶい黄2.5Y6/3
27	T 3	24	タタキ目、強いタテナデ	同心円状當て具痕	(外) 黄オリーブ5 Y6/2 (内) 灰白2.5Y7/2
機窓脚部					
番号	出土トレンチ	径(cm)	外面調整	内面調整	色調
28	T 2	-	幅1.2~1.5cmのタテナデ	當て具痕、ヨコナデ	(外) 黄灰2.5Y6/1 (内) 灰黄2.5Y7/2
29	K-3	-	幅1cm前後のタテナデ	幅1~2cm前後のヨコナデ	(外) 浅黄2.5Y7/3 (内) 浅灰2.5Y7/3
30	K-2	31	タタキ目、ヨコナデ、指痕	不整方向のナデ	(外) 浅黄2.5Y7/3 (内) 浅黄2.5Y7/4
31	T 1	26	タタキ目、上部タテナデ、ヨコナデ	ヨコナデ	(外) 浅黄2.5Y7/3 (内) 浅黄2.5Y7/3
裏					
番号	出土トレンチ	外面調整	内面調整	色調	備考
32	ZS	沈線、波状文	-	(外) 灰7.5Y5/1 (内) 灰オリーブ5 Y6/2	
35	ZS	タタキ、カキ目	同心円状當て具痕	(外) 灰5 Y6/1 (内) 灰オリーブ5 Y6/2	
33	ZS	沈線、波状文	-	(外) 灰7.5Y5/1 (内) 灰5 Y6/1	
34	A	ヨコナデ、波状文、沈線	ヨコナデ	(外) 灰白5 Y7/1 (内) 灰白5 Y7/2	内外面に自然釉が見られる
36	表様	クシガキ、二重辻 模の下部に波状文	ヨコナデ	(外) 黄灰2.5Y5/1 (内) 暗黄灰2.5Y4/2	塗頸部の破片
37	T 2	タタキ目	同心円状當て具痕	(外) 灰黄2.5Y6/2 (内) 灰白2.5Y7/1	外面に自然釉が見られる
38	T	タタキ目	ハケ目、當て具痕	(外) 灰黄2.5Y6/2 (内) 黄灰2.5Y6/1	
39	KN	タタキ目	同心円状當て具痕	(外) 灰黄陶10YR5/2 (内) 黄灰2.5Y6/1	
蓋					
番号	出土トレンチ	外面調整	径(cm)	内面調整	色調
40	T 1	ヨコナデ	17	ヨコナデ、体部當て具痕	(外) 黄灰2.5Y6/1 (内) 黄灰2.5Y5/1
41	T 2	ヨコナデ	9	ヨコナデ、粘土接合痕	(外) 黄2.5Y6/1 (内) 灰白5 Y7/2
42	T 3	ヨコナデ	15	指板、不整なナデ、粘土接合痕	(外) 暗灰2.5Y5/2 (内) 黄灰2.5Y6/2

第4表 手間古墳埴輪観察表

円筒埴輪						
No.	トレンチ	部位	法量(cm)	外面調整	内面調整	色調
1	K-2	口縁部	LJ径: 28.3	-	ナナメハケ	(外) 明赤褐色2.5YR5/8 (内) にぶい赤褐色5YR5/4
2	Z-2	口縁部	LJ径: 26.3	ナナメハケ	-	(外) 明赤褐色5YR5/6 (内) 明赤褐色5YR5/6
3	Z-2	口縁部	LJ径: 26.0	ナナメハケ	ナナメハケ	(外) 明赤褐色5YR5/8 (内) 橙色5YR6/8
4	KS	口縁部	LJ径: 23.9	ナナメハケ	ヨコハケ	(外) にぶい橙色5YR6/4 (内) 橙色5YR6/6
5	Z-2	口縁部	LJ径: 26.5	ナナメハケ	ヨコハケ	(外) 橙色5YR6/8 (内) 橙色5YR6/6
6	Z-2	口縁部	-	-	ヨコハケ	(外) 橙7.5YR6/8 (内) 橙色5YR7/8
7	Z-2	胴部	-	ナナメハケ	ヨコハケ	(外) 明赤褐色5YR5/6 (内) 明赤褐色5YR5/6
8	Z-2	胴部	-	ヨコ-ナナメハケ	ヨコハケ	(外) 赤褐色5YR6/4 (内) 明赤褐色5YR5/6
9	A	胴部	-	-	-	(外) 明赤褐色2.5YR5/8 (内) 橙色2.5YR6/6
10	T2	胴部	胴径: 19.5	ヨコハケ	ナナメハケ	(外) 明赤褐色5YR5/8 (内) 明赤褐色5YR5/6
11	T2	胴部	胴径: 29.3	-	-	(外) 橙色2.5YR6/8 (内) 橙色5YR6/6
12	T2	胴部	-	-	-	(外) 明赤褐色2.5YR5/6 (内) 橙色7.5YR6/6
13	T3	胴部	胴径: 23.5	ナナメハケ	ナナメハケ	(外) 橙色5YR6/8 (内) 橙色7.5YR6/8
14	T3	胴部	胴径: 22.5	ヨコハケ	-	(外) 橙色5YR6/8 (内) 黄橙7.5YR7/8
15	T1	胴部	胴径: 13.4	-	-	(外) 橙色5YR6/8 (内) 明赤褐色5YR5/8
16	T1	胴部	-	-	-	(外) 明赤褐色5YR5/6 (内) -
17	T3	胴部	胴径: 24.6	ナナメハケ	-	(外) 橙色2.5YR6/8 (内) 明赤褐色2.5YR5/8
18	T3	胴部	胴径: 19.5	-	-	(外) 橙色2.5YR6/8 (内) 明赤褐色2.5YR5/8
19	T3	胴部	胴径: 27.6	ナナメハケ	ヨコハケ	(外) 明赤褐色2.5YR5/8 (内) 明赤褐色5YR5/8
20	Z-2	胴部	胴径: 27.8	ナナメハケ	ヨコハケ	(外) 橙色5YR6/6 (内) 明赤褐色5YR5/6
21	Z-2	胴部	胴径: 22.0	ナナメハケ	ヨコハケ	(外) 橙色5YR6/6 (内) 明赤褐色5YR5/8
22	K-1	胴部	胴径: 20.0	ナナメハケ	-	(外) 明赤褐色2.5YR5/8 (内) 橙色2.5YR6/8
23	表孫	胴部	胴径: 25.5	-	-	(外) 明赤褐色5YR5/6 (内) 橙色5YR5/6
24	T2	胴部	胴径: 26.5	不整方向のハケ	ナナメハケ	(外) 橙色5YR6/8 (内) 橙色5YR6/6
25	Z-2	基底部	-	ナナメハケ	-	(外) 明赤褐色5YR5/8 (内) 橙色5YR6/8
26	Z-3	基底部	-	タキ?	-	(外) 明赤褐色2.5YR5/6 (内) 明赤褐色2.5YR5/8
27	K-2	基底部	-	タキ?	-	(外) 橙色7.5YR6/6 (内) 明褐色7.5YR5/6
28	T2	基底部	底径: 12.0	-	オサエ	(外) 橙色5YR6/8 (内) 赤褐色5YR4/8
29	T2	基底部	底径: 16.1	ナナメハケ	オサエ	(外) 橙色5YR6/8 (内) 明赤褐色5YR5/6
30	脚上	基底部	-	-	オサエ	(外) 明赤褐色5YR5/8 (内) 橙色5YR6/8
31	T2	基底部	-	ナナメハケ	オサエ	(外) 橙色2.5YR6/8 (内) 橙色5YR6/6
形象埴輪						
No.	トレンチ	法量(cm)	外面調整	内面調整		色調
32	T2	-	-	-	(外) 橙色5YR6/8	(内) 橙色5YR6/8
33	T2	-	-	-	(外) 橙色5YR6/8	(内) 橙色5YR6/8
34	T1	-	竹管文	オサエ	(外) 橙色5YR6/6	(内) 橙色5YR6/6
35	T3	-	ハケ調整、削文	-	(外) 橙色5YR6/8	(内) 橙色5YR7/8

図 版

図版 1



1. 手間古墳周辺航空写真（「空から見た水郷松江」より）



2. 手間古墳近景

図版 2



1. 後円部(K) トレンチ



2. K4 トレンチ

図版 3



1. K1 トレンチ上方



2. K1 トレンチ下方



3. K2 トレンチ上方

図版 4



1. K2 トレンチ下方



2. K2～3 トレンチ



3. K3 トレンチ下方

図版 5

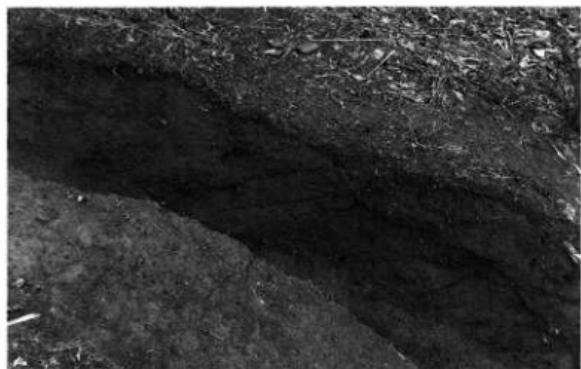


1. 前方部(Z) トレンチ



2. Z3 トレンチ

図版 6



1. Z1 トレンチ上方



2. Z1 トレンチ下方



3. Z2 トレンチ

図版 7



1. 「造出」状高まりの現況



2. 後円部北西(KN)トレンチの設定
(後方が「造出」状地形)



3. KN1 トレンチ

図版 8



1. 前方部南東(ZS)トレンチ



2. ZSトレンチ

図版 9



1. 鞍部(A) トレンチの
設定



2. Aトレンチ



3. Aトレンチ接写

図版10



1. 後円部南(KS)の現況



2. KS トレンチ

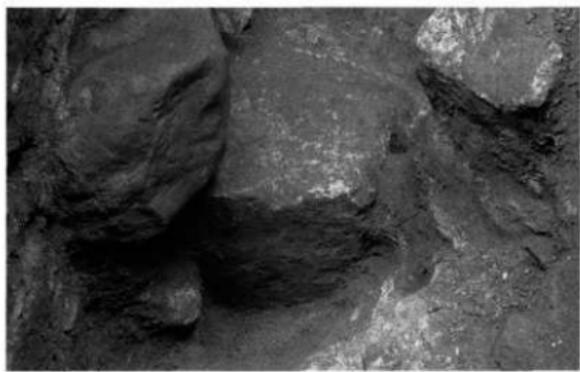


3. KS-A 東区
(西壁セクション)

図版11



1. KS-A東区 石材出土状態



2. 同上
面取りされた石

図版12



1. KS-B区



2. KS-B東区



3. KS-B西区

図版13



1. T1・2 トレンチ
(右方が「造出」状高
まり)



2. T1 トレンチ



3. T2 トレンチ

図版14



1. T3 トレンチの設定

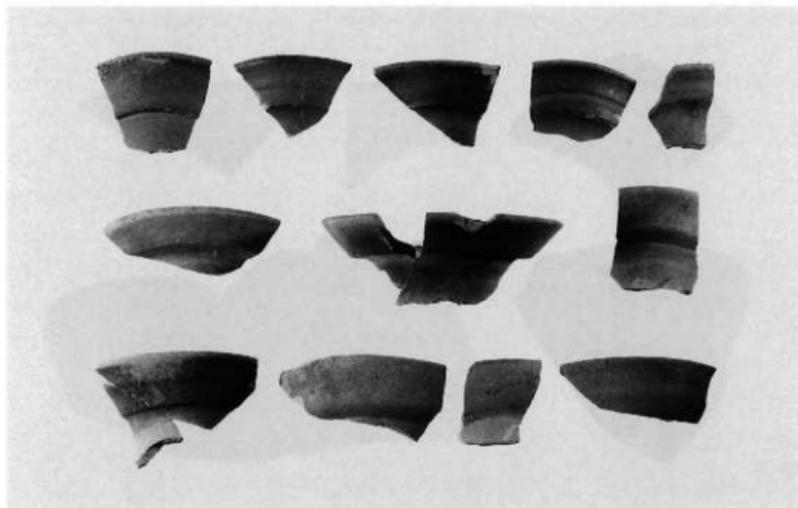


2. T3 トレンチ南方
(後内側)

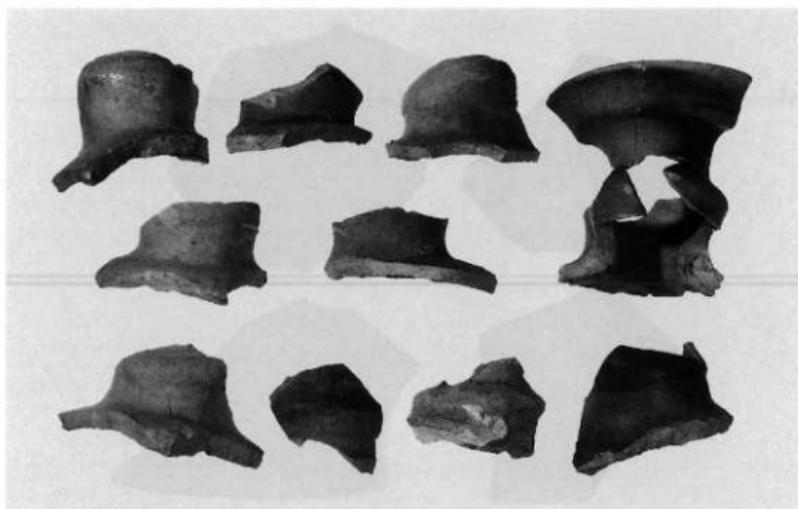


3. T3 トレンチ北方

図版15

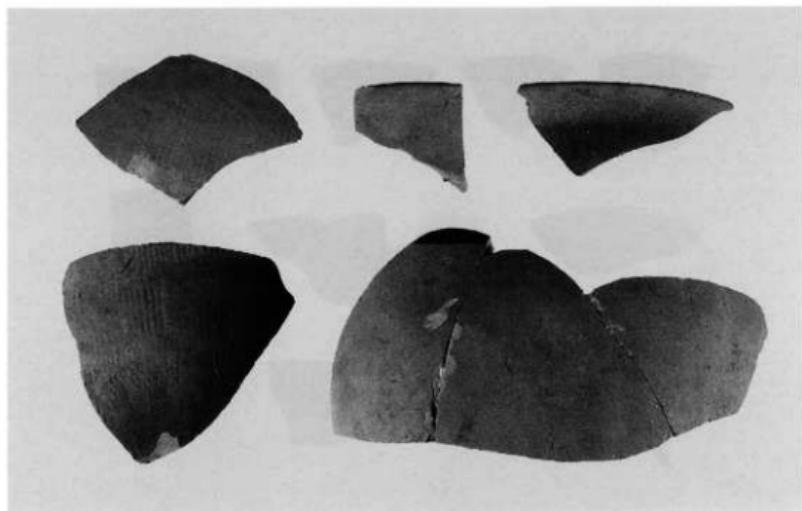


1. 須恵器 子持壺 (1)

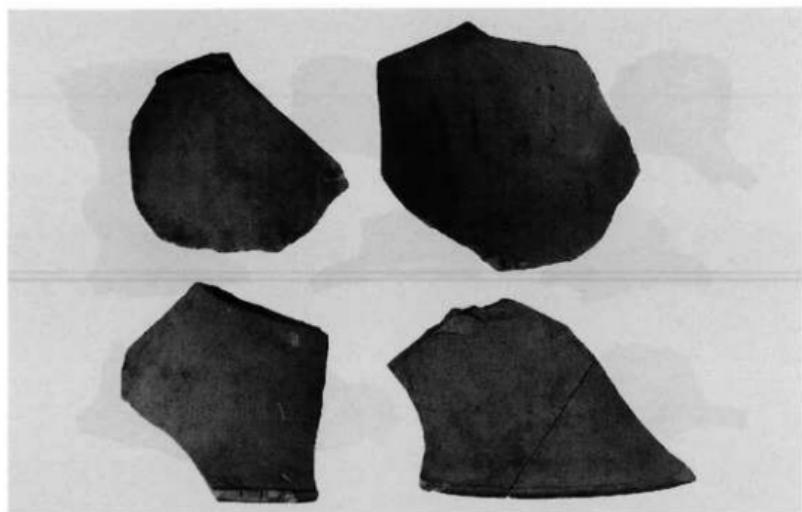


2. 須恵器 子持壺 (2)

図版16

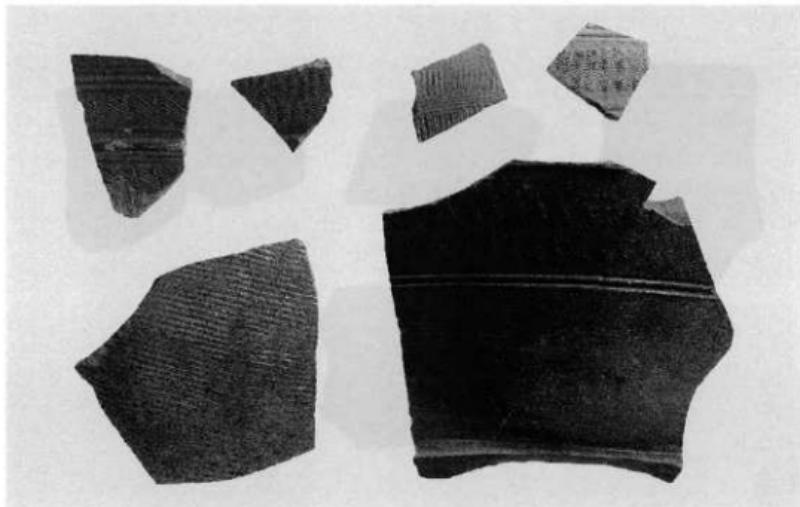


1. 須恵器 子持壺 (3)

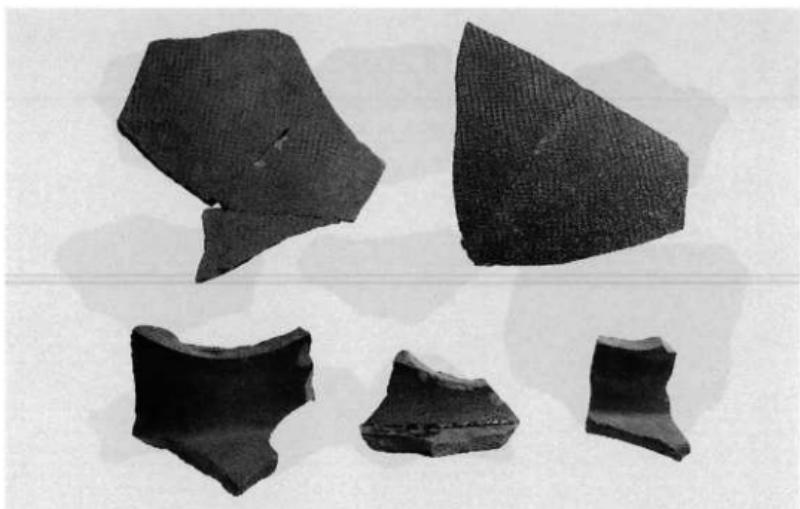


2. 須恵器 子持壺 (4)

図版17

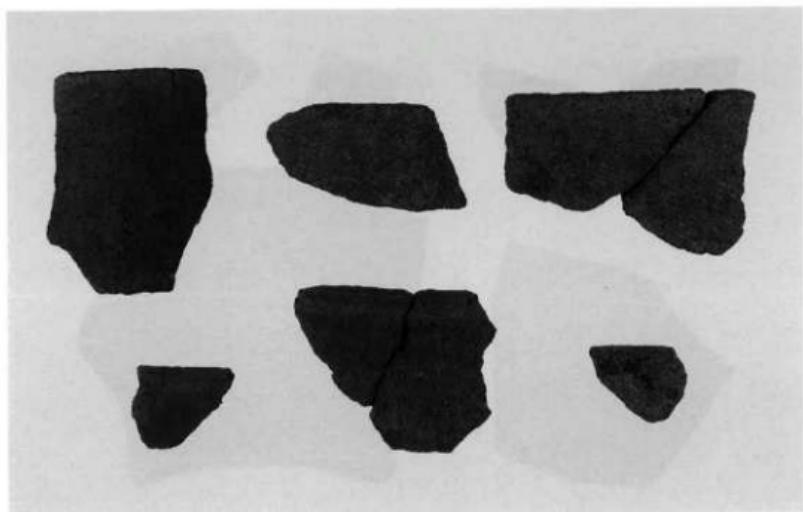


1. 須恵器 瓢 (1)

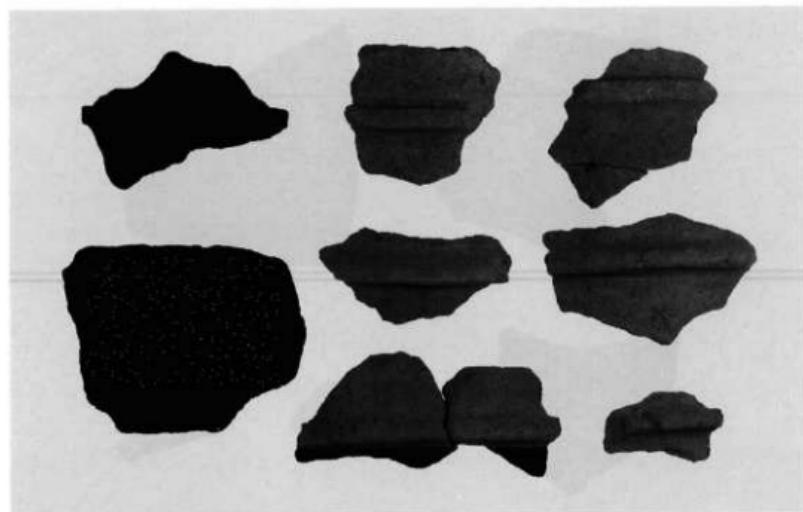


2. 須恵器 瓢 (2)・壺

図版18

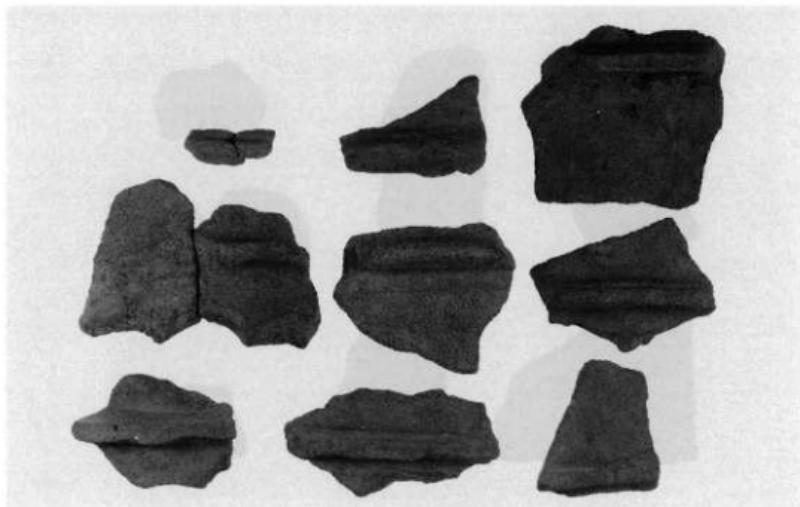


1. 塗輪 円筒埴輪 (1)



2. 塗輪 円筒埴輪 (2)

図版19

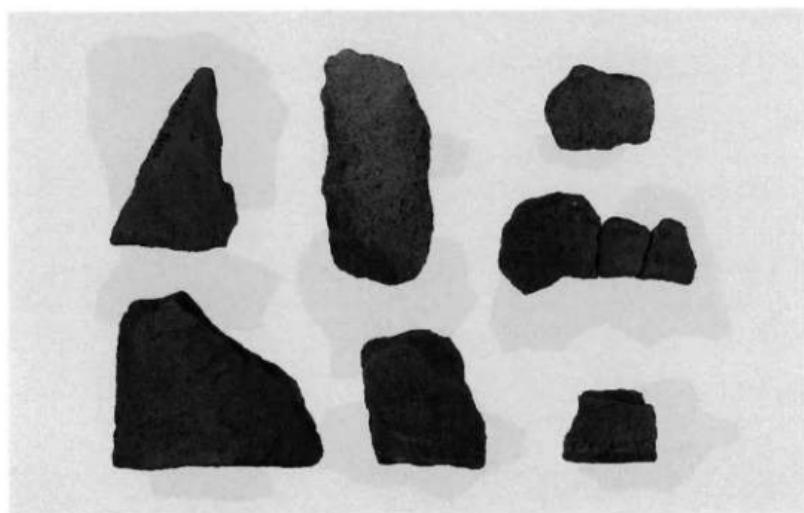


1. 塗輪 円筒埴輪 (3)

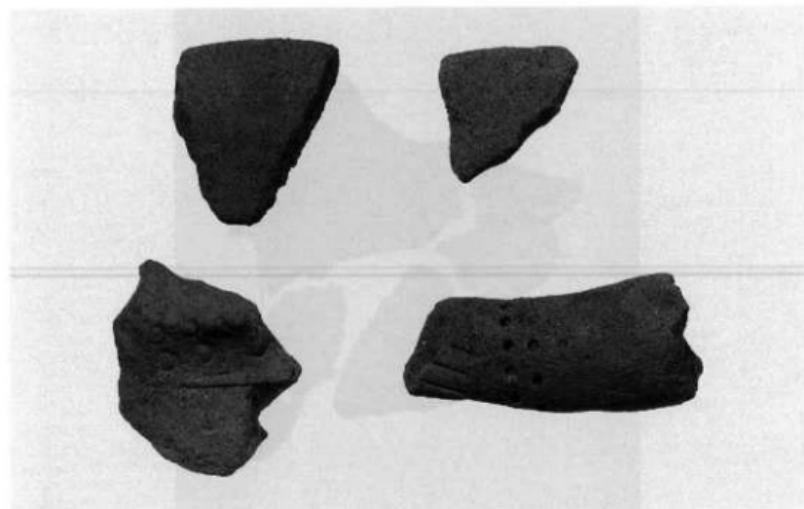


2. 塗輪 円筒埴輪 (4)

図版20

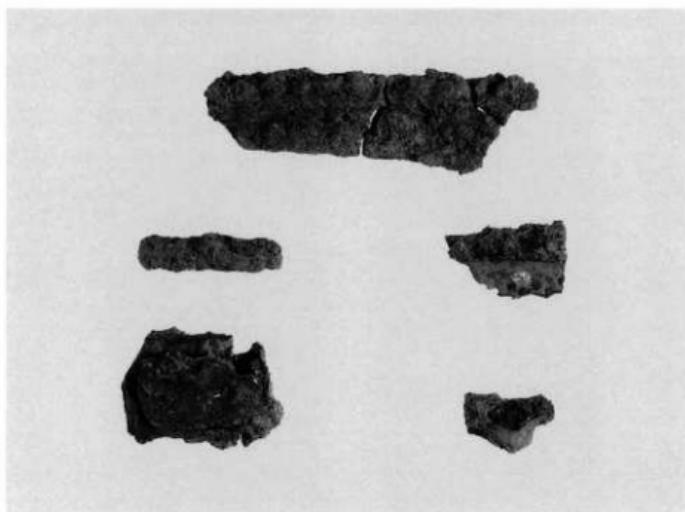


1. 塗輪 円筒埴輪 (5)

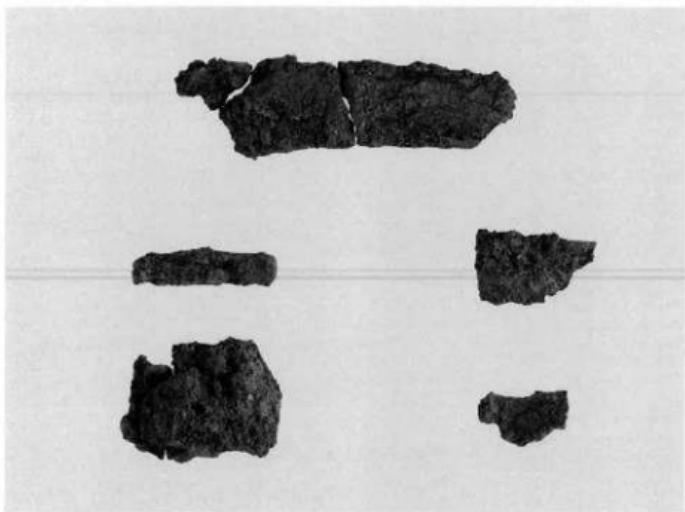


2. 塗輪 形象埴輪

図版21



1. 金属製品（表）



2. 金属製品（裏）

報告書抄録

ふりがな	まつえしてんまこふんはくつちょうさほうこく					
書名	松江市手間古墳発掘調査報告					
副書名						
卷次						
シリーズ名	鳥根大学考古学研究室調査報告					
シリーズ番号	第3冊					
編著者名	渡辺真幸(編)					
編集機関	鳥根大学法文学部考古学研究室					
所在地	〒690-8504 鳥根県松江市西川津町1060番地 TEL 0852-32-6195					
発行年月日	2002年1月					
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	- 北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
手間古墳	鳥根県松江市 竹矢町 字安郷寺 1571番地	32201 D24	35度 26分 43秒	133度 6分 40秒	第1次調査 1996.3.11~3.23 第2次調査 1999.8.17~9.6 第3次調査 2000.8.21~8.29	合計100m ² (トレンチ発掘)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
手間古墳	古墳 (前方後円墳)	古墳時代	前方後円墳 横穴式石室跡	須恵器片 埴輪片 馬具片	東部出雲最大の前方 後円墳の墳形・規模・ 盛上法を調査。横穴 式石室の破壊跡から 馬具片を検出。	

第2部

薬師山古墳出土遺物について



(薬師山古墳発見当時と推定される写真—島根大学開学記念資料室蔵)

**Studies of the Remains from Yakushiyama Kofun,
An Ancient Tumulus in Idumo**

2002

Edited by Ishida Tameshige
Department of Archaeology, Shimane University

例　　言

1. 本編は、島根大学考古学研究室に保管されている薬師山古墳出土遺物について再検討を行ったもので、1994年度以降の本学法文学部の授業科目「考古学実習Ⅱ」の実習成果をまとめたものである。
2. 薬師山古墳は島根県松江市西川津町字前菅田974番地に属し、現在の島根大学の敷地内に所在した。1922(大正11)年に土取作業により偶然発見されたが、その後消滅した。当時の状況を記す資料は限られており、現状では古墳の正確な位置を把握することは困難である。
3. 石製模造品の石材については島根大学総合理工学部の澤田順弘教授に鑑定を依頼した。
4. 鉄器のX線写真は島根県埋蔵文化財調査センターの御厚意により、同センターで撮影していただいた。
5. 実測図と図版の番号は一致する。
6. 本稿作成に携わった者は以下の通りである。

94年度 横山範一、藤永照隆、水口晶郎

95年度 上原香織、大野聰子、片倉愛美、田浪文雄、平田朋子、細田美樹

96年度 石田陽子、神柱靖彦、横原桃代、渡辺桂子

98年度 赤井和代、石田爲成、今岡利江、小倉育子、久保奈都美、下田幹子、
田浪文雄、徳永　隆、坪井聰子、宮原　泉

作業は、田中義昭教授、渡辺貞幸教授の指導のもとに、上記の者が図面作成、浄書、文章作成、写真撮影を分担した。編集は渡辺貞幸教授、田浪文雄氏と協議の上、石田爲成が行った。文責については文章末尾に明記した。

7. 薬師山古墳の出土品は、本文中にも記したように、発見後今日までの間に遺憾ながら一部が失われている。銅鏡は、1980年に本学陳列室が盗難に遭った際失われた。
8. 本編掲載の遺物及び実測図、写真などの資料は、島根大学考古学研究室で保管している。

目 次

1. 薬師山古墳の概要	1
I. 現状ならびに既往の報告について	1
II. 位置について	1
2. 出土遺物	5
I. 土師器	5
II. 須恵器	7
III. 石製模造品	14
IV. 鉄刀	16
V. 鉄鎌	17
3. まとめ	23

図 版 目 次

図版 1	1. 土師器 2. 須恵器 (1)
図版 2	須恵器 (2)
図版 3	須恵器 (3)
図版 4	1. 石製模造品 2. 鉄刀
図版 5	鉄鎌
図版 6	鉄鎌X線写真 (1)
図版 7	鉄鎌X線写真 (2)
図版 8	薬師山古墳発見当時の写真 (1) (2)
図版 9	薬師山古墳発見当時の写真 (3) (4)

挿 図 目 次

第1図 薬師山古墳周辺の古墳位置図	2
第2図 薬師山古墳の位置	3
第3図 土師器実測図	6
第4図 須恵器実測図（1）	8
第5図 須恵器実測図（2）	10
第6図 須恵器実測図（3）	12
第7図 石製模造品実測図	14
第8図 鉄刀実測図	16
第9図 鉄鎌各部の名称	17
第10図 鉄鎌実測図	18

表 目 次

第1表 土師器観察表	24
第2表 須恵器観察表	24
第3表 鉄鎌観察表	26

1. 薬師山古墳の概要

I. 現状ならびに既往の報告について

薬師山古墳があったのは松江市市街地の北東郊外、北の山地から朝鈴川の西側に延びた菅田丘陵と呼ばれる比高20mほどの低丘陵上で、現在の島根大学敷地内にある。付近には、縄文時代を中心とする島根大学構内遺跡や、弥生時代の拠点的な集落と考えられる西川津遺跡やタテチョウ遺跡が存在する。古墳時代の前期には規模の大きな古墳は見られないが、中期後半には薬師山古墳と同時期の金崎古墳群や、菅田ヶ丘古墳、堤廻遺跡などが知られている（第1図）。また薬師山古墳出土の須恵器は、金崎1号墳出土の須恵器と共に、山本清氏による山陰の須恵器編年I期の標準遺物として著名である（山本1960）。

薬師山古墳は1922（大正11）年に、島根大学の前身である旧制松江高等学校の敷地内で土取工事の際に発見され、その後破壊され消滅した^①。現在では周辺の環境も様変わりしており、古墳の存在を窺わせるものは何も残っていない。本古墳に関しては、「島根縣史」（野津編1925）、山本清氏（山本1955）、松尾寿氏（松尾1982）によって、発見の経緯や当時の状況、墳形、内部施設、出土遺物等について紹介がなされている^②。

しかしながら薬師山古墳に関する報告は上記のものだけであり、古墳の全容が必ずしも詳らかにされたわけではない。出土遺物に関しては写真や実測図が公表され、主だった遺物については報告されている。しかし一方で、文章表記のみ、もしくは写真・実測図が公表されていない遺物もある。以上のことを踏まえ、本報告では、現在、島根大学に保管されている薬師山古墳出土遺物について、できる限り詳細に記載して紹介することを目指した。

II. 位置について（第2図）

今日、薬師山古墳の厳密な位置を把握することは難しい。しかし、古墳の位置を推定する手がかりが全くないわけではない。薬師山古墳のすぐ北側には、隣接するように菅田ヶ丘古墳が存在していた^③。菅田ヶ丘古墳については発掘調査が行われ、山本清氏により報告されている（山本1977）。この報告の中に、薬師山古墳の痕跡と菅田ヶ丘古墳の位置関係を示す測量図があり、菅田ヶ丘古墳との関係から薬師山古墳の位置を推定することが可能である^④。

この他に、発見当時の地形の状況、古墳消滅後の痕跡と周囲の建物との関係について、山本氏、松尾氏により報告されている（山本1955、松尾1982）。また当時の地籍については山本氏が「公式には松江市西川津町字前菅田九七四番地に属し」と記しており（山本1955）、地籍図からもその位置を推定することが可能である。



第1図 薬師山古墳周辺の古墳位置図 (1/25000)

(△…前期古墳 ○…中期古墳 □…後期古墳)

- | | | | | |
|---------------|-----------|------------|-----------|------------|
| 1. 薬師山古墳 | 2. 青田ヶ丘古墳 | 3. 宮山古墳群 | 4. 上浜弓古墳群 | 5. 松ヶ峰古墳 |
| 6. 金崎古墳群 | 7. 福山古墳 | 8. 佐吉神社裏古墳 | 9. 山崎古墳 | 10. 柴古墳群 |
| 11. 墓巡遺跡（集落址） | 12. 宮道古墳群 | 13. 大源1号墳 | 14. 中尾古墳 | 15. 八色谷古墳群 |
| 16. 柴尾古墳群 | 17. 垣の内古墳 | 18. 小丸山古墳群 | 19. 太田古墳群 | 20. 進仙古墳群 |
| 21. 薄井原古墳 | | | | |

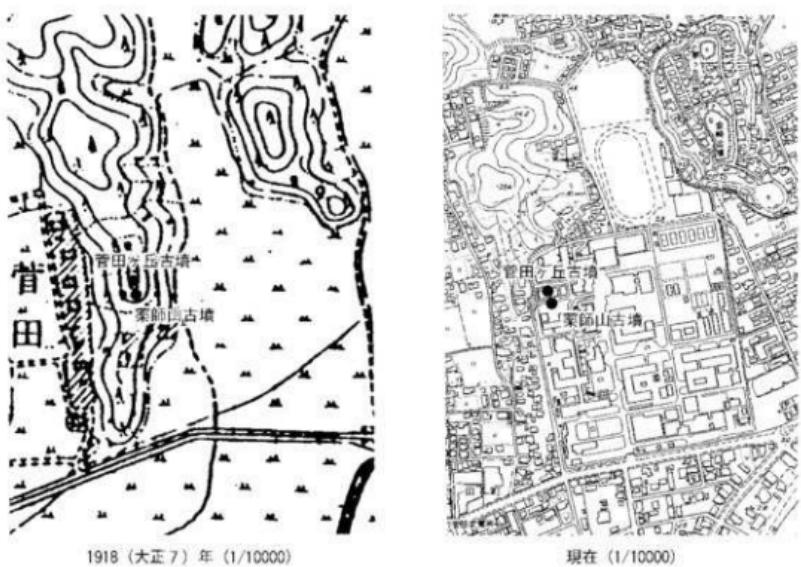
以上の資料を総合的に検討し、現在の大学構内における古墳の位置を考えると、薬師山古墳は現在の課外活動共用施設棟と教養講義室2号館の間付近に所在していたと推定される。

註

- (1) 発見にあたって簡単な調査が行われたが、実測図など当時の記録は残っていない。
- (2) 墳形、内部施設については不明な点が多く、報告者により意見が一致しない点もある。詳細については各報告を参照して頂きたい。
- (3) 菅田ヶ丘古墳は1958年に島根大学の敷地拡張工事に伴って発掘され、主体部（櫛槻）のみが大学構内に移築された。その後1976年に再移築され現在に至っている。移築の経緯については〈松尾1978〉に詳しい。
- (4) 1977年段階の菅田ヶ丘古墳の大学構内での正確な位置については山本により報告されており、現在の課外活動共用施設棟付近にあたることがわかる（山本1977）。また薬師山古墳との位置関係については、同報告「第二図 菅田ヶ丘古墳・薬師山古墳実測図」に「薬師山古墳跡」として示されている。

参考文献

- 野津左馬之助編 1925『島根縣史 四 古墳』島根縣
松尾 寿 1978「菅田ヶ丘古墳主体部の移築保存について」『山陰文化研究紀要』第18号



第2図 薬師山古墳の位置

- 松尾 寿 1982 「1922年における薬師山古墳の発掘について」『山陰文化研究紀要』第22号
- 山本 清 1955 「島根大学敷地薬師山古墳遺物について」『島根大学論集（人文科学）』第5号
- 山本 清 1960 「山陰の須恵器」『開学十周年記念論文集』島根大学
- 山本 清 1977 「島根大学敷地菅田ヶ丘古墳について」『山陰文化研究紀要』第17号
(石田為成・徳永 隆)

2. 出土遺物

I. 土師器（第3図、第1表）

当古墳から出土した土師器は、高坏4個体、小型丸底壺1個体の合わせて5個体である。

1. 高坏

(1) 坏部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部付近で外反し丸くおさめる。外面には明瞭な段をもつ。脚部は屈曲せず外反しながら開く形状である。脚上部内面には棒状工具による刺突痕⁽¹⁾が、脚部内面にはしぼり痕が認められる。外面では坏部と脚部の接合部分が明瞭であり、この部分にはハケ目を施した後に一条の沈線が施されている。脚部内面以外には丹塗りが認められる。

(2) 坏部は内湾しながら立ち上がり、口縁部端はゆるやかに外反して開く。外面には明瞭な段をもつ。脚部と坏部の接合部には、ハケ目を施した後に一条の沈線が施されている。脚上部内面には棒状工具による刺突痕が認められる。脚部内面以外では丹塗りが認められ、坏部内面には放射状に暗文が施される。

(3) 坏部は内湾しながら立ち上がり、口縁部端はゆるやかに外反する。脚部は屈曲することなく外反しながら開く形状であり、脚上部内面には棒状工具による刺突痕が認められる。外面では脚部と坏部の接合部にはハケ目が施された後に、明瞭な沈線が一条施されている。脚頂部外面の接合部では中心部に聞く孔の周辺に、坏部との接合を強化するために施された、ヘラ状の工具による花弁状の刺突が認められる。

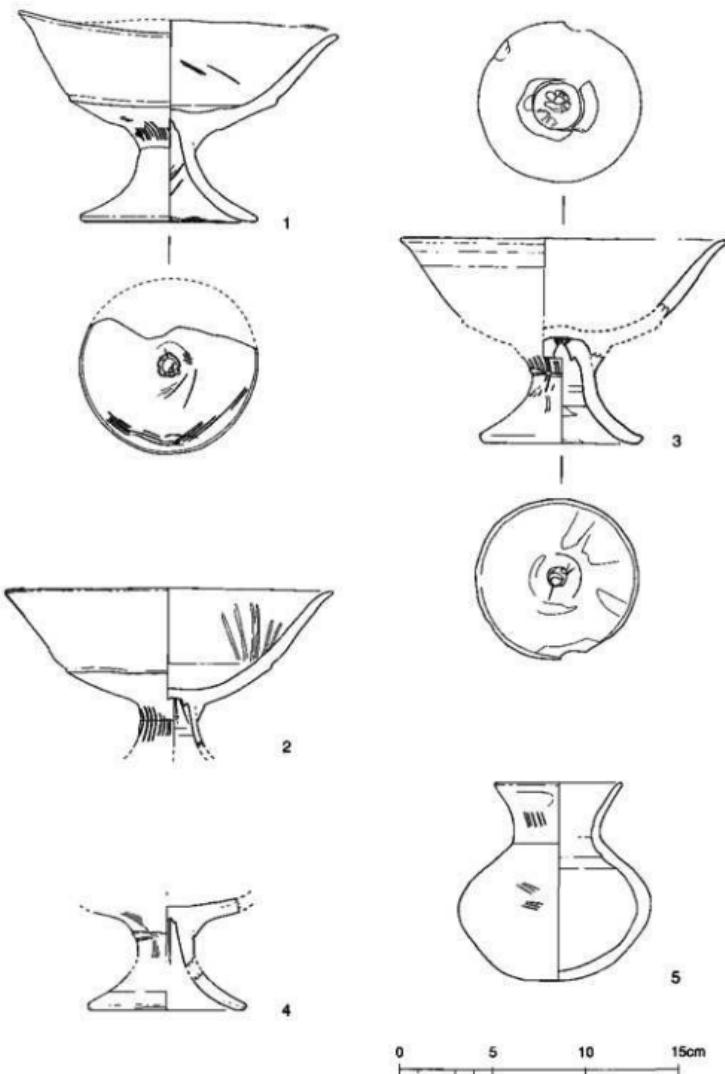
(4) 坏底部から脚部にかけてが残存する。脚上部内面には棒状工具による刺突痕が認められ、外面では坏部と脚部の接合部にハケ目を施したのち、一周半の明瞭な螺旋状の沈線が施されている。また表面には丹塗りが認められる。

2. 小型丸底壺

(5) 口縁部は外反しながら立ち上がり、端部は丸くおさめている。体部は球形を呈しており、内部には口縁部と体部の接合痕が認められる。残存部で見る限りでは、全体的に精巧にナアられており、口縁部と胴部にはハケ目状の調整が認められる。外面と口縁部には丹塗りが認められる。

3.まとめ

高坏については、脚部と坏部を別々に作り接続する製作技法が共通して認められる。また接合部はなだらかで丸く、坏部と脚部の間に明瞭な境を持たない。接合部の外面には各個体に共通して、縱方向のハケ目を施した後に一条の沈線を施すという技法が認め



第3図 土師器実測図

られる。

山陰における当該期の土師器については、房宗寿雄氏（宮本・房宗1982）や松山智弘氏（松山1991）により編年、検討が行われており、当古墳の出土品についても触れられている。房宗氏は山本編年Ⅰ期併行期の土師器について細分を行っており、薬師山古墳出土のものはⅠ期でも古相に位置づけている。松山氏は、氏の編年のⅣ期の資料として当古墳出土の土師器を探りあげ、調整、手法について検討を行っている。

薬師山古墳出土の土師器は、須恵器などの伴出品が明確であり、一括性が高いことが特徴である。不明な点の多い当該期の土師器の様相を考える上で、今後とも指標として常に参照されるべき重要な資料と言えよう。

註

- (1) ここでいう刺突痕は、坏部と脚部の接合を強化するために棒状の工具を押し当てた痕と考えられるもので、〈松山1991〉における「刺突痕a」「刺突痕b」とは異なるものである。

参考文献

宮本徳昭・房宗寿雄 1982「結語」「昭和56年度宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う増福寺古墳群発掘調査報告書」八雲村教育委員会

松山智弘 1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相一大東式の再検討ー」「島根考古学会誌」第8集

山本 清 1955「島根大学敷地薬師山古墳遺物について」『島根大学論集（人文科学）』第5号

(赤井和代・久保奈都美・下山幹子)

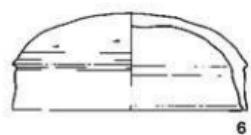
II. 須恵器（第4図～第6図、第2表）

1. 蓋坏

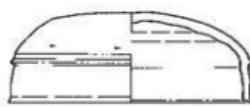
〈蓋〉

（6～9）全体に共通して、器高は比較的高く、天井部はやや扁平である。犬井部と体部の境の段は短く、やや鋭さを欠く。6、7、8の口縁部はわずかに外反するが、9は比較的真っ直ぐ上がる。口縁端部はいずれも内傾し段を有するが、7はあまり内傾せず凹面状をなす。調整・手法においては、犬井部外面は全体的に繰り返し回転ヘラケズリを行いその後、不定方向にナデを施す。天井部内面は不定方向にナデを施す。

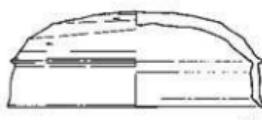
〈坏身〉



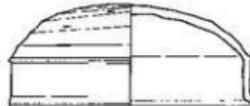
6



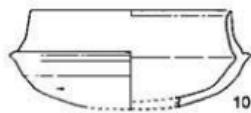
7



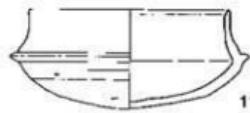
8



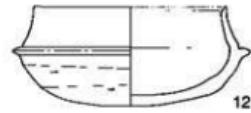
9



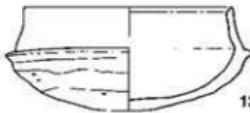
10



11



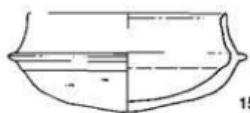
12



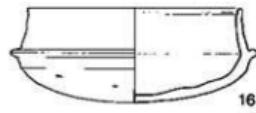
13



14



15



16



第4図 須恵器実測図（1）

(10~16) いずれも立ち上がりが高く、器高の二分の一以上を占める。口縁部は外反し立ち上がり、蓋同様にわずかに内傾し段を有する。受け部は丸みをもって突出する。調整・手法においては、底部外面向に広範囲にわたる回転ヘラケズリの後、回転ナデを施す。底部内面は不定方向にナデを施す。

2. 無蓋高坏

(17, 18) 坏部は平らな底部から丸みを帯びてほぼ直立し、口縁部はやや開き内側に段をもつ。口縁部と体部の境に削り出しにより突線を二条、その下にやや粗雑な波状文を施す。17、18共に突線から波状文にかけて細い粘土紐の飾り耳を持つが、17では施文後、18では施文前についている。調整については突線より上方の口縁部は丁寧な回転ナデ、波状文より下位は回転ヘラケズリを行う。

脚部は坏部との接合部より台形状に広がり、内外面共に丁寧な回転ナデを施す。両者とも三角形の透孔を持ち、17には等間隔に4方向、18は等間隔には3方向認められる。

いずれもナデ調整の後に外側から穿孔し、三辺とも外側を面取りしてある。脚端部は17、18共に透孔の下に突帯が1条めぐり、その下には比較的平らな面の段をもつ。脚端部内側は、内湾せずになだらかに広がる。

3. 有蓋高坏

〈蓋〉

(19) 蓋坏と同様に、口縁部はわずかに外反し、端部は内傾し段をなす。天井部には中央部の凹んだつまみをつける。天井部と体部の段は明瞭である。調整・手法としては、回転ヘラケズリの後つまみをつけ、全体的にナデを施す。天井部内面においては不定方向のナデが施される。

〈高坏〉

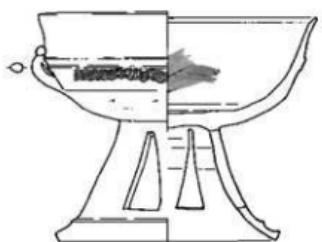
(20) 坏部は平らな底部から体部が丸みを帯びて立ち上がり、幅の狭い受け部を持つ。立ち上がりは直線的にやや内傾し、端部に段をもつ。調整については体部上半は回転ナデ、下半は回転ヘラケズリを行う。

脚部は坏部との接合部からなだらかに外に開き、内外面ともに回転ナデを施す。方形の透孔が3方に認められ、いずれも外側から穿つ。

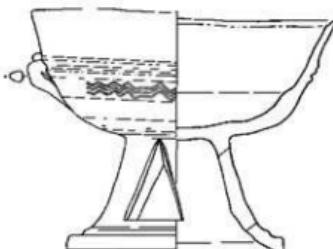
脚端部は透孔の下に沈線を施して一段状に見せる。裾部は内湾しており、下向きにつまみ出したようになっている。

4. 増（短頸壺）

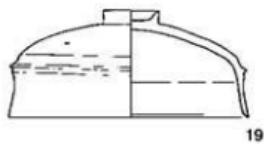
(21) 丸みを帯びた胴部から、わずかに内側に収縮した後、やや外開き気味に頸部が立



17



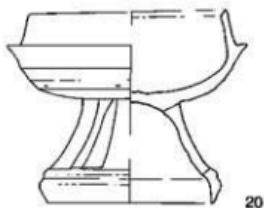
18



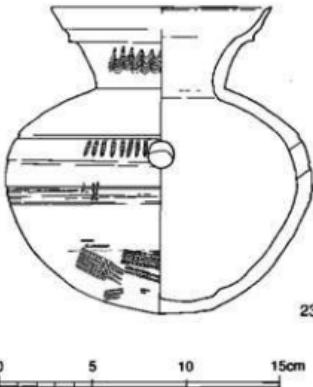
19



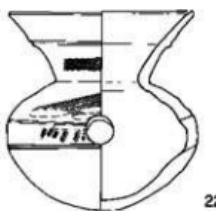
21



20



23



22

第5図 須恵器実測図(2)

ち上がる。外面は丁寧なナデで仕上げる。また底部には不定方向のケズリ、ナデが見られる。

5. 小形龜

(22) 頸部は胴部との接合部（基部）から直線的に外側へ開く。口縁部の下端に突帯を削り出し、段状に見せかける。口縁端部内面は段を持つ。胴部は頸基部から丸みを帯びて下り胴部の約二分の1の高さが最大径となる。底部は尖底状である。

口縁部、頸部の外面は丁寧な回転ナデを、頸部には丁寧な波状文を施す。胴部最大径に上下を沈線でX画した文様帶に櫛描き刺突文を施す。この文様帶上に円孔を外側から穿つ。底部外面は回転ヘラケズリの後に不定方向のナデを施す。

6. 大型龜

(23) 小型龜に類似した形態を示す。頸部は胴部との接合部（基部）から直線的に外側へ開く。口縁部の下端に突帯を削り出し、段状に見せかける。口縁端部内面には段を持つ。

文様は頸部に波状文を、胴部最大径の文様帶に櫛描き刺突文をそれぞれ施す。口縁部から頸部、胴部上半は丁寧なナデで仕上げ、胴部の文様帶より下位はタタキによって整形した後に薄いカキ目を施す。円孔は、外側から胴部文様帶上に穿つ。

7. 壺

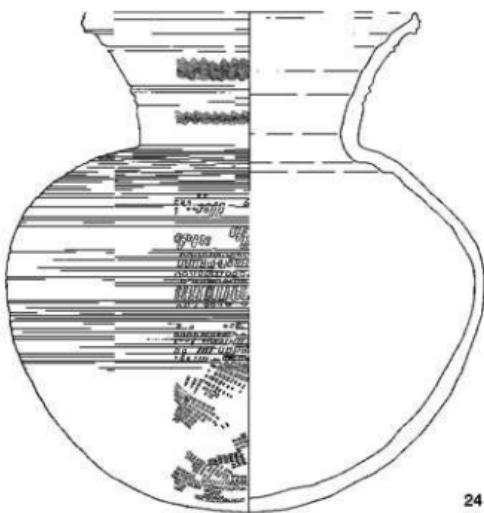
(24) 頸部は、胴部との接合部からほぼ垂直に立ち上がり、口縁部でやや外に開く。口縁端部は垂直方向へのつまみ出しがあり、内面に緩い段を有する。頸部は2条の突帯を挟んで上下に波状文を施す。胴部は丸く、底部がやや尖底状になるものの、全体的に球形に近い。胴部に文様はなく、タタキで成形した後にカキ目を施すが、底部にカキ目はなく、部分的にナデ消したタタキ目を残す。

8. 瓢

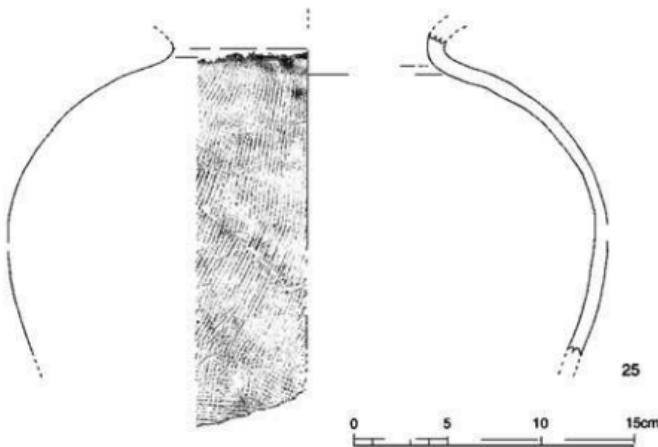
(25) 頸部の付け根から胴部にかけての一部が残存する。形態にはやや歪みがみられ、頸部付け根から強く肩を張り出している部分となだらかに下る部分がある。胴部外面は丁寧なタタキ目が見られ、内面は丁寧なナデを施す。

9. まとめ

須恵器は蓋壺16個体、高壺3個体、壺2個体、壙1個体、壺1個体、甕1個体が確認されている。完形のものが多く残存状態も良い。いずれの個体も比較的丁寧に仕上げられており形の歪みも少ない。



24



25

第6図 須恵器実測図（3）

薬師山古墳出土の須恵器は金崎1号墳出土例と共に、山本編年I期の指標とされてきた（山本1960）。かつて田辺昭三氏は『須恵器大成』の中で、本古墳出土の蓋坏について「いずれも高蔵二一六型式の特徴をそなえているが、山陰地方の製品かもしれない。」と記述している（田辺1981）。川原和人氏、井上寛光氏は「薬師山古墳の蓋坏は、形態および天井部、底部に施されているナデ調整などからみて金崎古墳出土の須恵器よりやや古い特徴を持っており、この古墳から出土した一括資料の再検討が必要である。」と指摘する（川原・井上1986）。松本岩雄氏、柳浦俊一氏は本古墳出土の須恵器を金崎1号墳のものと共にTK208型式併行期に置いている（松本・柳浦1991）。

以上のようなことを念頭に置いて、先に述べた個々の遺物の概要に基づいて考察を行った。まず型式の比定についてだが、坏身の立ち上がりの角度がTK216型式に見られるほど内傾してはおらず、内傾した後に直立していることから、TK208型式に近い形態を示していると言えよう。また小型龜の頸部と口縁部の境の内面が明瞭な段にならず、直線的であること、頸部そのものの角度、大型龜の文様が小型龜と同様に施されていることからも、やはりTK208型式に近いと言えよう。

また無蓋高坏の脚端部についても、脚端部が外に膨らむ面を持たず、その内面が内湾せずになだらかであることや、脚端部が肥大しないことから、TK208型式に近いと言える。

次に生産地の問題については、遺物観察段階で陶邑產のものほど、胎土がキメ細かいとは言えないこと、壳に見られる外面のタキ口が、同時期の陶邑產のものよりもミゾ間がやや広めであること、坏身の立ち上がりや龜の頸部が長いことなどから、在地產あるいは陶邑以外の生産品と考えて良かろう。また田辺氏も薬師山古墳の須恵器中に焼成が甘く生焼けの近いものがあることから地方窯製品の可能性を指摘している（田辺1981）。

以上のことから、本古墳出土の須恵器は陶邑の田辺編年TK208型式には併行すると考えられ、山本編年I期でも古相のものであろう。また、その產地を厳密に特定することはできないが、在地產の可能性が高いものであるということが言えよう。

参考文献

- 川原和人・井上寛光 1986 「島根県における初期須恵器について」「考古学ジャーナル」No259
田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
松本岩雄・柳浦俊一 1991 「山陰」「古墳時代の研究6 土師器と須恵器」雄山閣出版
山本 浩 1960 「山陰の須恵器」「開学十周年記念論文集」島根大学
(右田陽子・今岡利江・坪井聰子・横原桃代)

III. 石製模造品（第7図）

現存する薬師山古墳出土の石製模造品は5点である⁽¹⁾。これまで、これらは全て有孔円板とされてきたが、その内1点については剣形模造品である可能性が高いことが判明した。

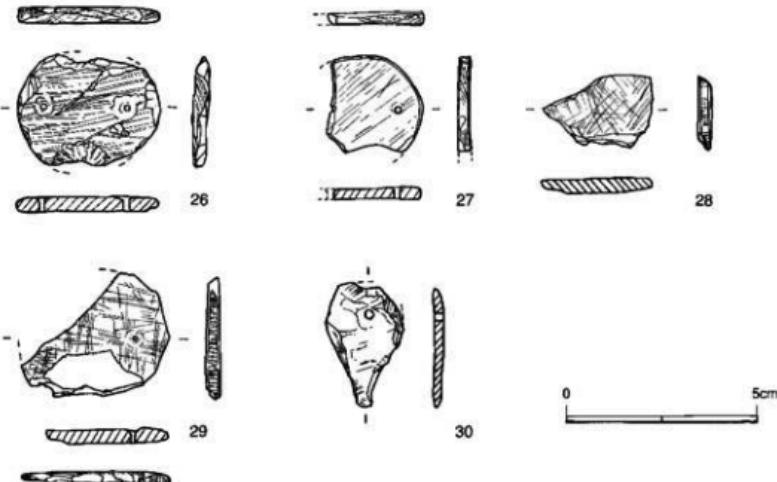
1. 有孔円板

石材は4点とも粘板岩である⁽²⁾。各個体とも表裏両面と側面に研磨による荒い擦痕が多く認められる。

(26) 形状は楕円に近く、長側辺の一部を欠く。側面に認められる擦痕の方向は、側面長辺に対して平行である。中央部には二つの孔が認められ、いずれも一方向からの穿孔（片面穿孔）である。

(27) 楕円に近い形状であったと考えられるが四分の一程度を欠いている。26同様側面に認められる擦痕は、側面長辺に対して平行方向である。中央部には、二つの孔があつたと考えられるが、一方の孔については大部分を欠く。いずれも一方向からの穿孔（片面穿孔）である。

(28) 有孔円板の一部と考えられ、四分の一程度が残存している。本来の形状は楕円に近いと考えられるが、側面に角が認められる。側面の擦痕は長辺に対して垂直方向（表



第7図 石製模造品実測図

裏面方向）である。

(29) 形状は楕円に近く、多くの角をもつが、二分の一程度を欠く。孔は一孔のみ認められ、一方向からの穿孔（片面穿孔）である。側面に認められる擦痕は側面長辺に対して垂直方向である。

2. 剣形模造品

(30) 石材は綿雲母緑色石片岩である。本来の形状を残存部分から復元することは困難であるが、残存部の形状や有孔円板との石材、形態の相違から剣形模造品の可能性が高いと考えている。

厚さに関しては、最も厚い所で3mmと薄く、孔は基部に一孔穿たれているが、径2mmと大きい。穿孔方法については、穿孔後に研磨が施されており、現状では不明である。残存する表裏面の一部には擦痕が認められるが密には施されていない。これらの特徴はいずれも有孔円板と異なっている。

3. まとめ

古墳出土のいわゆる滑石製模造品については白石太一郎氏により体系的な研究がなされている（白石1985）。白石氏は古墳に石製模造品が副葬される時期について、古墳時代前期末葉から後期初頭に限られるとする。また、各種石製模造品の組成の変化と形態が粗雑化するという傾向が認められるなどを示したうえで、鏡の粗製模造品である有孔円板と剣の粗製模造品はともに中期中葉から後期初頭の古墳に見られるとしている^①。本古墳出土の石製模造品の組成ならびに形態はこの傾向に矛盾せず、伴出した須恵器の型式から考えても、中期後半の様相を呈していると言えよう。

註

- (1) 過去の報文を見ると、『鳥根縣史』（野津編1925）では薬師山古墳出土の石製模造品を擬玉と呼び、8点を写真で紹介している。また、山本氏は（臘石製円形有孔板状品として）6点と報告している（山本1955）が、現存するのは5点である。
- (2) 石材については鳥根大学総合理工学部の澤田順弘教授に鑑定を依頼し、ご教示を得た。
- (3) 白石氏は薬師山古墳についても表中で触れており、氏の編年の第3期（中期中葉～後半）に置いている。

参考文献

- 白石太一郎 1985 「神まつりと古墳の祭祀—古墳出土の石製模造品を中心として—」
『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集

野津左馬之助編 1925「鳥根縣史 四 古墳」鳥根縣、附圖三十一
山本 清 1955「鳥根大學敷地薬師山古墳遺物について」『鳥根大學論集(人文科學)』
第5号

(渡辺桂子・宮原 泉)

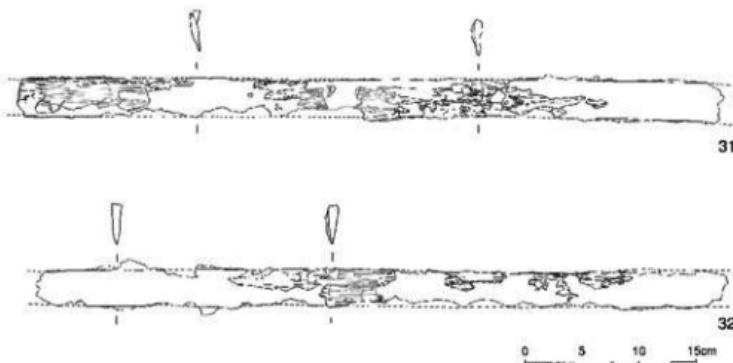
IV. 鉄刀 (第8図)

2振の鉄刀が出土している。ともに銹化、破損が著しく、鋒・茎を欠損している。両者とも片面には木質が認められ、木製の刀装具の存在がうかがえる。残る片面にはいずれも木質の付着は認められず、この面の観察から、両者は出土当時重なり合っていたものと考えられる。

(31) 現存長62.4cm、刀身幅3.6cm、棟幅0.7cm。刀身は反りがなく、断面が二等辺三角形を呈する平造りで鍔は認められない。断面には鍛接面が確認できる。片面のほぼ全体に木質の付着が認められ、その繊維方向は棟に平行である。

(32) 現存長61.2cm、刀身幅3.3cm、棟幅0.8cm。破損、銹化が著しいが31と同様反りのない平造りの刀身である。

(小倉育子)



第8図 鉄刀実測図

V. 鉄鎌 (第9図・第10図、第3表)

1. 出土鉄鎌の個体数について

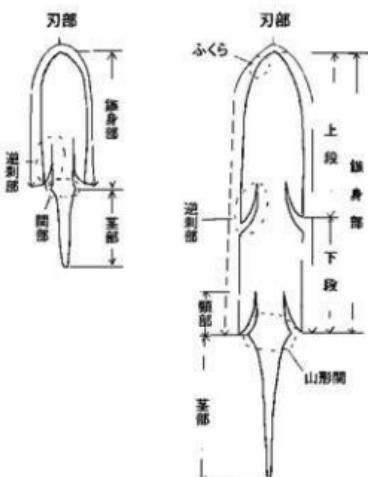
山本氏の報告中に示された鉄鎌についての記述は以下のとおりである (山本1955)。
「四箇重つて銛着いたものの外に二箇の破片がある。何れも欠損があつて、完形品はないが、やや完形に近いものによつて、その形状を見ると、全長約五寸、身は長さ一寸二分ばかり、幅七分、厚さ一分五厘乃至三分、鎌葉形で燕尾状の深く切りこんだ鋭い逆刺がついている。」

ここでは6点と記載されているが、今回改めて検討を行つた結果10点以上あることがわかつた。このことについては山本氏に当時の記録を繰いていただき、薬師山古墳以外の遺物が混入している可能性はないことを確認した。

以下、各部名称の確認を行つた上で各個体について記述し、次いで考察を加える。

2. 各部名称について

各部名称については第9図に示したが、以下の記述はこれに従つて行う。なお、この各部名称については杉山秀弘氏の分類基準、用語に準じて用いている (杉山1988)。形態の記述については便宜上、鋒側を上、茎側を下とする。二段の逆刺を有するものについても同様であるが、鋒側のものを上段、茎側を下段として記述する。



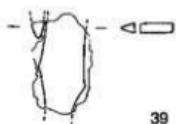
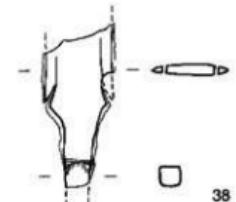
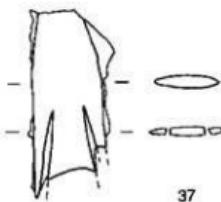
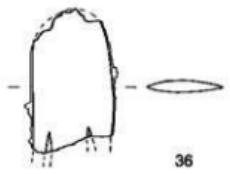
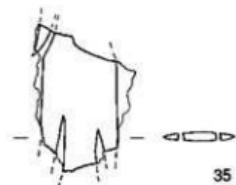
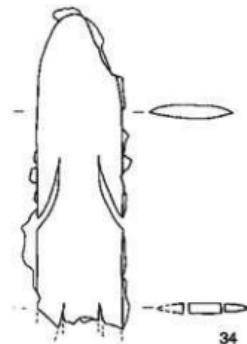
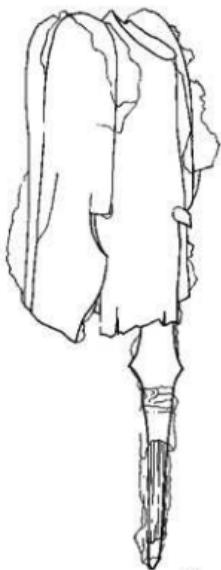
第9図 鉄鎌各部の名称

3. 各遺物の概略

〈腸抉柳葉二段逆刺鎌〉

(33) 山本氏の報告中にあるものである。鋒の向きを同じにする5枚の鉄鎌が銛化のために一塊になった状態であり、X線写真により形状の詳細が明らかになった³³。重なり合つた鎌身部の片面には木質などの付着物が認められる。これらは胡籠の木質などが銛化に伴つて付着した可能性が考えられるが詳細は不明である。

(33-1) 第10図の33、左図左側。5枚の鉄鎌の内、最も残存状況が良い。下段の逆刺の先端部を欠失しているのみで全長14.5cm、最大幅1.9cm、平造りの鎌身に二段の逆刺を有する。外側線はやや頭の丸い鋒からふくらを有した後、上段の逆刺先端部に至るま



第10図 鉄鎌実測図

で直線上に垂下する。逆刺は外反しない。下段は上段の逆刺先端間の幅よりもやや幅が狭く、側線は直線状に垂下する。下段の逆刺先端部が外反していたかどうかについては、この部分を欠失しているため不明である。側線は山形の闇を有した後、鎌の中心線に漸移的に収束する。

闇以下の基部では、木質の付着が認められる。このため茎の断面形は不明であるが、闇から木質付着部に至る部分では平造りである。木質については闇以下のほぼ全面に認められ、繊維方向は鎌の中心線に平行である。木質付着部分の闇に近い部分では繊維方向が鎌の中心線と直交する付着物が認められる。この部分は矢柄と鎌との緊縛材である可能性が考えられる。木質、緊縛材とともにその材質については不明である。

(33-2) 第10図33の左図中央。鎌身部先端を欠いた上段と、下段の一部が残存する。残存部長6.1cm、幅1.9cm、平造りである。

(33-3) 第10図33の左図右側。鎌身部先端を若干欠き、下段の逆刺部以下を欠く。残存部長7.4cm、幅2.2cm、平造りである。

(33-4) 第10図33の右図左側。鎌身部先端を若干欠く。上段の逆刺の片方と、下段の逆刺部分が切損している。残存部長8.6cm、幅2.0cm、平造りである。側線は直線状であり、上段の逆刺を外反させることなく、同幅の内におさめている。他の鎌と比べ逆刺が強調されず、切り込みが入っているような造りである。

(33-5) 第10図33の右図右側。鎌身部先端と、下段の逆刺の先端部以下を欠く。残存部長8.4cm、幅2.0cm、平造りである。

(34) 2段目の逆刺先端部・闇以下の部分と片側のふくら部分を欠失している。残存部長8.0cm、鎌身幅2.3cm。外側線は鋒からふくらを有したのち垂下しており、逆刺は外反しない。下段も上段の逆刺先端部の幅と同幅の造りであり、鎌全体が同幅の内におさまる形状である。逆刺については、切り込みが深く入っており強調された造りとなっている。断面形はレンズ状両丸造りであるように見受けられる。

(35) 下段部分である。残存部長4.0cm、最大幅2.1cm。上段の逆刺は外反している。造りはレンズ状両丸造りである。

〈腸扶柳葉鎌〉

(36) 残存部長3.8cm、幅2.0cm、レンズ状両丸造り。銹化のため形状についての詳細は判然としない。逆刺の付け根部分が観察できることから、腸扶柳葉鎌の一部と判断した。

(37) 残存部長5.0cm、幅1.8cm、レンズ状両丸造り。頭部相当部分が完存していないことからは、腸扶柳葉鎌の一部とも腸扶柳葉二段逆刺鎌の一部とも考えられる。積極的に二段逆刺鎌の可能性が指摘できるわけではないため、腸扶柳葉鎌としておく。

(38) 残存部長4.3cm、幅2.1cm、平造り。逆刺部分は頭部と隙間なく添うような形状で

あり、逆刺を強調することはない。茎部の断面形は一辺5mmの方形であり、表面には木質と緊縛材の付着が一部認められる。

(39) 残存部長2.7cm、平造り。頭部と逆刺先端部が確認できる。逆刺先端部と関先端との間が8mmと開いている点は他のものには認められない形状である。逆刺先端部の位置からは38同様に逆刺を強調することのない造りであったことがうかがえる。

4. 考察

山本氏は当古墳出土の鉄鎌の形状を「笠葉形」で「燕尾状の」「逆刺がついている」と記述している(山本1955)。後に、原喜久子氏によってこれらの鉄鎌は逆刺柳葉鎌であることが指摘され(原1993)、今日に至っている。今回の観察を通じて、これらの鎌は一段の逆刺を有することが明らかになるとともに、銹化が著しく形態不明とされていた鉄器片については腸抉柳葉鎌の一部であったことが明らかになった。

管見の限りでは、鳥根県内における二段の逆刺を持つ鉄鎌は鹿島町の奥才14号墳出土例に次いで二例目であり、山陰という範囲で見れば鳥取県倉吉市イキス遺跡1号墳出土例を入れ一例しかない。

二段逆刺を有する鉄鎌については、従来「異形腸抉柳葉式」、「尖根式鉄鎌」の範疇で分類、把握されており。本古墳出土の二段の逆刺を有する鉄鎌は、「腸抉柳葉二段逆刺鎌」として認識されるものである(後藤1939、末永1941)。

33-1で見た残存状況が良好な個体と35は、上段の逆刺先端部の幅が下段の幅よりも広いという共通の特徴を有する。しかしながら逆刺部分の形状については、33-1では外反せずに直線上に垂下しているのに対し、35は逆刺先端部が外反するという形態差があることが認められる。これらに対して34の側線は上段下段を通して直線的であり、鎌身部は同幅の内におさまっている。このように、鎌身部の形状については3種類が認められた。鎌身部の造りはいずれの個体も両丸造りである。関部以下の部分については、33の内の残存状況が良好な個体からでしか情報が得られないが、山形の関を有し茎部断面形が扁平な長方形を呈することが分かる。重量については鎌身部のみであるが34で23gの重さがある。鳥根県下で報告されていた唯一の二段逆刺鎌である奥才14号墳出土鎌に比して、長身化が認められるとともに逆刺が強調されていることは一目瞭然である。山陰における二段逆刺鎌の副葬は奥才14号墳を初現として、薬師山古墳の時期には長大化した形態が認められることが明らかになった。

全国的視野に立ち鉄鎌の分類・編年を行った杉山秀弘氏の研究⁽²⁾(杉山1988)によると、全ての鉄鎌について茎部断面形が円形から半形に取って代わるのがⅢ期。Ⅳ期に入り山形関が盛行し、腸抉柳葉鎌のうちでは二段以上の逆刺を持つものが出現するとされる。またこの時期には長頭鎌の祖形が出現するとしている。V~VI期に二段逆刺鎌は20~30gのものへと重量化をみせ、地域色を見せた分布が見られるようになり、VI・VII

期に南九州で盛行すると指摘している。VI期は初期須恵器の導入期であり、長頸鎌の出現によっても特徴づけられるとしている。これに続くVII期以降は長頸鎌が主体となるとし、V～VIII期の間で長大化した腸抉柳葉二段逆刺鎌が盛行していたと位置づけている。

二段逆刺鎌について論じた茂山護氏は、二段逆刺鎌の所属時期について、これらが副葬されている古墳の築造年代と共に2段逆刺鎌を足がかりにし、「平根腸抉・鳥舌形の柳葉式・有抉柳葉式鎌と共に5世紀の所産であり、5世紀中頃には出現する長頸鎌に伴わないことからきわめて限定された時期に生産使用されたことを示すものとも考えられる」とする。また、生産使用の下限については「宮崎県下の5世紀末の地下式横穴では長頸鎌を伴なうことが明らかであり長頸鎌を伴わない二段逆刺柳葉式鎌の下限は5世紀末まで下らないことも考えられる」と指摘している（茂山1980）。

島根県下の鎌の編年を行った原氏の研究では、定型化以前の初期須恵器の段階と山陰の須恵器編年I・II期が該当する時期を鎌2期として捉え、長頭式鎌によって特徴づけられるとしている。島根県内の鎌の変遷を考慮する上で二段逆刺鎌の消長により、原氏の示した鎌2期を細分する事も可能ではなかろうか。これまでに示した杉山、茂山、原の各氏が二段逆刺鎌が盛行する時期について長頸鎌が盛行する直前、あるいはその出現期とした点については共通した認識を持っているといえる。長頸鎌の普及に関しては、杉山氏により地域間での跛行性が指摘されており、また、茂山氏が宮崎県下において長頸鎌が二段逆刺鎌を共伴しないという点から二段逆刺鎌の下限の年代を示したこととは先に触れた。当該地域での二段逆刺鎌、長頸鎌の時期的な関係についてであるが、二段逆刺鎌の導入及び盛行が畿内においてV期であるのに対し、山陰においては長大化した二段逆刺鎌はイキス古墳・薬師山古墳のVII期と下り、大きく時間差があることが指摘できよう。

一方で、薬師山古墳出土須恵器と同時期の須恵器を副葬品として持つ長砂8号墳では典型的な長頸鎌を共伴している。このことからは、畿内と比べると当地域では長大化した二段逆刺鎌が盛行する時期は下るが、長頸鎌の出現期は、さほど遅れるものではないことがわかる。

註

- (1) X線写真は島根県埋蔵文化財調査センターのご厚意により、同センターで撮影していただいた。
- (2) この論文中に示された遺物で本古墳出土品と特徴を一にするものは、腸抉柳葉鎌群—B形式—第II形式—第2型式—a類であり、奈良五条猫塚例（IV）、滋賀・新開古墳例（IV）、奈良・兵家第12号墳例（IV）、群馬・長瀬西古墳例（V）が具体例として挙げてある。なお、杉山氏の示す古墳時代の画期の指標は下図のようになっている。

時期	前 期			中 期		
	I	II	III	IV	V	VI
船載鏡の副葬 開始	仿製鏡の副葬 開始	腕輪形宝器の 副葬開始	方形板革縫短甲	長方板革縫短甲 鉄留技術導入	三角板革縫短甲 挂甲	TK73
中 期						後 期
時期	VII	VIII	IX	X	XI	XII
	TK216 TK208	TK23 TK47	MT15 TK10	MT85 TK43	TK217 TK45	TK217 TK46

(杉山1988) をもとに作成

参考文献

- 後藤守一 1939 「上古時代鉄鎌の年代研究」『人類学雑誌』第54巻第4号
- 茂山 譲 1980 「二段逆刺を有する鉄鎌について—地ト式横穴出土鉄鎌集成覧書(1)—」
『宮崎県総合博物館研究紀要』第5輯
- 末永雅雄 1941 『日本上代の武器』弘文堂書房
- 杉山秀弘 1988 「古墳時代の鉄鎌について」『樅原考古学研究所論集』第八
- 原喜久子 1993 「島根県における古墳時代の鉄鎌について」『島根考古学会誌』第10集
- 山本 清 1955 「島根大学敷地薬師山古墳遺物について」『島根大学論集(人文科学)』
第5号

(田浪文雄)

3. まとめ

今回の報告での新たな認識ならびに要点を示すと以下の通りになる。

- ・須恵器については、いずれも山辺陶邑編年のTK208型式併行期のものとして捉えることができ、山木編年Ⅰ期でも古相のものであることが確認できた。また、これらは在地産の可能性が高いものと考えられる。
- ・石製模造品は、従来全て有孔円板と考えられてきたが、その内1点については剣形模造品であることがわかった。
- ・鉄鎌については、本古墳より出土し、今まで逆刺柳葉鎌と認識されていたものの中に、二段の逆刺を持つ鉄鎌が含まれていることが明らかになった。島根県において、古墳時代の中期後半は逆刺柳葉鎌が主流であったと考えられてきたが、同期に二段の逆刺を持つ柳葉鉄鎌が共存することが明らかになった。

以上のことから、本古墳は古墳時代中期後半のものと考えられるが、これは従来の薬師山古墳の認識を大きく変えるものではない。

本古墳出土の遺物は、学史的にも重要であり、以前から多くの注目を集めてきた。須恵器はもとより、土師器においても薬師山古墳出土のものが編年研究に1定点を与えてきたことは今さら言うまでもない。

今となっては、古墳の規模や墳形、内部施設について明らかにする術はないが、この点を敢えて度外視しても、この古墳の持つ意味は重要である。そのような中で今回、未公表の実測図や新たな認識を示すことができたのは一つの成果である。これにより薬師山古墳より出土した遺物については、全体像をある程度、把握する事が可能になったと思われる。本報告では、最新の研究動向に照らし合わせた細かな考察までには至らなかったが、今回の作業が当地の古墳時代研究に微力ながらも役立てばと願う次第である。

(石田為成)

第1表 土器器観察表

器 番 号	器 種	法量(単位: cm)			形態の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	燒 成	備 考
		口径	底径	器高						
1	高环	17.1	8.2	10.9	・口縁部は外反 ・口縁端部は丸くおさめる ・裏に明瞭な段を持つ ・脚部は屈曲せず、外反しながら開く	・环部 内面: ナデ 外面: ナデ 脚部 内面: ケズリ、ナデ 外面: ナデ、タテハケ ・环部、脚部の接合部に1条の沈澱らしきのが見られる ・脚上部内面に刺突痕、しづり痕あり	赤褐色	・密 ・1mm以下の砂粒を含む	良好	・脚部内面を除いたすべてに 月盛りを施す ・一部に黒斑
2	高环	17.4	—	8.6	・口縁端部ゆるやかに 外反して開く ・肩に段を持つ	・环部 内面: ナデ 外面: ナデ 脚部 内面: ケズリ、ナデ 外面: ナデ、タテハケ ・环部、脚部の接合部に1条の 沈澱らしきのが見られる ・脚上部内面に刺突痕あり ・环部内面に崩壊が見られる	赤褐色	・密 ・1mm以下の砂粒を含む	良好	・脚部内面を除いたすべてに 月盛りを施す ・一部に黒斑
3	高环	17.1	8.0	—	・口縁端部ゆるやかに 外反する ・脚部は屈曲せず、外 反しながら開く	・环部 内面: ナデ 外面: ナデ 脚部 内面: ナデ 外面: ナデ、タテハケ ・环部、脚部の接合部に明瞭な 沈澱あり ・脚上部内面に刺突痕あり ・脚部外表面に花骨状の刺突痕 あり	赤褐色	・密 ・1mm以下の砂粒を含む	良好	・脚部内面を除いたすべてに 月盛りを施す ・一部に黒斑
4	高环	—	8.2	5.9	・脚部は屈曲せず、外 反しながら開く	・环部 内面: ナデ 外面: ナデ 脚部 内面: ナデ 外面: ナデ、タテハケ ・环部、脚部の接合部に明瞭な 沈澱あり ・脚上部内面に刺突痕あり	赤褐色	・密 ・1mm以下の砂粒を含む	良好	・外表面に月盛り を施す
5	小 球 丸底碗	6.7	—	10.6	・口縁部は外反しながら立ち上がる ・口縁端部は丸くおさめる ・全体は球形	・内面: ナデ 外面: ナデハケ ・内面に粘土の接合痕が見られる	赤褐色	・密 ・1mm以下の砂粒を含む	良好	・外表面全体と口 縁部の内面に 月盛りを施す

第2表 須恵器観察表

器 番 号	器 種	法量(単位: cm)			形態の特徴	調整の特徴	色 調	胎 土	燒 成	備 考
		口径	底径	器高						
6	蓋環(蓋)	12.6	—	3.2	・口縁端部に段	外面: 回転ヘラケズリ後ナデ、 同転ナデ 内面: 不定方向の仕上げナデ、 回転ナデ	灰褐色	・密 ・1.5mm以下の砂粒を含む	やや不良 板質	
7	蓋環(蓋)	13.0	—	4.8	・口縁端部に凹面	外面: 回転ヘラケズリ後ナデ、 同転ナデ 内面: 回転ナデ	外面: 灰褐色 内面: 灰色	・密 ・3mm程度の砂粒を少含む	良好	自然釉付
8	蓋環(蓋)	13.4	—	5.1	・口縁端部に段	・外面: 回転ヘラケズリ後ナデ、 同転ナデ 内面: 不定方向の仕上げナデ、 回転ナデ	灰色	・密 ・1mm程度の砂粒を含む	良好	焼きひずみあり
9	蓋環(蓋)	13.2	—	5.4	・口縁端部に段	外面: 回転ヘラケズリ後ナデ、 同転ナデ 内面: 不定方向の仕上げナデ、 回転ナデ、擦おさえ痕	灰褐色	・密 ・2.5mm以下の砂粒を含む	良好	

辨別 番号	器種	法量(単位:cm)			形態の特徴	調査の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	器高						
10	盖坏(腹)	10.8	—	5.3	・口縁端部に段 (受部付板上に沈線)	外面: 回転ヘラケズリ後ナデ・ 回転ナデ 内面: 不定方向ナデ・回転ナデ	灰色	・密 ・1~2mm 程度の砂粒を わずかに含む	やや不良 状質	
11	蓋坏(身)	10.8	—	5.3	・口縁端部に段 (受部付板上に沈線)	外面: 回転ヘラケズリ後ナデ・ 回転ナデ 内面: 不定方向ナデ・回転ナデ	黄褐色	・密 ・1mm程度 の砂粒を 含む	良好	
12	蓋坏(身)	10.4	—	5.35	・口縁端部に段 (受部付板上に沈線)	外面: 回転ヘラケズリ後ナデ・ 回転ナデ 内面: 広範囲に渡り不定方向の 仕上げナデ・回転ナデ	灰褐色	・密 ・1mm程度 の砂粒を 含む	やや不良	
13	蓋坏(身)	11.2	—	5.6	・口縁端部に段 (受部付板上に沈線)	外面: 回転ヘラケズリ後ナデ・ 回転ナデ 内面: 广範囲に渡り不定方向の 仕上げナデ・回転ナデ	灰褐色	・やや粗 ・1.5mm程 度の砂粒 を含む	やや不良	
14	蓋坏(身)	10.9	—	5.3	・口縁端部に段 (受部付板上に沈線)	外面: 回転ヘラケズリ後ナデ・ 回転ナデ 内面: 不定方向ナデ・回転ナデ	灰色	・密 ・~1mm程 度の砂粒 を含む	良好	
15	蓋坏(身)	10.6	—	5.3	・口縁端部に段 (受部付板上に沈線)	外面: 回転ヘラケズリ後ナデ・ 回転ナデ 内面: 不定方向の仕上げナデ・ 回転ナデ	灰褐色	・密 ・1mm以下 の砂粒を 少暈含む	良好	
16	蓋坏(身)	11.5	—	5.1	・口縁端部に段 (受部付板上に沈線)	外面: 回転ヘラケズリ後ナデ・ 回転ナデ 内面: 不定方向の仕上げナデ・ 回転ナデ	灰褐色	・密 ・1.5mm以 下の砂粒 を含む	良好	
17	無蓋高坏	14.9	11.6	12.3	・口縁端部に段 ・口縁部と全体の間に 2条の実輪、その下 段に波状文、透孔の 下に空窓 ・4方向に三角形の透 かし	坏部外面: 受部下1/3程度ケズ り後ナデ・回転ナデ 坏部内面: 受部内面に広範囲に 渡り不定方向の仕上 げナデが見られる。 回転ナデ 脚部外側とも回転ナデ	灰白色	・密 ・1mm程度 の白色の 砂粒を 含む	やや不良 状質	
18	無蓋高坏 (腹)	16.2	11.6	13.1	・口縁端部に段 ・口縁部と全体の間に 2条の実輪、その下 段に波状文、透孔の 下に空窓 ・4方向に三角形の透 かし	坏部外側: 回転ナデ・受部下1/ 3程度はヘラケズ り。その後ナデ 坏部内面: 受部内面に不定方向 の仕上げナデ・回転 ナデ 脚部外側とも回転ナデ	灰色	・密 ・~1mm程 度の砂粒 をわずか に含む	良好	
19	有蓋高坏 (腹)	12.7	—	5.8	・口縁端部に段	外面: 回転ケズリ後ナデ・回転 ナデ 内面: 不定方向ナデ・回転ナデ	暗灰褐色	・密 ・1~2mm 程度の砂粒 をやや 多く含む	良好	
20	有蓋高坏 (高坏)	10.5	8.8	10.4	・口縁端部に段 ・透孔の下段に実輪 ・3方向に方形の透か し	坏部外側: 受部下1/3程度回転 ケズリ・回転ナデ 坏部内面: 回転ナデ・不定方向 の仕上げナデ(3mm 程度) 脚部外側とも回転ナデ	灰褐色	・密 ・~1mm程 度の砂粒 をわずか に含む	良好	
21	塔	8.2	—	6.0		外面: 板状具痕あり。(底部 から上1/2程度) 回転ナ デ 内面: 直部ナデ・回転ナデ	灰色	・密 ・0.5mm程 度の砂粒 を含む	良好	

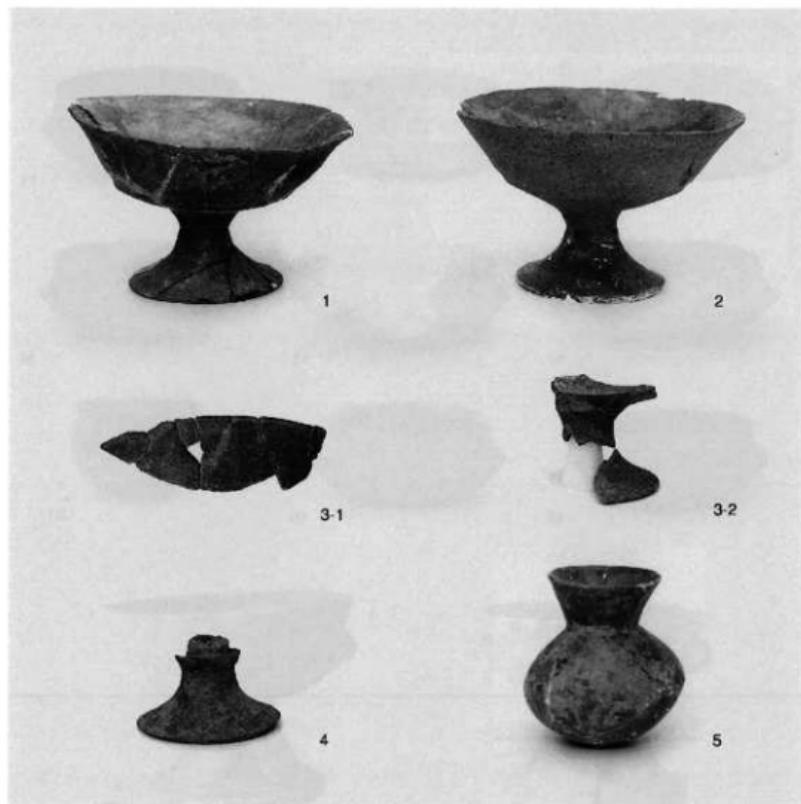
標識番号	器種	法面(単位:cm)			形態の特徴	調整の特徴			色調	助土	成績	備考
		口径	底径	基高								
22	小型道	9.8	—	10.7	・口縁端部に段 ・面部に波状文 ・面部に2条の沈線、 その間に刺突文	外面：回転ナゲタリ・底部不定方角ナゲ・回転ナゲ 内面：底部ナゲ・回転ナゲ・底部にタタキ目あり(ナゲ消し)	—	灰色	・密 ・1~3mm程度の砂粒を多く含む	良好	自然粘付着	
23	大型道	11.8	—	16.5	・口縁端部に段 ・面部に波状文 ・面部に2条の沈線、 その間に刺突文	外面：回転ナゲ・タタキ・カキ目 内面：底部ナゲ・回転ナゲ・底部にタタキ目あり(ナゲ消し)	—	黄灰色	・密 ・1~3mm程度の砂粒を多く含む	良好		
24	壺	17.6	—	26.9	・2条の突帯を挟んで 上部に波状文あり	外面：回転ナゲ・タタキ目あり (ナゲ消し)・カキ目 内面：底盤から上1/2にタタキ目あり	黑褐色 (にぶい 褐色)	・密 ・1~3mm程度の砂粒を多く含む	良好			
25	甕	—	—	—		外面：タタキ目・ナゲ 内面：ナゲ	灰褐色 内面： 黄灰色	・密 ・1~2mm程度の砂粒を多く含む	不良 破片			

第3表 鉄鍼観察表

標識番号	型式	全長	鍼身(単位:cm)			関節			茎部(単位:cm)			重量 (単位:g)	残存状況	備考
			長さ	幅	厚さ	断面形	(平面部)	長さ	幅	厚さ	断面形			
33-1	二段逆刺	14.5	9.5	1.9	0.8	平造	山形	5.3	0.6	—	方形	136	ほぼ完存。逆刺一部欠損	基部に本質・聚結材残存
33-2	二段逆刺	6.1	6.1	1.9	0.5	平造	—	—	—	—	—	136	頭部先端を欠き下段のみ残存	
33-3	二段逆刺	7.4	7.4	2.2	0.5	平造	—	—	—	—	—	136	頭部先端を欠き下段の一部まで残存	
33-4	二段逆刺	8.6	8.6	2.0	0.4	平造	—	—	—	—	—	136	頭部先端を欠き下段まで残存	
33-5	一段逆刺	8.4	8.4	2.0	0.5	平造	—	—	—	—	—	136	頭部先端を欠き下段の一部まで残存	
34	二段逆刺	8.0	8.0	2.3	0.5	平造	—	—	—	—	—	23	頭部先端を欠き下段の一部まで残存	
35	一段逆刺	4.0	4.0	2.1	0.3	平造	—	—	—	—	—	10	上段の逆刺先端から下段の一部のみ残存	
36	腰挿棒茎	3.8	3.8	2.0	0.4	平造	—	—	—	—	—	6	腰部先端を欠き下段の一部まで残存	
37	腰挿棒茎	5.0	5.0	1.8	0.4	平造	—	—	—	—	—	9	腰部のみ残存	
38	腰挿棒茎	4.3	4.3	2.1	0.4	平造	山形	—	0.7	0.6	方形	6	逆刺下段から茎の一部まで残存	茎部に本質・聚結材残存
39		2.7	—	—	—	—	山形	—	—	—	方形	5	逆刺下段の先端から茎の一部まで残存	腰挿棒茎か?

図 版

図版 1

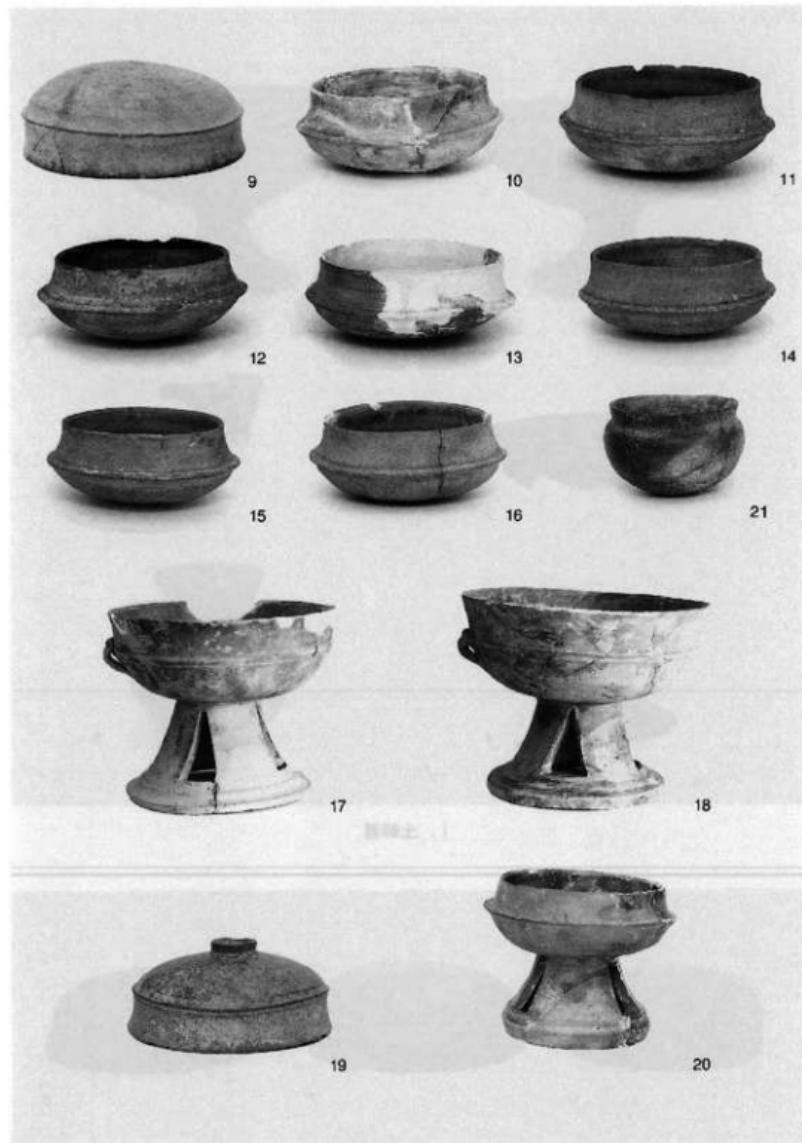


1. 土師器



2. 須恵器 (1)

図版 2



図版 3



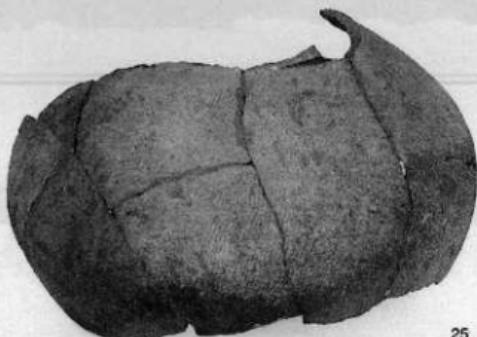
22



23



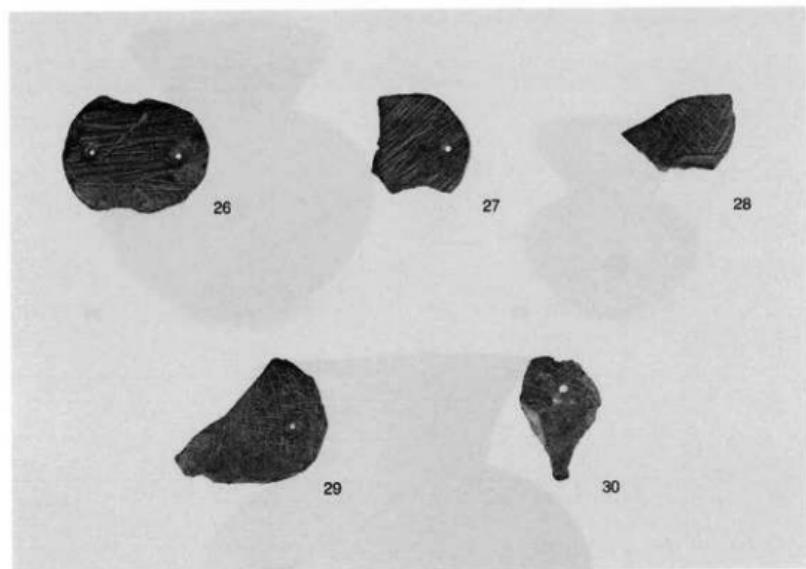
24



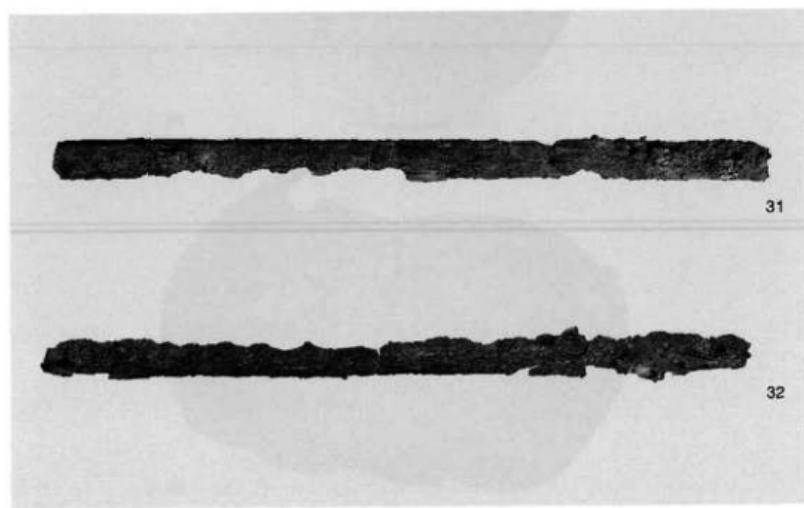
25

須恵器（3）

図版 4

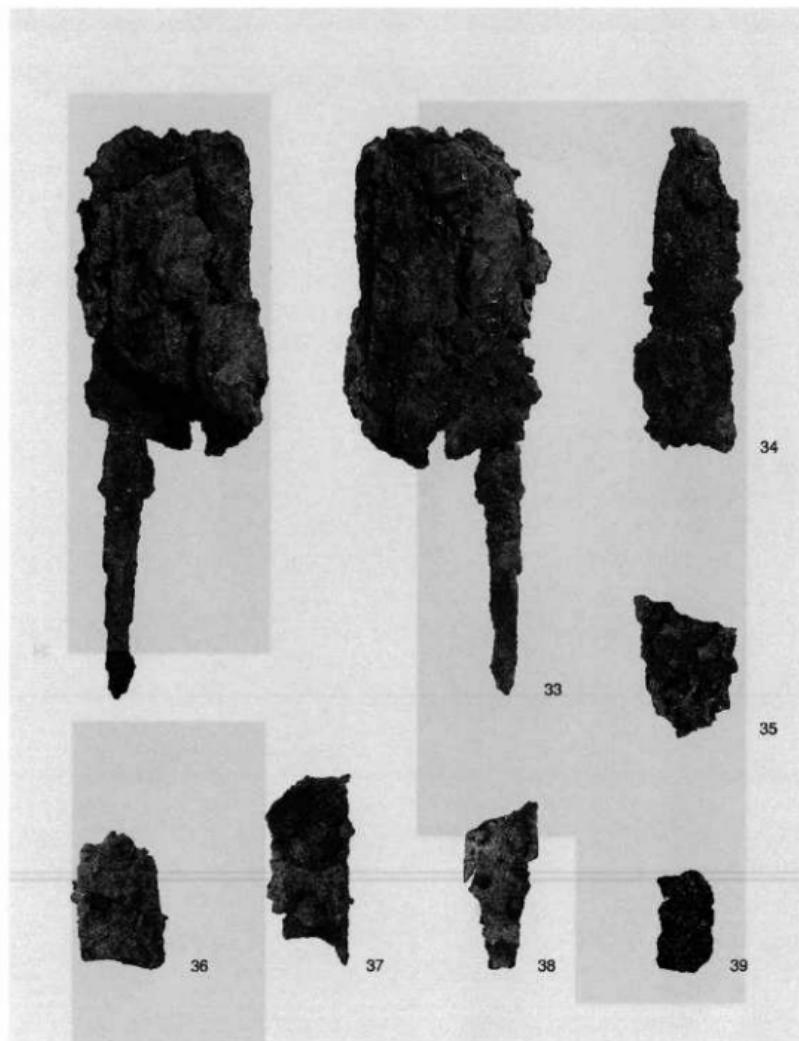


1. 石製模造品



2. 鉄刀

図版 5

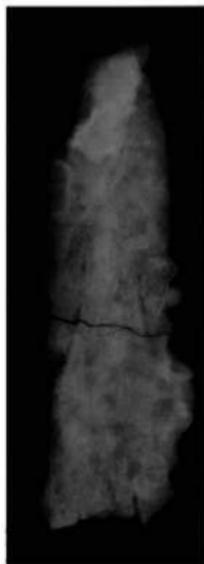


鉄鎌

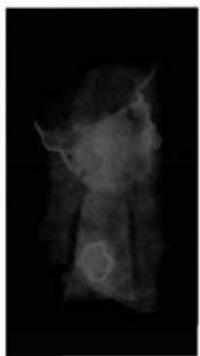
図版 6



33



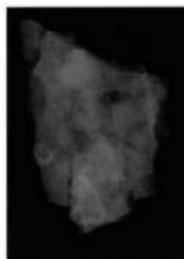
34



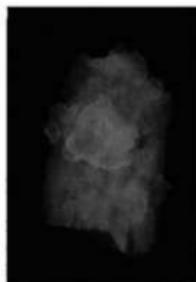
37

鉄錆X線写真（1）

図版 7



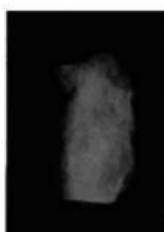
35



36



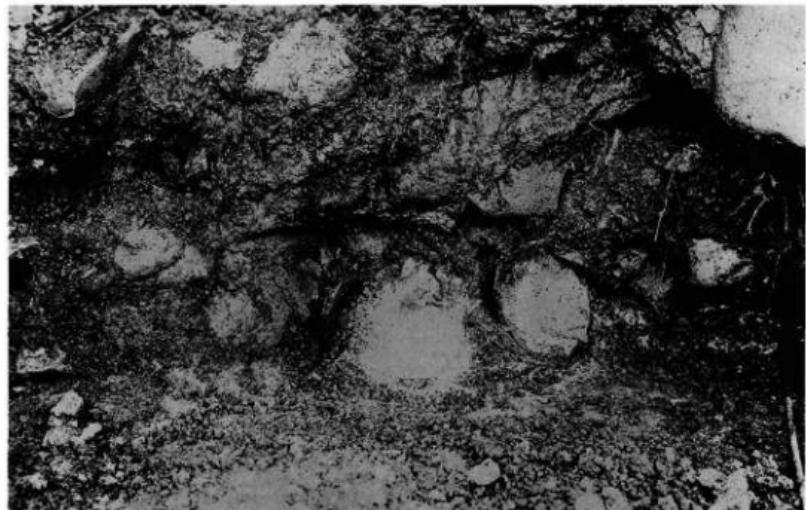
38



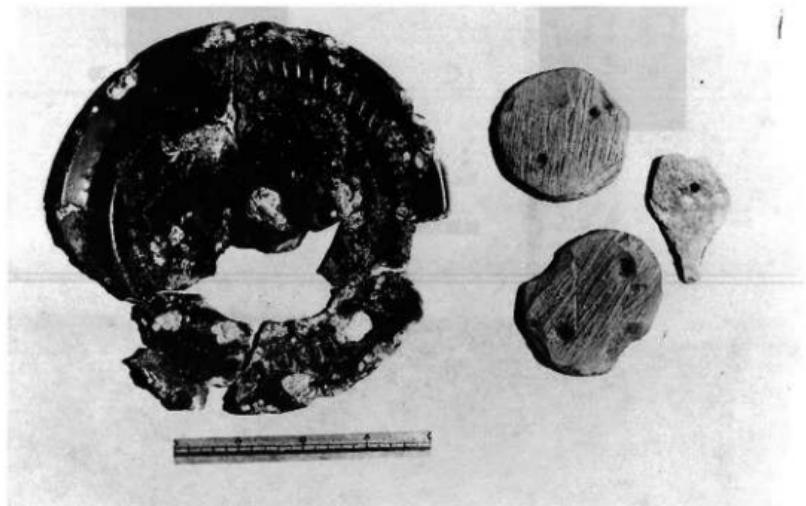
39

鉄錠X線写真（2）

図版 8

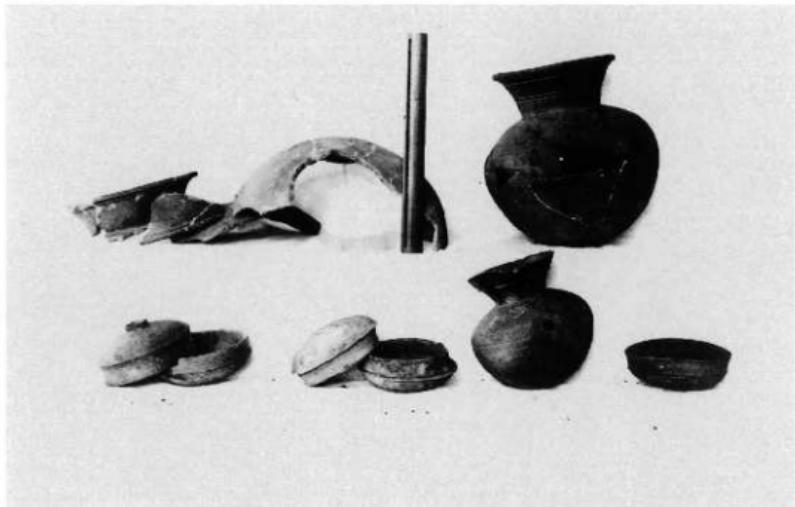


薬師山古墳発見当時の写真（1） 島根大学開学記念資料室蔵



薬師山古墳発見当時の写真（2） 島根大学開学記念資料室蔵

図版 9



薬師山古墳発見当時の写真（3） 島根大学開学記念資料室蔵



薬師山古墳発見当時の写真（4） 島根大学開学記念資料室蔵

島根大学考古学研究室調査報告第3冊
松江市手間古墳発掘調査報告
薬師山古墳出土遺物について

平成14年1月22日 印刷

平成14年1月28日 発行

発行者 島根大学法文学部考古学研究室
〒690-8504
松江市西川津町1060

印刷 (有)高浜印刷
〒690-0133
松江市東長江町902-57
